

然るに、朝廷の方では、飽迄も攘夷といふのであるから、此條約は認める事が出来ぬ、となつて、調印した條約は速に破棄して了へ、といふのであつた。此時に、井伊大老の失策は、此條約調印の勅許を得る爲に、宿次奉書の手續を以て、京都へ、其旨を申出た事であつた。これは調印だけ済ませて、悠然、構へて居れば良かったのだが、少し狼狽氣味で、その勅許を、願つて出たから、朝廷は、之れに對して『それは相成らぬ』と、いはれたのだ。斯うなつて見ると、幕府は、唯だ其命に従ふの外はないが、それでは、外國の方で、快よく承知する筈がなく、況して、幕府の威信にも關する事であるから、これは何處までも、強情に押通して、條約の實行を期せねばならぬ、といふのが、幕府の立場であつた。

それについては、朝廷を、或程度まで威壓せねばならぬ。之れが爲に、第一に手を下す必要のあるのが、攘夷派の浪士である。また諸藩の有志者や、公卿の家臣に迄も、手をつける覺悟を以て、始めなければ、その目的を達するとは至難しい。於此、井伊大老は、非常な決心を以て、老中の間部下總守を、京都へ急行させた。間部は、迅雷疾風の勢ひで、先づ梅田雲濱を捕へ、之を手始めに、攘夷派の浪士や、有士の輩を、片端から引捕へて、江戸へ送りつけて、牢へぶち込んで了つた。吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎等の志士が、首を斬られたのが、此の事件である。前回にも其一端は述べてあるから、先づ是れだけの事にして置く。

此疑獄を惹起してから、井伊大老の悪評は、倍々酷くなつて來た。其結果が、櫻田門外の血祭騒ぎになつて、井伊の首は、飛んで了つた。それ以來の幕府は、全く睨みが利かなくなつて、諸士横行の時代、となつたのである。當だ幕府の威信が、地に落ちたばかりでなく、彦根藩の信用は、殆ど無くなつた、といふても、よい位である。藩士のうちには、甚く之を憤慨するの餘、何とか一と働まして、藩の信用を回復したいものだ、と、考へて居るものもあつたが、何分にも、掃部頭の遺方が、極端に走つて、一般の悪感を、起させて居たので、殆ど手の出しやうがなかつた。けれども、薩長が爲して、今迄の汚名を、雪ぎ度いのあるから、それが、チヨイ、一掃して來るので、

いろ／＼の浮説が、その間に、起つて來るのは、止むを得ない事であつた。

此處は、京都の遊里、祇園の料亭に、一團の浪士が集まつて、何事か、頻に協議の眞最中であつた。浪士といふても、皆な何れかの藩中で、相當の資格ある人らしい。其頃の習慣として、一たび藩を離れて、京都や江戸へ出てくれば、浪士と稱して、多く藩名を稱へぬ事にして居た。萬一の失敗をした場合に、藩名を出して、藩侯へ、果を及ぼしてはならぬ、といふ注意からであつた。

『遅いなう。既う來る筈ぢやが、全體、何を致して居るのか』

『拙者が、逢ふて來たのぢやから、彼れも、承知の上で御座るが、平生の吞氣からでも、あるまい』

『イヤ、彼れは、歳の割合に沈着があつて、如何に急いでも、自分の氣に容らぬ事には、悠々と構へ居るものぢや。今日も、大概そんなことで御座らうよ』

『それでは、徐々、飲み始めると致さうか』

『可からう』

忽ちに酒肴が運ばれて、美しい妓も、三四人來た。

七

英雄は色を好む、といふが、果して何んなものか。色を好むのが英雄なら、天下の人、多く英雄ならざるなしてある。けれども、よく考へて見ると、英雄だから色を好むのか、色を好むから英雄なのか、その區別が、一寸解らなくなる。實際について視ると、世間から偉いと、謂はれて居る、人の多くは、色を漁り、女を好むの風がある。此道にかけては、如何なる人でも、多少の談柄を有つて居るから、可笑しい。



昔の頼朝や秀吉は、暫く措いて、近世の偉人と、いはれて居るものでも、皆な女で、苦勞をして居る。大西郷の如きでさへ、大島に流罪中、あいがなといふ美人に親んで、子供をつくつて居るではないか。京都市長であつた、西郷菊次郎が、則ち其人である。大久保利通は、謹嚴の政治家として、何人も、其威容に懼れをなした、といふが、それでも、祇園の一方の娘に、子供を生ませて居る。木戸孝允は、前の二人に比べると、一層其道にかけては、發展して居た。

今靈山の頂きに、夫人松子と共に、長く眠つて居るが、松菊といふ雅號は、此夫人が、三本樹の幾松といつて、藝妓を勤めて居た時分から、深い染馴で、其名の一字を、取つて附けたのであるから、畢竟は、惚氣を、露骨にいふて居ると、同じ事だ。但馬の出石に、潜伏して居る時には、雜貨屋の後家さんに通じて、入夫になつた事さへある。

こんな調子で、木戸の發展は、ナカ／＼素晴しいものであつた。其子分として、人と爲つた俊輔、先輩の爲る所に似てゆくのは、固より當然であるのみならず、その天性が、女好に出来て居るのだから、従つて、俊輔と女の關係は、珍らしい事てなく、博文となつて、屢次世の噂に上つた女沙汰は、昔の俊輔時代からの引繼になつて居たのである。

祇園の二樓に、人を待合せて居るのは、井上聞多、高杉晋作、久坂玄瑞の三人、それに、堀眞五郎が、後れて来て、四人となり、猶ほ他の一人を、待受けて居るのであつた。

『オイ、堀ツ、貴様は、知つて居るぢやらう。俊輔の奴、近來、情婦が出来居つたさうで、大分浮かれて居る様ぢやが、その對手は誰れか、貴様は、知つて居らう』

と、斯う言ひ出したのは、俊輔と、殊に深い交情の、聞多であつた。『うむ、己も聞いて居ることぢやが、彼奴は、却々巧く潜つて遊び居るから、少しも解らんよ』

『己が何うした、といふのか』

『貴様は、知つて居るぢやらう、といふのだ』

『事珍らしさうに、左様事を尋ねて、何うする覺悟か』

『別に何う、といふ事もないが、知つて居るなら、聞いて置き度い、といふまでの事ぢや』

『然らば、話してやらう』

『ほう、その對手は……』

『政千代ぢや』

『エツ、政千代ぢやと』

『うむ、驚いたか』

『彼奴は、實に速いからう』

井上の呆れたばかりでなく、高杉も、堀も、均しく呆れて、跡は、俊輔の噂で、しばらくは賑つた。

仲居を案内に、俊輔は、微醉を帯びて、悠々と、やつて來た。座に居た藝妓も、立上つて迎へる。一同も振向きながら、

『やア、伊藤か』

『大分ゆつくりぢやつたのう』

『待つて、居つたぞ』

如何にも、待兼ねて居た、といふ容子が、歴々と眼に見える。伊藤は、ニヤ／＼笑ひながら、

『遅くなつて相濟まん。許して呉れ』

酒臭い呼吸をしながら、座についた儘、しばらくは、喘々いつて居る。



「オイ、早速の相談ぢや」  
高杉が、斯う言ひ乍ら、膝を進めた。久阪は、左右の藝妓を顧みて、  
「お前等は、しばらく彼方へ、行つて居れ」  
「ハイ、御免やす」  
皆な伴れ立つて、坐を避けた。  
「彦根の一條についてぢや」

「ふむむ、その彦根の一條が、何としたか」  
「此間は、片山寛一郎を遣つたが、何分にも警戒が嚴重で、一歩も城下へ、はいること叶はず、空しく引上げて來居つたのぢや。それから、榎崎八十槌を遣つたが、それは城下へはいつたけど、何事も知り得ずに、歸つて來たのぢや。何うも、彦根藩の警戒が嚴しいので、手のつけやうがなく、困つて居る矢先へ、昨日は、學習院から人が來て、久阪に來て呉れ、といふので、すぐ行つて見ると、矢張り此の事の相談ぢやつた。その話の容子では、彦根藩の陰謀は、餘程進んで居るやうに思はれるから、此儘には捨て置けぬ。所で、井上とも相談の上、貴様を待受ける事に、なつたのぢや。これから先の話は、久阪と、井上に、聞いて呉れ」  
不意に、話かけられたのではあるが、併し、其事柄は、豫て俊輔も、知つて居るのだ。それについては、多少の意見もあるけれど、兎に角、久阪の話は、聞いてからの事にしよう、と、俊輔は、相變らず沈着して居た。

八

學習院とは、讀んで字の如く、當時の御所内に設けられた、朝臣の學問所である。嘗て朝臣のみならず、天子も、親しく出御あつて、御學問を、なさる所であつた。毛利藩と、相許して居た、公卿が、此學問所を利用して、御幕の計畫を始めたとあるが、歳の壯い、元氣のある公卿を、多く此處に集めて、時には、浪士や有士の輩までも、種々の名義を以て呼入れ、幕府に對する策を、建て、居たのだ。されば、諸藩の浪士のうちからも、別に役を設けて、學習院の專屬に、なつて居たものがある。大正七年になつて死んだ、土方久元の如きも、その一人であつた。

久阪玄瑞は、殊に深く出入して、學習院の若公卿の中に立交つて、却々に信用が厚かつた。この關係から、何事か起る度に、學習院へ、出入して居たのである。  
彦根城の修繕を始めたのは、何か仔細があるに違ひないとあつて、段々其内部を、搜つて見ると、意外千萬にも、鳳駕を、彦根城へ移し奉つて、大に倒幕派と、争ふ覺悟である、との事であつたから、學習院の連中が、大いに驚いた。そんな事にでもなつた日には、それこそ、取返しつかぬ事になつて、今迄に、都合よく運んだ、一切の計畫が、水の泡に、なつて了ふ。若し、此風説の通り、彦根藩に、左様した計畫があるならば、一刻も速く、其裏を行つて、勤王倒幕の目的を、果す事にせねばならぬ、と、狼狽と憤慨の取交で騒ぎ出した。そこで何事にも、頼りにして居る、長州藩士の力を要するのは、即ち此時であると、すぐに久阪を呼びにやつて、此事の相談を、はじめたのであつた。

久阪は、歳こそ壯かつたが、却々に思慮のある男であつたから、此風説に、餘り信を置かなかつた。けれども、櫻田事件の爲めに、内外の信用が、地に墜ちた、彦根藩としては、何か此際に、世間の人を驚かさやうな、目覺しい事を、やつて退けやう、とするのは、固より當然の事であるから、此風説とても、全然、嘘とのみはいへぬが、それにしても、多少は疑はしい所もあるから、其處で、久阪は、學習院から歸ると、すぐに井上や高杉にも、此事を打明け、相談を始めたのであつた。  
三人が、相談した末、兎に角、誰れかを密偵にやつて、此風説が眞實であつたなら、それから徐ろに、計畫を廻らさう、といふ事になつて、取敢ず堀眞五郎を呼んで、此密偵の事を、頼んで見たが、堀のいふ所では、何分にも大事



件であるから、自分一人でも至難しい。誰でも、尙う一人欲しい、といふのであつた。それから、伊藤俊輔が可からう、となつて、俊輔の居所を捜したが、容易に分明らなかつた。四方に、人を走らせて、漸く見當がついたので、井上と堀が、俊輔を捜出したのである。

俊輔は、政千代といふ美しいのが、漸く手に入つて、近頃では、一生懸命になつて、各所の酒樓に流連もすれば、東山の邊の貸席の一室に、人知れぬ密會を、重ねて居たものだ。尤も、斯うした事は、俊輔ばかりでなく、井上には、君尾といふ馴染があり、高杉には、お辰といふ、可愛い女もあつた。各自に、一人位の女は、皆な有つて居たのであるから、俊輔の雲隠れに、呆れるほどの正直者はなかつた。

高杉と久阪が、交々に彦根藩について、聞込んだ事を打明ると、それを、悉皆聞いて了つて、伊藤は、膝を進めた。

「彦根へ、行つて貰ひ度いのぢや」

「つまり、其事の實否を、見届けて来て呉れ、といふのか」

「左様ぢや」

「宜しい。引受けた」

「堀も行くといふから、二人で頼む」

「可し」

「それでは、何日行つてくれるか」

「一日も速い方がよからうから、今夜すぐに行かう」

「さうしてくれれば、此上もない。然らば、宜しく頼む」

「承知いたしました」

酒を飲めば酔ふ。女を見れば、腰が抜ける。けれども、いざとなつたら、酒も女もないのだ。現時の有志家のやうに、一時凌ぎの浮いた調子で、其日々々々を、胡魔化して居るのは、大に違ふ。眞剣に、天下の事を、憂ひての活動だ。苟も皇室の一大事と聞いては、毫の猶豫もせぬ。好きな酒も、惚れた女も、左様なつたら捨て了ふ迄の事だ。

「オイ、伊藤ッ」

井上が、不意に、俊輔を呼んだ。

「何ぢや」

「貴様、近頃は、大分粹事に、浮身を棄して居る、といふ事ぢやが、彦根へ行くのが今夜では、もう逢ふて居る間もなからう。ハツハ、、、」

「うむ、彼女に逢はずに行くは、些か心残りぢやよ」

「どうぢや。己が代りに逢ふてやらうか」

「馬鹿な事を言ふな。そんな事をされて、堪まるか」

「イヤ、己が代りに逢ふて置く、といふに、不思議はなからう」

「それには及ばぬ。井上の癖の悪い事は尋常でないから、うつかり女の事なんぞ頼めるものか、なア高杉、左様ぢやないか」

高杉は、宛も面白さうに、笑ひ倒れた。

「アツハ、、、井上の癖も悪いが、伊藤も、他の事はいへぬぞ。己なんぞは、貴様等の事を、皆な知つて居るから、己の前で、そんな争ひは止めるが、可い」

「左様いふ貴様も、同じやうなものぢや」

「ヤツ、己も駄目か、それぢや無瑕は、堀ばかりかな」



九

井上は、手を振つて、  
「馬鹿なツ、堀が、一筋縄でゆく奴か、ハツハ、、、」

馬鹿氣た女話に、酒盃の數も重なつて、四人ともに酔ふた。井上の惡戯から知らせた、政千代が、それと知らずに、遣つて來た。今迄は、手持無沙汰にして居た、他の女も、之れに力を得て、盛に喋り出す。此處では面白くない、とあつて、更に魚品へ移つて、また飲み出した。繩手大和橋の北入東側、其頃の魚品は、毛利家へ、出入を許された貸座敷で、藩士は、大概、此樓へ飲みに行つたものだ。

文久二年の九月、上旬、俊輔は、高杉等に送られて、京都を離れ、近江へ向ふ事になつた。彦根藩の警戒が、如何に嚴重であるにしても、何とか工夫を廻らして、履み込んで見る氣ではあるが、さて、國境を侵す事は容易であつても、城下へ這入る事の至難しいのは、今迄に二度も、失敗つて居るから、俊輔にも、自ら其覺悟はある。

伊藤も、堀も、共に氏名は變へた。密偵のやうな役で行くものが、眞の氏名を稱へるのは、萬一の事の起つた場合に、宜しくない。伊藤は、越智斧太郎、堀は、有田又四郎、斯ういふ風に、氏名を變へて、先づ近江の八幡まで來た。普通の土地見物とは違つて、大切な要件を帯びての密行であるから、何處までも深い注意を要する。幸ひ、八幡には、西川吉助といふ、篤實な有志家が居て、伊藤は、豫て交際があつたから、先づ之れを訪ねる事になつた。

「ようこそ來られた。まア悠々、遊んで居て下さい」

「イヤ、左様は致して居られぬ。些と御相談申し度い儀の御座つて、斯く御訪ねを致した次第ぢやが、足下は、近頃御城下へ參られたかな」  
「城下へは、屢々參る」

「何事か變つた事でも御座らぬが」

「別に之れといふて、變つた事も御座らぬが、櫻田事件以來は、藩の方でも、よほど弱つて居るやうぢや」

「ふむむ、弱つて居る、といふのは、そりや、何ういふ筋合か」

「掃部頭様が、彼アいふ事になつて、彦根藩に對する、内外の信用は、全く地に墜ちて了つたやうなものぢや。殊更に、朝廷の御見込が、頗る宜しくないとの事、そりや左様なければならぬ譯ぢやが、今では、幕府の方の氣受も、餘り宜しくない、といふのぢやから、まア板挟みになつて、双方の氣受を、悪くして了つたやうなものぢや。斯うな次第で、藩の重役始め、多少の思慮を有する輩は、何とか致して、猶う一度、彦根藩の名を、唄はれ度いとの考へを有つて、何事か爲し度いとは、考へて居るやうぢやが、何分にも、今日の場合では、いづれへも、手が出まい。畢竟は掃部頭様の遣過から起つて、先頃の事件であるから、此回復しは、容易に出來まいと、存する」

「成程、彦根藩としては、左様ある可きぢや。併し、何事か、深い計畫もあらう。豈夫に、此儘では居るまい」

「さ、其處までは判らぬが、焦つて居るには違ひない」

「實は、拙者等の來た要件は、其事についての詳細が、知り度い爲めて御座る。彦根藩の動靜は、直に京都へ響くものぢやから、豫め彦根藩が、何ういふ事を企て居るか、それを一通り知つて置き度い、と思つて、堀と拙者が、其秘密を捜る役廻で、斯くは推參いたした次第ぢやが、足下に聞けば、大概の事は判るものと、豫め期して居たので御座つた」

西川は、初めから、兩人の來た様子がちと變だとは、見て居たのだ。何時も、來ては、泊つて行くが、今度のやうに、根掘り葉掘り、何かを聞きだがるのは、慥に秘密を、有つて居るに違ひない、と、流石に、早くも見抜いて居たから、今城下の事を聞かれたので、遠慮なく藩情の一端を、漏らしたのであつた。

「藩の事と申しては、此上の秘密も御座るまいが、兎に角、名譽の回復しに、苦心いたし居る態は、我等の眼にも、



見える位で御座る」

『それほどに、先年の事を、氣に有つは、どうも解しかねる。彼れまでに、憂國の志士を、酷い目に逢はせて、今更名譽の回復しても、御座るまい』

『イヤ、そこが面白い所で、彼れまでは、勤王の人が居つても、一切口を緘黙して居たのぢや。それが、昨今では、全く一變して、勤王の説が、大分強くなつて來居つたのぢや。藩の方でも、今迄のやうに、無理に抑へやうとせず、却つて是等の人の力を借りて、藩の名譽を回復さうと、致して居るので御座るよ』

『はア、そんな事に、なつて居るのか』

『左様……』

自分等が想像したところとは、話の赴きが、變つて居る。西川の語る所からすれば、鳳駕を、彦根へ移し奉る、と云ふやうな事は、ないやうにも思はれる。けれども、此一場の話を以て、今度の用向を、済ます譯にはならぬ。どうしても、城下までは這入る必要があるのだ。

『どうぢや、西川氏、拙者等兩人が、城下へ、はいる手蔓はあるまいか』

『何ッ、城下へはいらるゝとか』

『左様』

『宜しい。何とか心配いたさう』

『何分たのむ』

『一兩日は、御猶豫下さい』  
斯ういふ相談から、西川は、萬事を呑込んで、兩人を泊めておいて、自分は、直に出て行つた。

垂井といふ所に、多賀神社の神官で、車戸幹といふ人があつた。夙に勤王の志を抱いて、四方の志士と交り、相當に、人にも知られて居た。西川との交際は、殊に深いものがあつて、毎に往來して居たのである。

明治維新の變革には、神官と僧侶の關係が多く、その次ぎには、儒者であつた。併し、實際の働きは、儒者の方に多く在つて、神官と僧侶の方は、陰の働きが、多かつたやうに思はれる。

儒者の方は、自然と浪人に接近し易く、歴史の跡を辿つて、古今の成敗や、爲政者の興廢について、自由の解釋を爲し得る立場に居るから、何うしても、當代の政治に對する、批評眼もあるので、世間が騒がしくなつて來ると、儒者の家は、一種の論客が、集まつて來るやうになる。其間に、討論研究された意見から、意外の運動も、起つて來るのであつた。

神官と僧侶の方は、それほどに、世間と交際がなく、出入する人も、自ら異つて居る。けれども、神官や僧侶のうちから、熱烈な愛國者が、出て居る數は、決して少くない。神とか、佛とか、いふことについての、信仰の力から來る、奉公の念には、却々強いものがあつた。

車戸といふ人は、一般にいふ所の、活動的人ではなかつたが、熱烈な勤王家ではあつた。彦根藩士の間にも、相當の知己があつて、毎に勤王の思想は、その學び得た、國學の上から、巧に鼓吹して居たのである。

掃部頭の時代には、容易に勤王論などを、唱へる事は出来なかつた。併し、櫻田の事があつてからは、藩の事情も、大分違つて來たし、藩士中にも、幾分か勤王を唱へる人が、現はれて來た。それを、藩廳の方では、強て抑へつけるやうなこともせず、可成く傍觀の態度で、自然の成行に任せる、と、いつたやうな、調子であつたから、車戸の立場も、前と違つて、頗る樂になり、有志者の出入も、追々に、はげしくなつて來た。



神殿の片隅に、西川と差向ひになつて、車戸は、今頻りに話込んで居る。  
『それでは、彦根の城下へ、其人を送り込めば、宜しいのか』

『左様々々』

『伊藤俊輔に、堀眞五郎といふ人ぢやな』

『その伊藤が、越智斧太郎と申し、堀は有田又四郎と、稱して居りまする』

『可し、何とか工夫して、城下へ手引して進ぜよう』

『それは忝けない。然らば、明日にも、兩士を送ります故、何分ともに御願ひ申す』

『承知いたしました』

『只今の御話では、伊藤と申す仁、餘り身分のあるやうにも思へぬが、流石に、毛利侯は、武門の名家とて、御家臣

には、良い人物が、澤山に御座るやうぢやな』

『如何にも、其通りで御座る。聞及ぶ所に由れば、桂小五郎、周布政之助、高杉晋作、久坂義助、井上聞多等の人々

は、いづれも一騎當千の武士、内外の事は、多く此人々の力で、決まるのぢやさうな』

『まア、兎に角、伊藤といふ人にも、堀といふ人にも、逢ふて見てからの事に致さう。城下の方へは、何とでも手引

が出来ます』

『それでは、失禮いたす』

西川は、車戸の承知が、案外に手輕であつたから、却つて幾分の疑念も生じ、萬一の事があつてはならぬ、と、尻

を落ちつけて、悠々話込んで見ると、其承知は、決して安請合でなく、心からの引受けてあつたから、大に安心して、

引取つて来た。

八幡の西川方では、伊藤と、堀が、西川の便りのみを、待つて居た。所へ、西川が、歸つて来て、車戸の事を、詳

しく物語つた。

『さ、さういふ次第であるから、これより直ぐ様、お出かけなされては、如何で御座るか』

『それが、可からう』

これから支度を整へて、兩人は、垂井へ向ふ。西川は、紹介者として、従いて行く事になつた。

話頭一轉、車戸は、西川が歸ると、すぐに家を出て、彦根の城下へ、遣つて来た。豫て懸念にして居る、澁谷騷太

郎といふ醫者を、訪ねる爲めであつた。澁谷は、極く淡泊な性質で、一般の人の氣受も頗る善く、病家も少からず有

つて、却々繁昌して居た。平生から、書物が好きで、殊に、古今の歴史には、よく眼を通して治亂興亡の跡に精しく

一通りの歴史家が、舌を捲いて驚くほどであつた。されば、評判の歴史通として、藩士の間にも、知れ渡つて居り、

藩中の青年には、非常に喜ばれて、澁谷先生の信用は、病氣を癒す醫者としてよりは、却つて有志家としての方が、

厚かつたのである。

今日も、往診を了つて、歸つて来たのが、點燈すぎであつた。既う五六人の青年が、待ちうけて居て、先生の歴史

談を聞かう、とするのだ。澁谷は、食事も匆々にして、書齋へ現はれた。

『これは、お揃ひですな』

と、云ひながら席につくと、一人の青年が、膝を進めて、

『終日の御勤勞で、嘸ぞ御迷惑とは存じますが、豫ての御約束に由つて、お伺ひいたしました。今晚も、何か有益な

御高話を、拜聴いたしたく、一同打揃ふて、參りました』

『それは、ようこそお訪ね下された』

『まだ不參のものもありますが、徐々お話しを願ひませうか』

『宜しい。何からお話し致さうか、エー、こつと……』



青年は、樂しげな顔をして、澁谷の話出すのを、待つて居た。

一一

少焉あつて澁谷は、一同に向ひ、徐ろに説き出したのは、太平記から材料を採つた、一場の勤王論であつた。極めて親切に、辭は平易、諄々として、説き來る勤王論に、一同の魂は、もう引きつけられて了つた。一人の青年は、澁谷の言の切目を待つて、

『先生に、御伺ひ致します』

『何ぢや』

『先生の御説の如く致しますと、我彦根藩は、何うなりませうか』

此突拍子もない質問には、澁谷も驚いたが、他の青年も、變な顔をして居る。

『安政五年の大獄、彼れに囚はれましたのは、諸藩の勤王有志と、承知して居りますが、我が先君の爲された、彼の疑獄は、正當なものでありましたらうか。それとも、不義の事でありましたらうか。先生の御説に由りますれば、朝廷の仰せに背きますものは、逆臣であるやうに承はりましたが、左様相成りますと、先君の爲された事は、まさに逆臣の所爲で御座りますが、此儀は、如何考へまして、宜しく御座りますか』

澁谷が、今説いて居る所へ、當嵌めて見れば、井伊直弼の所爲は、全く朝廷の御思召に背き、幕府の武力を以て、勤王の有志を、一網打盡的に、ヤツつけたのであるから、逆臣といふ可きである。けれども、それは、此藩士の口にする可き事ではなく、努めて此事件の批判は、避けなければならぬのだが、其處は、歳の若い、世故に馴れぬ、一本調子の青年の常として、そんな參酌もなく、思ふ所を正直に、口に出した次第であつて、實は、此邊が青年の價値であらう。流石の澁谷も、一寸答に困つたが、まさか開流しにもされず、何とか理窟だけは、附けて置かねばならぬ。

『彼の時の事は、今此處で、彼是言ふのは止めたらどうか。すべて、天下の事に當るものは、其時の事情と、前後の事を考へて、臨機の處置を執る事もある。先君としては、幕府の大老職であり、時の事情から、餘儀なく、彼の際は、非常の手段にも出られたのであらう。また捕へられた人の中には、眞に勤王の志のみからでなく、一意に、幕府を、倒さうの野心から、表面に勤王の美名を、冠つて居たものもあつたのぢやから、幕府と致しては、彼のやうの手段に、出る外はなかつたらう。要するに、彼アいふ場合に當つた、大老や、老中は、實に苦しいものぢや。先君の御心は、決して朝廷に背く、といふやうな事はなかつたのであらう。併し、彦根藩に對する、一般の注意は、矢張り今のやうな疑ひからである故、各自も其心して、世人の疑惑を解く事に、勤めなければならぬ。之れに就いては、追々に了解やう、お話しいたさうから、今晚は、是れにて御免蒙り度い』

澁谷は、苦しい辯解で、一時は胡魔化したけれど、一同の歸つた跡で、思はず太息を吐いた。  
『ア、偉いものだ。時勢の關係から、此藩の青年にも、彼アいふ考へを有つものが、出て來るやうに、なつたのぢやから恐ろしい。藩の重役も、大に考へて呉れぬと、これから前途が、心配でならぬ』

『エー、先生』

澁谷が振り返ると、執次の書生が、手を突いて居た。

『何ぢやな』

垂井の車戸先生が見えました

『おう、左様か、すぐ此方へ、お通し申せ』

『ハッ』

書生が、玄關へ引返すと、車戸は案内されて、はいつて來た。



「やア、車戸さん。どうぞ、是れへ……」

「お客のやうでしたな」

「イヤ、お客といふほどのことでは御座らぬ、只今までは、藩中の若い人々が、集まつて居たので御座る」

「相變らず青年の指導は、並大抵の事では御座るまい」

「何の、つまりらぬ歴史の昔話に、時間を消すまでの事ぢや、ハツハ、……」

「併し、その歴史の話から、存外に花の咲くものぢや」

「それは、左様ぢや。今も今とて、若い人に、意外事を尋ねられて、一汗かいた所で御座つた」

「ふふう、そりや全體、何ういふ事でしたな」

是れから、澁谷は、一通りの物語りをした。車戸は、感に打たれて、

「成程、時勢は恐ろしいものですね。自分が、彦根藩のものでありながら、先君の身について、左様いふことを疑ふて居るやうでは、大分世間が、變つて來ますぞ」

「拙者も、今さういふ考へをして居た所であつた。それにつけても、彦根藩の悪評には困つたものぢや」

車戸は、聲をひそめて、

「實は、折入つての御相談で参りました」

「彦根藩が、又悪い噂を、立てられて居るのぢや」

「そりや。何ういふ噂かな」

「此頃の城の修葺についてぢや」

「はア、城の修葺……拙者も、一二の人にいふたことが御座つた。此際の城の修葺は、徒らに世間の疑ひをひきはすまいか、と思つて、大に論じた事もあるのぢやが、さては人の考へに變りはないか。此事についての疑ひとは、そりや、何ういふ事ぢやな」

一一一

是れから、車戸が、澁谷に物語つたのは、鳳輦を、彦根城へ移し奉る、との風説の一條であつた。餘りに馬鹿馬鹿しい噂とは思つても、世間の人は、それを本當の事として、深く信ずるのだから、仕方がない。また、彦根藩に對しては、左様した疑惑を、抱くものゝあるのも、實は止むを得ぬ次第である。先代の直弼が、餘りに朝廷を威壓し、勤王派に對して、猛烈なる迫害をなした事は、現に車戸も、澁谷も、酷い事だと思つて居たのだから、他藩の人、殊に勤王派の、長州人から見れば、今度の風説も、眞實の事の如く思ふのは、當然の事であらう。従つて、澁谷も、車戸の話を打消す丈けに、強い口實はなかつた。

「斯やうな次第で、越智斧太郎と、有田又四郎の兩士が、拙者の宅に、來て居られるのぢや」

「その兩士は、何の爲めに、來て居られるのか」

「されば、此城下に、入込み度いといふのぢや」

「何の爲めに……」

「鳳輦を移し奉る、といふ事が、果して眞實なるや否やを、確かめ度いといふのぢや」

「ふふう……」

「斯かる疑ひを受くるは、彦根藩の不名誉なれど、今迄の藩の方針が、悪かつた爲めて、是れは致方がない。此上は兩士を導いて、城下の有様も見せ、藩の内情も、明白に致し度く存するが、貴方の御考へは何うぢや」

澁谷は、考へて居て、容易に答へをせぬ。車戸は、少し焦氣味で、



「如何で御座る。御同意下さらぬか」

「左様さ」

「拙者の考へては、此兩士を導ひて、彦根藩の潔白を、明かにして置かぬと、他日の沙汰が恐ろしい。他藩の武士を導いて、我城下へ引入るゝは、如何にも恥辱のやうではあるが、其潔白さへ明かになれば、或は之れが幸ひとなつて、彦根藩の信用も回復せやうかと、拙者は、深く考へて、御相談申すのぢやが、貴下は、何と思はるゝか」

於此、澁谷は、漸く覺悟が決いたものか、  
「如何にも御道理ぢや。宜しい、藩の有志には、拙者から相談する事にしよう」

「然らば、彼の兩士は、早速案内するが、さて、その宿は何れに致して可からうか」

「拙宅に致さう」

「何と、尊邸を宿所にして下さるとか」

「如何にも……」

「それは、何よりの事、是非左様願ひ度い」

相談は定まつたから、車戸は、直に垂井へ、引返す事になつた。

此澁谷が、後年の谷鐵臣といふ人で、却々維新の際には、活動した志士である。

彦根藩士のうちには、既に時代を遠觀して、大に名譽回復の運動を始めよう、として居た人も多かつたのだ。寺社方元締役の長谷左源太、至誠組の川上吉太郎、其他にも、相當に有志者があつて、寄々に集つては、相談に、日を送つて居たが、京都の方で、悪い噂の高い、今度の事は、少しも知らずに、只だ京都へ乗出さうとして、それ／＼に苦

澁谷が、醫者であるのを幸ひに、此事について、相談のある時は、何日も、澁谷の宅へ、集まつて居たのだ。何か知らぬが、澁谷から、迎が来たので、追々に其連中が、集まつて来た。澁谷は、車戸と話合つた事を、一と通り打明けて、

「拙者も、一時は斷らうかと思つたが、否さうでない、對手が、長州藩士なら、此上もなき幸ひであるから、充分に藩の内情も話して、一切の疑惑を、解いて貰ひ、朝廷の方へも、自然と、其次第の明白になるやう、致し置くのは、最も肝要の儀と存じて、同意いたし、車戸は、立歸らせましたが、若し、拙者の取計ひが宜しくない、となれば、拙者にも、覺悟が御座る。此一事は、彦根藩の浮沈にも、關する事ゆゑ、篤と御熟考の上、是非の御答へを、承り度い」

武士には、武士の意地がある。長州藩士に、城下へ履込まれるのは、何となく心外にも思ふが、さればとて、今の場合、之れを拒めば、傳へらるゝ風説が、眞實といふ事になるの恐れがある。澁谷の云ふ通り、一時の不快を忍んで、長州藩士の仲介に依り、彦根藩の立場を、明かにして置くのも可からう、と、思案の末、終に越智、有田の兩士を、迎へる事に決した。

時に、川上が、膝を進めて、

「何うせ、長州藩士を迎へるなら、寧ろ垂井まで、我等が、出迎へに行くに致しては、如何で御座る」

と、男子らしい事を、發言した。長谷も、澁谷も、手を拍つて同意した。そこで、川上と、長谷が、出迎へに行く役を引受け、宿舎は、澁谷方と決した。猶ほ兩士が、着した上は、可成く澤山の有志者を集めて、意思の疏通を計らう、といふ事になつた。

此相談の定まつた、翌日の朝、川上と長谷は、垂井へ向ふ可く、城下を離れた。

物事の巧く運ぶ時は、皆な斯ういふ都合に、スラ／＼とゆくものである。之が爲めに、彦根藩は、世間の疑ひから



遅れて、將來の立場が、始めて明るくなるのであつた。

一一一

西川が、歸つて来て、車戸のことを、話した時には、伊藤と、堀は、其報告の全部を、信じ得なかつたが、西川の平生と、熱心な働きに對して、幾分の信用を、拂はずには居られなかつた。兎に角、車戸が、彦根へ、手引して呉れる、といふ事は、出來さうにも思はれたので、西川を案内者として、垂井へ、やつて来て見ると、丁度、彦根から車戸が、歸つたばかりの所であつた。

先づ初對面の、挨拶も済んで、車戸から、口を切つた。  
『御喜びなさい。萬事は、好都合に運んで、長谷、川上の兩士が、貴下等を、迎ひの爲めに、此處へ來られることになりました』

と、聞いて、伊藤も、堀も、豫期以上の好都合に喜んだが、それにしても、何ういふ次第で、彦根藩士が、自分等を、出迎ひにまで来て呉れるのか、その事情は、少しも解らなかつた。長州藩士と、彦根藩士は、別に宿怨のある、といふほどでもないが、過る安政の疑獄で、吉田松陰が、井伊大老の爲めに、首を斬られてからといふものは、兩藩士の間に、深い溝渠が穿たれて、何となく反目するやうに、なつて居たのだ。然るに、今、彦根藩士が、自分等を、長州藩士と、知り乍ら、出迎へにまで来る、といふのは、其間に、多少の疑ひも起つて、危惧の念を、有たすには居られなかつた。

『貴下の御盡力で、其處にまで運びのつきましましたるは、眞に満足とは存じますが、全體、彦根藩は、何ういふ状態になつて居りますか、その次第を、一通り承知致し度い』

車戸は、此疑ひを受けるは當然である、と、いはねばかりの態度で、

『その御疑念は、御道理千萬ぢや。併し、川上、長谷の兩士が、貴下等を、御迎へ申す心には、寸毫の邪念も御座らぬ。實は、拙者も、最初のうちこそ幾分の不安もあつたが、漸次話し込んで見ると、全くの誠意と、見て取りました。尤も、是れについては、澁谷驕太郎と申す仁が、殊の外の盡力で、萬事は好都合に運んだので、御座る。澁谷は、町屋者でこそ御座るが、勤王の志厚き人で、毎に藩の青年を集めては、講書に事寄せ、勤王の精神を、鼓吹して居るほどの熱情家であつて、同人方へ、立寄る藩士は、何れも同じ志の人ばかりで御座る。此度の儀についても、貴下等の御宿いたす、と申して居る位ゆゑ、少しの御懸念なく、城下へ御立入りあつて、可からう』

兩人は、車戸の物語を聞いて、意外の感に打たれた。鳳章を、彦根城へ移し奉る、といふやうな、陰謀にも均しい事を企てる、彦根藩の家臣に、左様した人物のあらうとは、實に意外であつた。此事情から推して考へると、或は鳳章奉移の事は、一時の風説に、過ぎぬかも知れぬ。左様なれば、此上もない事だ。殊に、今迄は、仇敵の如くなつて居た、彦根藩が、新しい味方になれば、一層の好都合である、と、もう彦根へ行く必要は、ないやうな氣もするが、併し、此儘立歸る事もならぬ。城下までは、足を入れて置かぬと、自分等の、役目が濟まぬ。兎に角、長谷と川上に逢ふて、其上、澁谷にも、會談して見たら、風説の實否は、明白になるだらう、と思つて、偏に車戸の盡力を感謝した。

其翌日、川上と長谷が、出迎への爲めに、遣つて來た。種々と相談した末、堀が、先きに行く事になり、伊藤は、是れ迄の經過を、高杉等に報告して、彦根藩に對する風説は、全く根も葉もない事のやうだ、と、いふ事を告げて、更に一層ふかく、立入つての偵察は、もう一度、引返してからの事にしよう、と、極まつた。

斯くて、堀は、彦根に向ひ、伊藤は、京都へ引返した。未だ彦根へはいらぬので、確實の報告は出來ぬにしても、之れまでの事情から想像すれば、風説の事も、大抵は知れたもので、左迄に懸念するに及ばぬが、猶ほ此上ともに、



其真相を確める必要はある。高杉等からも、深い注意があつて、伊藤は、少しの休息もなく、すぐに彦根へ、引返す事になつた。

抑々彦根城は、慶長八年に、土工を起して、廿年の長きに渉り、井伊直勝が、苦心經營に成れる、要害堅固の名城である。城の周圍は一里餘にして、水陸形勝の地を占め、追手は、高宮八幡口に在り、善利川を隔て、要害と爲し、搦手は、澤山口に設け、山路を切開いて、其道は最も險しい。湖水に面する方を、松原口と稱して、又之を船手といふ。中央にある、三層の天主閣は、京極高次が、大津に築いたのを、その儘移したのであつた。西丸の一層樓は、淺井長政の小谷から、移したものであるが、有名な天稗樓門は、羽柴秀吉の長濱城に在つたのを、持つて來たのである。されば、彦根城を、寄集めの城といつて、隘口を叩くものもあつた。三之丸の湖岸に在る、樂々園は、井伊家の別荘で、今も猶ほ舊態を、存して居る。

直弼が、櫻田門に斬られて、其跡は、直憲が襲いただけれど、此人は、一向に名聲もなく、父の遺業を受けて、關西三十三ヶ國の旗頭たる、井伊家の權威を、保つことも出來ず、徒に日を送つて居るうちに、今度のやうな風説が、起つて來たのである。

一四

極端に迄、幕府を擁護しよう、として、京都へ、手入をした彦根藩が、直弼を亡ひて、直憲の代になると、たとへ少數にもせよ、其藩臣のうちに、勤王派が、出て來たのだから、時勢の推移は、實に面白い結果を見るものである。前回にいふた至誠組、即ち川上や長谷の屬して居る組合が、輕輩から組織された、勤王派であつた。澁谷も、其同志の一人にして、深い關係を有つて居たのだ。

あつた。輕輩を以て、組織された組ではあるが、陰然、その首領になつて居るのは、藩の名門で、現に重役を勤めて居る、岡本半助と謂ふ人であつた。號を黃石といふて、詩を作り、文字を巧に書く。此人が、至誠組の牛耳を、執つて居たので、在外にも、勢力も加はれば、他の重役の壓迫も受けずに、日を逐ふて、同志も殖えて來るのであつた。

天保年間に、大阪の富豪を驚かした、大鹽の一揆に、平八郎の門人でありながら、最後迄反對して、その企てを諫止しよう、とした、宇津木といふ人があつた。いよく、擧兵といふ日に、何うしても此擧に同意せぬ、といふので、刺殺されて了つたが、此宇津木の弟が、岡本であるから、義の爲めに殉ずるの氣概は、兄の宇津木と同じやうに、有つて居たのである。

又澁谷が勤王心からの働も偉とすべく、假し藩廳の壓迫はないにしても、長州藩の勤王家を、自宅に泊めて、平氣で居た所に、此人の決心の強い所は、現はれて居る。

堀が來てから、數日経つと、伊藤も、やつて來て、川上と長谷が立會で、岡本に對面する事になつた。『此度は、御蔭を以て、弊藩の冤罪も明瞭いたし、有難き仕合せに存じます。貴下等の御出張無之は、由々敷大事にも、可相成、弊藩の迷惑は一方ならず、私共に於ても、天下晴れて、往來のなりかねる次第、然るに、貴下等の御入來に由つて、一切の事情も判明致し、弊藩の迷惑を、未前に防ぎ得ましたる段は、幾重にも御禮申述べます』と、慇懃を盡した、岡本の挨拶に、伊藤は、辭を申した。

『イヤ、その御挨拶は、却つて痛入ります。根もなき風説を、輕々しく信じて、貴藩を疑ふたるは、我等の不明で御座つた。殊に、貴下の如き、盡忠無二の有志が、居られるとも知らず、堀といひ又、拙者までが、失禮を重ねたる段は、謹んで御詫を申し上げます。此上は、一層の御厚誼を、幾重にも御願ひ申す』

互に盡す禮儀の辭、岡本等は、非常に喜んで、これから酒宴になつた。

盃の献酬をする間にも、頻に此話は繰返されて、殊に、先代の直弼が、一旦の行掛りから、彼のやうな手段に出



たのは、決して朝廷を軽んじての事でもなく、偏に幕府の御爲筋のみを考へて行つた迄の事であつたが、それが端なくも、朝威に觸れた、とあつては、我等の如き、藩士に於ても、唯々、恐縮の外はない。此上は、飽迄も、朝廷の御爲めに盡して、前過の御詫びを致し度く存する故、その邊の事は、可然御含み置きを、願ひ度い、との意味を、頻りに述べて、暗に今後の援助を求むるのであつた。

且つ談じ、且つ飲むうちに、歳の壯い血氣の伊藤は、既に醉が廻つて、さかんに放談高論する、堀は、伊藤に向つて、  
『オイ、一曲舞はんか』  
『うむ、可からう』  
『思ひ切り、元氣のよい所を、見せて呉れ』  
『可し、緊かり唄へ』

これから堀の吟聲で、伊藤が始めた。一座のものは、皆な其勇壯な態を見て、頻りに喝采する。充分に酔の廻つた伊藤はやがて、庭へ飛下りた。小さい池の畔にある、老松に眼をつけて、ヤツと、氣合をかけながら、美事に下枝を斬つた。一同は手を拍つて、やんや／＼と喝采した。  
昔も、今も、壯士の元氣は、此通りである。若し此元氣が、青年に無くなつたら、それこそ、國家の基礎が危くなるのだ。庭の松が枝を、斬つて何うするなどと、變な理窟をいふ奴は、壯士の意氣を、解せざる輩である。  
やがて、伊藤は刀を收めて、座敷へ上つて來た。岡本始め一同が、交々に盃を献す、伊藤は氣に任せて、倍々飲む。家主の澁谷は、少時考へて居たが、急に思ひついたやうな様子で、傍らの硯箱を引寄せ、何かサラ／＼と書いて伊藤と堀に示した。  
酒酣歌三壯志、金鐵爲之鳴

腰間三尺劍、照看此心明  
『ヤツ、これは上出来、まさに此通りぢや、澁谷氏は、却々やり居る』  
伊藤が激賞すると、堀が、之を吟する、其夜の宴は、實に壯烈を極めた。  
斯うした事情で、彦根藩に對する風説は、全く嘘であつた事が判明したから、兩人は、京都へ引返して、高杉等に願末の報告をした。至誠組からは、更に代表者を、京都に送つて、此答禮をする、といふやうな譯で、鳳聲奉移の問題は、是で落着になつた。



### 彼の殺人事件二つ

一

明治になつてからの伊藤は、甚だ腰の弱い人で、よく調和の才には、富んで居たが、自ら進んで、他と争ふやうなことはなく、何時も、妥協して持切りの、政治家であつた。それが爲めに、大概な人は、伊藤を弱者のやうに、思つて居たらうが、維新前の俊輔は、彼れでも、却々利かぬ氣の、相應に暴れ廻つた。時代もあるのだ。腰間三尺の秋水は、伊藤には挟さぬ、といつた風で、よく血を流した事もある。一般の武士に有勝ちの、殺伐な氣風は、矢張り此人にも、在つたのだ。

維新變革の、風雲に乗じて、明治政府の大官になつた、人は、多少ともに、人殺しの経験はあつた。薩藩の横山休之進(中井弘) 奈良原喜八郎(繁) 中村半次郎(桐野利秋) は、最も烈しかった連中であるが、長州藩では、松陰門下の人々が、よく人を殺したものだ。伊藤の如きも、其一人であつた。後年の博文を觀て、昔の俊輔を思へば、殆んど別人の觀がある。今、そのうちの二件だけを、簡単に述べる事にしよう。

文久二年の正月、安藤老中を、坂下見附に、水戸の浪士が、要撃した頃の俊輔は、桂の配下で、過激な議論も唱へれば、反對派のものを燈す可く、實行の任にも、當つた事がある。評判の筑波山事件の關係から、幕府の密偵を殺した事情が、却々に面白い。

井伊大老の櫻田事件から、一般の士風が、倍々殺伐になつて来て、動もすれば、三尺の秋水が閃いて、血腥い風が吹くやうになつた。果は、一人や二人の生命を、奪つた所で、大勢に關係も無ければ、また何の益もないのであるから、寧ろそのこと、幕府を倒す、運動を起さう、との考へから、上野の宮様を擁して、筑波山に據り、討幕の義兵を擧げよう、といふ、素晴らしい計畫が、水戸浪士の、一派に由つて、仕組れるに至つた。其陰には、例の大橋訥庵が居て、さかんに壯士を、激勵して居たのだ。伊藤も、何時か、其仲間にはいつて、頻に同志を、募る手傳をして居たが、何分にも、事件が大きいのので、容易に實行の運びにならなかつた。

徳川三代の將軍家光の時、比叡山に對照して、上野の丘を、東叡山と稱し、大きな寺院を造つて、之れを寛永寺と名づけ、其本坊を輪王寺と爲し、京都から宮様を迎へて、萬一の變に備へた。朝廷と、何事かの争ひが、起つた時、宮様を利用して、悪名を受けまいとの考へから、斯ういふ準備をして置いたのである。されば、幕府時代には、上野の宮様といへば、大層な權威を、有つて居られたのである。徳川へ敵對するのに、宮様を、擔ぎ出さうとするのは、良い策ではあつたけれど、之れは容易に、出来る事ではない。

大橋訥庵は、浪士の中に、評判の善かつた、儒者である。此人の策として、宮様を、筑波山へ、誘ひ出さうとしたのだから、多くの浪士が、之に加擔して居たのは勿論、長州藩士のうちにも、少からず味方になつたものがあつた。俊輔は、此人を訪ねて、毎に其議論を、聞いて居たが、今日も、例に依つて、向島の大橋方へ、行くつもりで、外櫻田の藩邸を出かけると、同志の一人であつた、酒井といふものが、呼吸も喘しく、遣つて来て、

『ヤア、伊藤氏か』

『おう、酒井殿』

『た、た、大變な事に、なり居つた』

『何事か、起つたか』



「向島の先生が、たつた今、捕られた」

之れを聞いて、伊藤の驚きは、尋常でなかつた。

「何といふ不用意ぢや、前以て判らなかつたのか」

「毫しも判らなかつたのぢや。何でも味方のうちに、變心したものがあつたに、違ひないぞ」

「そんな様子があるか」

「然もなくば、斯う手廻しよく、行く筈がない」

「成程、而て、少しは見込みが、ついて居るか」

酒井は、四邊を見廻して、一段と聲をひそめた。

「宇野東櫻の處爲では、あるまいか」

「ふむ、彼奴の處爲と思ふか」

「何うも平常から、擧動の怪しい所が、御座つた」

伊藤も、酒井に、斯ういはれると、宇野に、怪しい所があつたやうに、思ふ。

「左様いはれて見ると、彼奴の處爲かも知れぬ」

「猶深く搜つて見よう」

「うむ、それが可い」

「宇野の事は、搜つてから後として、筑波山の一條は、もう不可のう」

「無論の事ぢや」

「此上は、何としたものか」

「それについては復た相談をする事に致さう。同志のガクへも、その旨を知らせて呉れ」

「委細承知いたしました」

酒井は、伊藤に別れて、同志へ報せの爲め、急ぎ行く。

跡に、伊藤は、しばらく考へて居たが、藩邸へ引返して、邸内の有備館へ来た。藩中の若い武士に、文武二道を、

授ける教場、有備館の名は、評判のものであつた。折よく、高杉晋作が居たから、此事を話すと、

「拙者も、彼奴は怪しいと、思つて居たのぢや。巧く證據を押へて、辛き目を見せ、やり度い」

「いづれ酒井が、何とかいふて来るぢやらう」

「まア、それを待つことにしやうか」

「それが、可い」

一一

凡そ、世に憎む可きものは、同志と見せかけて、探偵を、働く奴である。殊に、國家の事を憂へて、懸命の働きをして居る人の秘密を、その同志の如く偽はつて、探偵する奴ほど、憎む可きものはない。何れの時代にもよく、在る事で、政府と人民との衝突が、或程度にまで進むと、必ず探偵を遣つて、秘密を抑へ、それを、材料に、反對派を、牢に入れる。而かも、其手段が、幾度か繰返されて居るうちに、漸次無理を爲るやうになつて、果は、無罪の人を捕へて、峻嚴な刑罰を、加へる事になる。斯うなれば、人民の方でも、反抗の餘勢で、危激の企てを、爲るやうになつて、内亂を醸す事になる。役人のうちでも、最下級の偵吏を使ひ、其報告の全部を信じて、天下の事に當る有志家を抑へよう、とするのだから、其結果の恐る可きは、いふ迄もない。また、偵吏を勤める位の者は、人格も無く、卑劣な心を、有つた奴であるから、上官の笑顔を見たさに、探偵費の幾分でも、多からん事を望んで、自然と、虚偽の報告を爲るやうになるものだ。明治政府になつてからも、そんな事で、押通して来たが、舊幕時代には、殊に、此弊



が甚だしかつた。

朝廷と、幕府の折合が、日を逐ふて悪くなり、條約問題から、攘夷熱が高くなつた。攘夷を唱へるものは、何うしても、倒幕に流れる。開國論者の中にも、倒幕派はあつたけれど、大體に於て、攘夷と倒幕は、併せ唱へられたものだ。従つて、攘夷熱が高くなるほど、倒幕派の鼻息は、荒くなる道理で、之れに對する、幕府の鎮壓手段が、漸く嚴重に、なつて來るのは、止むを得ざる次第であつた。

宇野東櫻といふ奴は、奥祐筆を勤めて居る某の配下で、小才の働く、極めて陰險な、性質であつた。それを見込んで北町奉行の黒川備中守手附として、密偵の役に、當らせる事になつたのである。

斯うした職業に就くものには、一種の天才があつて、すぐ他に取入るのみならず、巧みに同志らしく見せかけて、對手の油斷に乗じて其秘密を、搜出す事に妙を得、どうか斯うか、物にしてふものだ。筑波山へ、上野の宮様を、擔ぎ出して、討幕の義兵を、擧げる計畫のある事を、疾くも聞込んで、其根本は、大橋訥庵である、といふ事も知つて、黒川備中守へ、密告に及んだ。これが爲めに、大橋は捕はれ、折角の計畫も、破れて了つた。

其後、安藤對馬守要撃の一條から、桂小五郎が、奉行所へ曳かれて、内田萬之助との關係を、取調べられた事があつた。俊輔も、桂と同道して、數回の訊問を受けたが、一日、俊輔は、奉行所から歸つて來ると、すぐに高杉を訪ねて『宇野は、確に密偵ぢや。今日は、其證據を見た』

と、いふのを聞いて、高杉は、

『左様か、己も、確に其れと睨んで居たのぢやが、今日、見た證據といふのは……』

『桂先生と、奉行所へ行つた時、彼奴の姿を、見付けたのぢや』

『そりや不可、彼奴の姿を、見付けた丈では、證據にならぬ』

た』

『ふふむ、左様か』

『どうしても、彼奴は臭いぞ』

『まア、左様かも知らんが、猶ほ一層、搜つて見るが、可からう』

其日は、それで済んだけれど、これから、宇野の身について、各自に注意を、爲るやうになつた。

悪い事は、いくら隠しても、現はれやすいもので、宇野を、怪しい奴として、見込をつけて搜ると、悉皆その秘密が解つた。矢張り疑をかけた通り、奉行の内命で、探偵を行つて居たのであつた。筑波山事件の露見して、大橋の捕へられたのも、此奴の仕業であるのみならず、今迄に同志の秘密が、チヨイ／＼漏れたのも、宇野の爲めであつた、といふ事が、すべて判明したから、其處で、宇野に對する處置を、何うするか相談になつた。

高杉は、伊藤を呼んで、

『宇野の奴、いよく／＼それと、極まつた以上、此儘には、打捨て置く事は出來ぬ。一刀兩斷の處置を加へて、他の奴輩へ、見せしめに致さう』

『それは至極ぢやが、全體、どうするつもりか』

『されば、本人を、誘き出して、よく／＼申聞けた上、處分して遣はさう』

『而て、場所は……』

『寧ろのこと、此邸内へ、引附けて置いて、すつぱり斬つて了はう』

『それも可いとして、彼奴を、何うして引付ける』

『白井が、平生から彼奴を對手に、よく飲みに行き居つたから、白井に、誘き出させやうぢやないか』

之れを聞くと、伊藤は、膝を打つて、



「妙案々々、それに限る。白井なら、必と行るに違ひない」  
「左様決まつた上は、一日も、速いが可い。すぐに白井を、呼んで来い」  
「よし、承知いたした」  
伊藤は、これから白井小助を、呼びに出かけた。

二二

白井といふ人は、晩年が、甚だ振はなかつたけれど、一時は此仲間でも、屈指の遺手であつた。高杉も、此人には餘程、信頼して居たが、維新の際に、立後れの加減で、他の人に比べると、立身が速かくなかつた。それに不平を抱いて、酒を飲んで、暴れ廻り、何うにも、斯うにも、手のつけられぬほどの我儘になつて、ますます敬遠されたので、終に自暴自棄の姿で、浪人してしまつた。

人の出世は、一寸した機會で、調子が悪くなると、もう駄目になつて、取返しが出来ぬものだ。其人物が偉いから、その割合に出世してゆく、といふものではない。偉くても、又偉くなくても、出世といふものは、其人の運にも依る。そこに、現世の面白味は、あるのだらうが、併し、大體からいへば、多く努力したものが、その運を、取留る、專になつて居る。

維新の變革に際して、早く幕府の忌諱に觸れて、無惨の死を遂げた人、または、種々の事情から、同志の間に容れられずして、いつか世を隔つて、其終生を、よくしなかつた人、これ等の人にして、後の世に、時めいた、大臣參議以上の人物は、澤山に在つたけれど、其處が、運不運で、どうも致方がない。白井の如き人も、順調に進んで行つたら、もつと其才能も、發揮し得て、世人の注意を、ひく位の事はあつたらうが、何分にも運の神を、押へ損ねて、一生を不平に、送つて了つたのは、實に氣の毒の至りであつた。

酒の好きな白井は、いつも酔ふて居る。不酔て居る事は、殆ど稀であつた。對手續はず、誰れでも、酒量のある人なら、一途に飲む。これは多くの飲酒家に、共通の慣ひである。宇野東櫻が、同志の間に、疑ひを受けて居る事は、白井も、能く知つて居るが、酒の對手になる以上、矢張り白井の爲には、飲友達であるから、相變らず此二人は、何處といふことなく、連れ立つては、飲み廻つて居たのだ。宇野は、白井に依つて、長州藩士の内情を知らう、として居るから、或可く、白井の機嫌を、損ぜぬやうにして、酒の對手をして居たのだ。さればとて、白井が、其處にまで油斷して、宇野に、陥られるやうな、そんな淺薄の人ではなかつた。大概な無理を、通させて呉れる宇野は、白井の玩具としては、最も結構なものであつた。

伊藤が、迎ひに来たので、白井は直ぐに同道した。高杉に逢ふて見ると、宇野が、幕府の密偵らしく思はれるから、是非誘ひ出して呉れ、といふのであつた。

「それについては拙者も、疾くに眼をつけて居つたのぢや。何時も、酒の對手に引出しては、面白半分、弄弄して居たが、全く疑はしい點はある」

「何ういふ點が、疑はしいか」

「彼奴の身分が、よく判明らぬ。その上に、拙者と飲みに行つても、勘定は、何時も彼奴が爲る。金に困つて居る様子が少しも無い所は、如何にも不思議ぢや。それに、彼奴は、何んな事でも、根掘り、葉掘り、尋ねる風がある。

普通の人ならば、開流しにす可き事も、彼奴は、深問をするから、何うも變な奴ぢやと、思つて居た」

「成程、さういふ所もあらう。兎に角、彼アいふ奴は、速く何とかして了はぬと、畢竟は、大害を爲すから、貴様の取計ひで、此邸内まで、引出して呉れんか」

「宜しい。そんな事は何でもない。今夜にでも、遣れる」

「筑波山の一條といひ、大橋の捕縛といひ、また安藤の要撃が、手違ひになつたのも、彼奴の仕業と、睨んだのぢや」



『うむ、左様ぢや。その通りに、拙者も、思ふて居る』  
『それでは、何分頼む』

『可し』

『貴様の方から、合圖があれば、伊藤も、手傳に出すつもりぢや』

『何の、其必要はない。あんな奴の一疋位、どうにでもして、連れて来る』

『左様か、然らば、貴様に任せる。連れて来てからは、己が、處置をつける』

伊藤も傍らから、頻りに注意する。白井は、ニコ／＼笑ひながら、只點頭くばかり、心には、既に期する所があるらしい。

是れまでに、高杉等が、深い企みをして、狙つて居るとは、本人の宇野は、少しも知らなかつた。一夜のこと、白井が、訪ねて来て、

『何うぢや。一ばい飲りに行くか』

と、誘はれて見ると、何時もの通り、宇野としては、應ずる外はなかつた。白井を、巧く抑へて置けば、長州人の内情が、よく判明るから、どうしも、白井を逃さぬ、といふのが、宇野の仕事の一つに、なつて居たのだ。

『白井氏は、何時も／＼飲む事ばかりで、相變らず元氣のことで、御座る』

『別に元氣といふでもないが、何時死ぬか、解らぬ身の上ぢや。酒でも飲んで、面白く日を送るのが、第一の樂みと、思つて居るよ』

『何と仰せられる。何時死ぬか解らぬとは、さても、不祥の事を仰せられる』

『イヤ、少しも不祥でない。御互ひは、天下の大事に、當る身ぢや。さア此時と、なつた場合は、何時も、生命を差出さねば、相成らぬ。進々に其日も近づいて来るやうな、氣分が致すのぢや。今宵は、思ふ存分に、飲まうと覺悟

して、誘ひに来たのぢや、ハツハ、、、、  
何だか白井のいふ所に、聞通せぬやうな點がある。少しでも話に引ツかゝりがあれば、それに乗じて、秘密を聞出すのが、密偵を勤むる奴の、職分である。宇野は自ら進んで、行く氣になつた。白井が、巧みに、宇野を、釣出したのである。

四

何處で飲んだか、宇野は泥酔して、足許も定まらぬ。ヒヨロリ／＼とするのを、これも酔ッ拂ひの白井が、頻りに面倒を見ながら、漸く遣つて来たのは、外櫻田の毛利邸の附近であつた。

夜は更けて、既う初更に近い。人通りは絶えて、四邊は、寂として居る。江戸城の濠端を、酔ッ拂ひの二人が、互に勝手な、熱を吹きながら、何方が扶けるともなく、ヒヨロリ／＼しながら、

『オイ、白井ツ、もう可からう』

『な、な、何だ、何が可からうぢや、た、た、只だ、可からうては解らぬ』

濠端の柳樹に、身を寄せかけて、熱柿のやうな息を、吹いて居るのは、宇野東櫻である。その肩に手をかけて、ぐ／＼いつて居るのが、白井小助であつた。

『ゑーいッ、ぶッ、貴様も、解らぬ奴ぢや。な、な、何がつて、そ、そ、そりや、貴様を、送つて来たのぢや。あれに見えるのが、藩邸の門ではないか。こ、こ、此處まで、お、お、送れば、之れて可からう、といふのぢや』

『うーむにや、そ、そ、それは不可ぞ。今晚は、と、と、泊まる事にしろ』

『な、な、何ぢやと』

『ま、まア、ぐ／＼いはずと、泊つて行け』



『ば、馬鹿なツ。き、き、貴様は、な、なぜ、そんな解らん事をいふか。よ、よ、よく、か、か、考へて見ろ、己が、ど、どうして藩邸へ、はいれる』

『そ、そんな事は、な、な、何でも無いぞ』

『ふう。そ、そうか』

『まア一途に來い』

白井は、宇野の手を執つて、引摺るやうにして、藩邸の方へ、歩を移す。宇野は、強ひて拒むでもなく、また進んで行かう、ともいはず、只何となく、ズル／＼に従いて、行く丈けのことだ。

藩邸の構うちには、有備館が建てられてあつた。桂が、其館長をして居る。寄宿舎のやうな一棟があつて、之には高杉始め、天下國家で、騒いで居るものが、毎に泊つて居る。何しろ、桂が、館長をして居るので同じ藩士でも、その派に屬するものでなければ、集まつて來ない傾きがある。晝の間は、劍術とか、講書とかいふて、澤山に詰めて來ても、寄宿舎に這入るものは、左迄に多くなかつた。時に多少は來るにしても、何となく面白くないから、すぐに立去つて了ふ。従つて、寄宿舎は、高杉等の専有に歸して、攘夷討幕派の策源地のやうになつて了つた。

今夜は、白井が、宇野を、誘き出して來る、といふから、高杉は、其支度をして、待構へて居る。伊藤は、時刻を計つて、藩邸の附近に、彷徨いて居たのだ。

『オイ、白井か』

門側の闇い所から、のそりと出た伊藤は、密と聲をかけた。

『うむ、伊藤ぢやな』

『どうした』

『左様か、それは親切なことぢや。宇野は、能く他の世話をするからな』

と、言ひ乍ら、ツカ／＼と、宇野の傍へ寄つた。宇野も、漸く氣がついたのか、

『やア、伊藤ッ』

『おう、此酒癖の悪い白井を、よく見送つて呉れたな。厚く禮を申すぞ』

『と、と、飛んでもないこと、こ、これは、ご、ご、御互で御座る』

『兎に角、案内しよう』

斯うなつては逃さぬ、もう袋の鼠も同じ事だ。宇野は、別に何か考へてもあつての事か、強て拒む様子もなく、只

一通りの辭退はしたが、二人に、押されたり、牽かれたりして、トウ／＼門内へはいつた。

有備館の寄宿舎には、高杉が、只一人で、待つて居る。階下の方には、幾人かの藩士や、番人も居るが、階上は、

他に人は居らぬ。

『今、歸つた』

と、いひ乍ら、伊藤と、白井は、高杉の室へはいつた。跡から宇野が、ヒヨロ／＼しながらはいつた。

『おう、宇野ぢやないか』

『如何にも、せ、せ、拙者ぢや。こ、こりやア、高杉先生か、アツハ、、、』

何が可笑しいか、宇野は高笑ひをして、ぐたりと座についた。

『オイ、白井』

『何ぢや』

『宇野は、どうして來たのか』

『お、己が、酔ふて居るから、み、み、見送つて、き、來たのぢや』



『それは、嗚ぞ迷惑であつたらう』

これから、種々の雑談に、うつる。宇野も、今迄のやうに、正體なく酔ふては、居らぬ様子で、應對に、左迄間違つた事はなかつた。高杉は、俄に氣のついたやうに、立上ると、背後の刀掛の、一刀を執つた。スラリと引抜いて、宇野の前へ差つけた。宇野は、思はず膝を直した。

『高杉先生、これは……』

『此頃、需めた新刀、鑑定を願ひ度い』

宇野は、刀の鑑定が出来る。これだけは、宇野が、同志中に於て、第一人者であつた。

五

好きな道には、誰れでも迷ふものだ。刀の鑑定が、出来る所から、宇野も、何となく興味を有つて、高杉の手から、受取つた新刀を、熱と見て考へ込んだ。

『どうぢや、物にならうか』

『うむ、悪くはない』

『足下の鑑定では……』

『左様さ、無論のこと、相州物には極まつて居るが、さて誰の作かな』

宇野は考へて居たが、その儘鞘へ收めて、高杉の前へ出した。別に誰の作ともいはず、只悪くもない、といふた丈けて跡をいはぬ所から察するに、餘り上物ではなかつたらしい。

『どうぢや。物の役に立たうかな』

『さ、刀は、持手に依る。千餘莫耶も、持手が悪いと、刺身庖丁に劣るが、先生は、劍術の名手、別に名刀の必要も

御座るまい』

『宇野は、相變らず他を反さぬ、うまい調子ぢや。左様いはれては何ともいへぬ。刀は悪いが、お前は腕が出来るから差支ないといふぢやから、怒ることも出来ぬ、ハツハ、ハ、ハ、ハ』

宇野は、手を振りながら、

『決して左様いふ次第ではない。刀も可成のものぢやが、先生の劍術は、また格別ぢや、といふたので御座る』

『まア、そんな事は何うでも可い、として、足下のを拜見したいものぢや』

『そ、それは、迷惑千萬ぢや。ひ、ひ、平に御免蒙る』

『イヤ、是非拜見したい』

自井と、伊藤も、高杉に口を添へて、

『オイ、宇野、遠慮するな。貴様が、平生から自慢して居る、其一刀を見せるに、何の迷惑か。はやく高杉に見せて、鑑定をさせたら何うか』

『さ、それは……』

此に至つて、宇野も弱つた。武士が、他の刀を見て、彼是れいふた以上、自らのを見せぬ、といふ事は出来ぬ。酒に酔ふて居たので、後前の考へもなく、無造作に、高杉の刀を、見たのが悪かつた。けれども、今更に何ともしやうがない。

『然らば、ご、ご、御覽に入れやう。わ、笑ふて下さるな』

『うむ、拜見いたさう』

宇野の手から、高杉は、刀を受取つた。キラリと抜いて、眞ッ直ぐに、宇野の胸の邊へ向けて、ちつと見詰めた。

其眼は、刀と胸とを、平均に見て居るが、宇野は、それに氣がつかぬらしい。



「こりやア、斬れるらしい」

「感心されるほどの物ではない」

「イヤ、左様でない。斬れ味は良からう」

「そ、その邊は、ど、ど、どうか」

「此位の物を持つと、試して見たくならう、どうぢや、宇野ッ」

「はア、、、」

「試しても可からうか」

「それは、困る」

「まア、ぐづぐづいふな」

「しかし、高杉、それは善くない」

「よいも、悪いも、それは、貴様に覚えがあらう」

「えッ、何ぢやと」

「くそッ、貴様が」

と、いふや否、其刀をぐつと、宇野の胸へ刺した。

「ひ、ひ、卑怯ッ」

宇野は、叫び乍ら、身を避けようとしたが、背後から白井が、その首筋を、ぐつと抑へて動かさぬ。高杉は、力任せに突込んだ一刀を、緊かり握つた儘ま引かぬから、宇野の體は、坐つた限り動けぬのだ。右の首は、伊藤が、抑へて居た。高杉は、密偵の密偵を、動めて居ながら、よくも我等の同志と見せかけ、種々の事を密告して、天下の志

士を苦め居つたな。本来ならば、勝負をして使はずのぢやが、貴様のやうな犬武士と、晴れの勝負は出来ぬ。騙し討が相當ぢや。ハッハ、、、

無念の齒噛をして、宇野は、體をもがきながら、

「た、た、高杉……」

「何ぢや」

「き、き、きさま等は、ひ、ひ、卑怯千萬な、うーむ、うーむ」

苦痛の狀は、物凄いほどであるが、高杉等は、平氣なものだ。

「アツハ、、、、貴様の口から、卑怯呼はりは、何事ぢや。大小帯した武士が、獅子身中の蟲に均しい事を爲して、更に恥とも思はず、幾多の同志を、陥れた酬いは、此通りぢや。今ぞ思ひ知つたか」

胸へ突刺した刀を、ぐつと抜いたから、鮮血は、さつとほとばしる。白井が、手を放すと、宇野は、前へぐたりと倒れかゝつた。刹那に、伊藤が、

「やッ」

と、氣合をかけて、抜討に首を斬つた。少し皮と肉を残して斬つたから、首は、ぶらりと下つた。

「美事ッ」

高杉が聲をかけた。白井も手を拍つて、伊藤の技倆を賞めた。

一室のうちは、鮮血が流れて、慘憺たる状態。三人は、それを見て、宛も愉快らしく、笑つて居るのであつた。

六

遂々、その目的は果して、宇野を斃したが、さて屍體の處置に困つた。この儘にして置く事は出来ぬし、夜の明け



ぬうちに、何うかして了はねばならぬ。向不見の連中が、何時も、斯んな事を行つては、跡で其始末をつけるに苦む事は敢て珍らしくもないが、併し、幕府の密偵を、勤めて居る者を、藩邸へ引込んで、之れを殺すといふやうな、亂暴な遣方は、餘り多く例のないことだ。

伊藤は取敢ず、桂へ、此事を報告せると、桂は、早速かけつけて来て、此状態を見て、非常に驚いた。

「高杉の、無頓着は、相變らずで、實に困る。たとへ事情は何うあらうと、藩邸内で、斯んな事を爲れては、跡の始末に困るではないか。全體、どうする覺悟か」

「別に何うする、といふ考へはない。只だ許し難い、不都合な奴ぢやから、天誅を加へた迄の事で、是から先の處置は、我等の知つた事ではない」

「それぢやから困る。高杉は、何時も其調子で済む、と思つて居るが、今度の事は、ナカ／＼容易くは済まぬぞ」

「まア仕方がない、成行に任せやう」

何事についても、無頓着な高杉は、何時も、事件を起しては、跡始末を、他に任せて、平然して居るのだ。

桂も、此始末をつけるには、非常に苦んだ。普通の武士を斬つたのでさへ、一寸面倒であるのに、幕府の密偵を、勤めて居るものを、斯うした惨忍な手段を以て、殺したとあつては、檢視を受けるにしても、胡魔化しやうがない。其處で、桂は、周布政之助を迎へて、此始末をつけるより、外に策はない、と、漸く覺悟を極めて、周布を呼びにやつた。

藩に於ては、政務座役を、務めて居たが、此人は、譜代の臣ではなく、人材登庸で、拔擢されたのである。普通の役人では、とても此相談は出来ない。高杉等の爲人を、能く吞込んで居て、大膽に、事を處理し得る人でなければ、到底此始末はつかぬ。周布ならば、大丈夫と見込んで、迎へをやる事にしたのであつた。周布は、早速やつて来て、此状態を見ると、流石に驚いた。

「随分思切つた事を行つたのう。桂さん、何うする考へか」

「拙者には、何の考へもない。貴下の御一存に、任せる外はない」

「ふふむ」

少時、考へて居た周布は、

「何うも致方がない。邸外へ打捨てるより外に、何とも處分はあるまい」

「邸外へ打捨てる、とは、どうするのか」

「屍骸を、此儘に外邸へ、運び出して、路上へ打捨てるのぢや」

「その取扱ひは……」

「高杉等に、扱はせたら可からう」

「成程」

是れで相談は極まつた。周布は、高杉に向つて、

「此屍骸を、邸外へ運び出すのは、足下等の役ぢや。さア、夜の明けぬうちに、はやく運び出しなさい」

「我々が、致すのか」

「さうぢや。自分で斬つたものは、自分で處置をつけるが可い」

周布は、高杉の苦手であつた。如何なる人に對しても、我儘一ぱいにして居る高杉も、周布だけには、多少の遠慮をするから妙であつた。

「伊藤ッ」

「うむ」

「はやく片付ける、白井も手傳へ」



斯うなつては仕やうがない、空俵を持つて来て、宇野の屍體を押し込み、その上から、繩を充分にかけた。

『これを、誰れが持出すか』

と、白井が尋ねた、高杉は、

『オイ、伊藤、貴様が擔げ、白井は、護いてゆけ』

伊藤は、澁い顔をした。

『えらい役廻りぢや』

『緩言をいふな』

『どツこいな』

と、伊藤が、繩に手をかけて、擔ぎ上げたら、ベト／＼した血が、襟から背中へ傳はる、その氣色の悪い事は一通り

でない。

周布と、桂の指圖だから、門番の咎めも受けず、邸外へ出て、上杉の邸の方へ近付いて、ソツと捨て、了つた。

跡の掃除は、高杉が、スツカリ済ませた。周布と、桂から懇々と談じつけられて、高杉も、其叱言丈けは、素直に

聞いて居た。

未だ夜の明けるには、少し間があるから、高杉は、厩へやつて来て、一頭の馬を曳出した。それから品川へ、遊興

に行かう、とするのだ。馬に乗つて、裏門から出ると、何うしても馬が動かぬ。それを無理強にして、上杉邸の塀の

所まで来ると、馬が立ちすくんで了つて、どうしても動かぬから、二三度蹴付けると、左の鐙が切れた。止むを得ず

馬を下りて、鐙を直してから、また馬を攻めたが、今度は、右の鐙が切れた。流石に豪氣の高杉も、些か神經を起し

て、その儘邸へ歸つて来た。

昔の武士が、よく人を斬る事はあつても、かうした遣方は多くなかつた。高杉等の亂暴は、殊に酷かつたものである。

る。これが、伊藤の殺人事件の一つ、この外に増殺し、といふのがあつた。

七

盲目でありながら、群書類従といふ大部の著書を出して、天下の學者を驚倒せしめた、塙保己一といふ檢校があつ

た。兩眼が満足に開いて居て居てさへ、碌な研究も出来ず、偶々出版すれば、他の書いた物を、翻譯する位が關の山、そ

れでも肩書は、學士の博士のといふて、ナカ／＼大層なものだ。世に謂ふ、看板倒れの多い學者連、昔の人の根氣と

研究の徹底せるには、到底及ばぬやうである。

保己一の子に、次郎といふのがあつて、流石に、父の仕込みで、これも相當の實力を有つた、國學者であつたのは

いふまでもない。然るに、此次郎について、悪い噂が起つて、非業の最期を、遂ぐるに至つた。

文久の頃になつて、徳川幕府の權威も、漸く衰へて、諸侯に對する睨みが利かなくなつた。其原因は種々あつて、

人の見やうに由つては、理窟も附くが、要するに、一般の人心が、武家天下に倦んで来たのと、徳川になつてから、

二百五十年の泰平が、續いて居るので、其間に、積弊の甚太しきものがあつて、それに堪へ切れなくなつて来たのと

此二つが、大なる原因で、何かの機會に、その不平が爆發しやう、として居たのだ。所へ、米國の使節が、突然やつ

て来て、開國貿易を迫つた。幕府の役人に、此解決が、一寸むづかしかつたので、一二年を逡巡に送つた。

先、是、朝廷に於ては、幕府の專權に、不満を抱いて居られた所へ、此問題が、起つて来たから、そこで、條約調

印は相成らぬ、といふ、御沙汰を下された。之れが原因になつて、朝廷と、幕府の間に、大きい溝渠が、出来て了つ

た。それに乘じて、幕府に對する、反抗の口實を捉へたのが、長州の毛利であつた。米使の渡來は、嘉永の歳であつ

たが、攘夷の騒ぎの最も激しかつたのは、文久になつてからである。

何んな理窟があつても、朝廷を向ふへ廻して、争ふては損である。毛利を始め、幕府に、嫌焉の情あるものは、皆



條約問題を、利用して居るのであるから、幕府としては、之れについて、何處かに説明をつくる必要があつた。而して朝廷との折合せへ良くなれば、問題の解決も、容易に出来るし、従つて、諸侯や浪士の頭を、抑へ易くなる、といふので、辛うじて見付け出したのが、公武合體論であつた。

併し、公武合體論は、單に理窟のみでなく、實際の問題にしなければならず、それには、將軍の家茂が、未だ獨身で居るから、皇室と縁組をして、公武合體の實を擧げやう、といふ事になつて、此に孝明天皇の妹君、和宮を、是非とも申受けて、將軍の夫人にしよう、との運動が起つた。これには、毛利の長井雅樂も、老中の安藤對馬守も、皆關係して居たのであるが、安藤は、徳川を、現在の窮地から救出すのには、此策の外になしと見て、大活動をはじめた。

幾萬兩といふ大金を撒きながら、其一方には、幕府の權勢を利用して、却々に悪辣な手段を以て、其目的を遂げようとしたのであつたが、京都の方でも、此事は、容易に決しかねて、種々な議論が起つて來た。徳川が、將軍職であるにしても、朝廷から見れば、一の臣下であるにも拘はらず、皇妹を、強て迎へんとするのは、甚だ僭越の至りである、といつたやうな事を、頻に主張して、利宮降嫁に、反對するものが多かつた。幕府の方でも、躍起となつて、之れに對抗する。其結果が、先例の取調となつたので、塙次郎は、幕府に召出されて、皇室から將軍家へ、夫人を降嫁せられた事の先例と、其事情を調査せよとの命を受けたのである。

所が、何うした間違から、かは知らぬが、此際に塙が、廢帝の故事を調査した、といふ風説が傳はつた。此事は、何うも信用の出來ぬ事ではあるが、此風説が、盛になつて來て、塙を、國賊の如くに言ふものもあつた。そのうちに皇妹降嫁の事は、終に決定して了つた。

何事もなき、平生の事にして見れば、左程に肩胛を張つて、彼是れと論ずるほどの事でもなく、却て公武の調和を喜ぶ筈であるのに、時代が時代であつたから、御降嫁問題は、大論議になつた。攘夷開港、勤王佐幕、この争ひは、も

う極端になつて居たのだ。その折柄に、和宮の降嫁といふので、攘夷派の浪士の血は、一時に沸き返つた。

久阪玄瑞は、熱烈な勤王家で、歳こそ壯くて、毛利藩中に於ても、重要な位地には立つて居なかつたが、同志の間には、ナカ／＼に信用も厚く、藩侯へも、幾度か、上書して、その識見も認められ、松陰の門下では、高杉と、肩を並べて居た人物である。有備館の寄宿舎に今、その同志が集まつて、頻に何事か、密議を凝らして居る。久阪は、膝を進めて、

「これを此儘に、許して置けば、我國體上に、容易ならぬ影響を來すこと故、各自は、非常の決心を以て、先づ塙次郎を斃すの外はあるまい」

高杉も之に同意して、

「その通りぢや。久阪の云ふ所は、道理千萬に思ふ。速かに實行したら、可からう」

八

議論は、既に盡きて居るらしく、また塙の引受けた、といふ、廢帝の故事を調査した事も、充分に證據があつて、少しの疑もないに違ひない。高杉は、勢に乗じて、思ひ切つた事を行つて、その跡始末に苦む事が、何うかするとあるけれど、久阪は、用意の深い質で、當時の壯士としては、比較的、落付のあつた方だ。その久阪が、先づ塙を斃せ、といふのだから、充分に證據を、握つて居たものと見て、敢て差支へはあるまい。

單に、廢帝の故事を調査したといふ丈の事が、生命を奪られるほどの大事であるか、何うかは解らない。唯だ其故事を調査した、精神が、果して何うであつたか、それを知る必要はある。之れが充分に研究されなければ、塙を殺すといふのは、ちと慘酷のやうにも思はれるが、併し、事は、和宮降嫁に起つて、それからの事件であるから、塙に對する、制裁の緩嚴は、固より議論の外である、當時の熾んな勤王思想からすれば、此位の手段に出づるのは、當然



の事であつたらう。今の新しい泰西の思想から、之れを見たら、馬鹿らしくも思はれやうが、我建國の歴史を辿つて皇室崇拜の思想の燃ゆるやうな、當時の志士が、只簡單に、塙へ對する、制裁の方法を決した事は、まさに其時代の精神を明かに表徴したものと見れば、それで可いのだ。

久阪と、高杉の音頭取で、いよく塙を殺す事に決したが、さて誰が適任か、といふ一段になつた。また、一寸ゆきつまつた。初めから黙々として、一座の光景を見て居たのは、例の俊輔であつた。斯うした問題になると、いつも黙つて居るが、平生は、議論の多いので、どうかすると、同志が、肩に鐵を寄せることもあつた。

「押者が、その役目を引受けよう」  
高杉は、疾くも附入つた。

「おう、伊藤か、貴様が引受けるとか」

「左様……」

「可からう。貴様なら必と行り得る」

久阪も、高杉と同じやうに、

「こりやア適役ぢや。緊かりやつてくれ」

「宜しい、儘かに引受け」

「一人でゆくか、それとも、手傳を出さうか」

「手傳には及ばぬが、見張りが一人、欲しい」

「可し。それは承知した」

相談は、是れて決まつて、伊藤は、塙の出入を、覗ふ事になつた。塙に對する評判の、甚だ宜しくない事は、本人も、能く知つて居るのだから、出入には、最も注意して、少しの油

斷もなかつた。それを附け狙ふ伊藤は、二度も、三度も、塙を、追隨して居ながら、手を空うしては、引取つて来る。歳の壯い同志の多くは、性急な人達であるから、大分蔭口を叩くものがあつて、伊藤は、輕輩の出ちやから、とても此大役は果せまい、といつたやうな事を、頻りにいひふらすので、之れを聞く度に、伊藤は、痼疾は起るが、生きて居るものを對手にする事で、どうも思ふやうな、機會を得なかつた。

文久二年の十二月二十一日、もう歳の暮といふので、何處の町家でも、春を迎へる支度に忙しいが、それでも、屋敷町は、寂々として人通りも少く、屋敷のうちも、餘り騒々しくない。三番町の塙の邸を、少し離れた街頭に、伊藤は、身を潜伏めて、塙の歸邸を、待ち受けて居るのであつた。

保己一が、著名の人で、その子に生れた次郎は、幼い時から、充分の教育を受けて、立派な國學者に、なつて居たのだ。保己一の妻といふのが、また偉い女で、眼の不自由な良人を扶けて、後世を益するほどの大著述も、此妻の内助の力が多くあつた。

名月や、坐頭の妻の泣く夜かな

仲秋の名月に、良人の眼の、不自由を嘆ちての、此十七文字に、妻の心のやさしさが、現はれて居る。良人に使へて、貞節な女は、人の母として賢い上に、慈愛も深く、次郎は、此父母の膝元に、育てられたのであつた。

既う日は暮で、一邊の家では、點燈の支度に、かゝつた。商家の少ない、屋敷町の事で、人通も今は絶えた。朝から、曇り氣味であつた空は、いよく雲が重なつて、陰鬱な、厭な夜になつた。江戸名物の空ツ風、肌を切られるやうな寒さを、ぢつと堪らへて、伊藤は、九段坂の方を、少しの油斷なく睨んで居た。

所へ、従者も伴れずに、次郎は、只一人で、今歸つて來た。その姿を見ると、伊藤は、袴の股立を取り、腰の大刀に反をうたせて、次郎の行過ぎるを、待ち受けた。神ならぬ身の次郎は、もう自分の邸が近くなつたので、少し急ぎ足に、伊藤の前を通り過ぎようとした。其利那、



「ヤツ」と、かけた氣合と共に、撃抜に、一刀斬りつけた。油斷の在った所へ、背後から斬付けられたので、身を開く間もなく、右の肩先から、乳の下へかけて、ざっくり斬込まれた。  
「うぬ、ひ、ひ、卑怯ッ」と、いひながら、次郎は、一刀の柄に手をかけた。所へ、伊藤は、また附入つて、一太刀浴せた。哀れ、次郎は、其場に斃れた。

伊藤は、其儘逃足はやく、身を暗まして了つた。  
其翌日、三番町の街頭へ、捨札が建てられた。それには、

埒次郎

此者儀、昨年安藤對馬守と同腹致し、兼て御國體を辨へながら、前田健助兩人と、恐れ多くも不謂舊記を取調へ候段、大逆の至り也。依之、昨夜三番町に於て、加天誅者也  
と、書いてあつた。

### 御殿山焼打事件と彼

江戸の町はづれて、東海道の振出になつて居る、品川驛のすぐ手前に、海に面して、一帯の丘がある。品川の方へ寄つた端を、御殿山と稱し、それから續いて、江戸の方へ、延びて居る、高臺が、高輪である。御殿山の昔は、櫻の名所として、彌生の花時になれば、非常に賑つた所で、江戸名所の一つに、なつて居た。

その御殿山へ、各國の公使館を、新に造營する事になつて、さかんに工事が始まつた。最初は、何の工事か、人も知らなかつたが、そのうちに、夷人館が建つたのだ、と、いふ事が判明したので、江戸ツ子の驚きは、實に非常なものであつた。攘夷熱は、密に武士ばかりでなく、一般の町人や百姓も、それを良い事と思ひ、夷人とさへ言へば、身を顛はして、毛嫌ひをしたのであつた。江戸の朱引内、而かも、將軍の御膝元へ、夷人の屋敷を建てるとは何事ぞ、といつて、その悪評は一通りてなかつた。

安藤對馬守が、非常の英斷を以て、幕府の御用金で、建築にかゝつたのであるが、暗殺された大老井伊の跡を受け老中の筆頭として、幕府の權勢を、握つて居たが、今でいへば、外務大臣の格で、夷人に對しての事は、一切やつて居たのである。

京都から起つた攘夷論が、いつか知らず、江戸にまで、這入つて來て、諸國の浪士が、夷人に對して、頻に亂暴を



働く。その頃の公使館は、多く寺院を充てあつたので、幕府の警戒は、相當に盡して居ても、家屋の周圍が、開放し同様で、取締のつかぬものであつたから、屢々浪士の襲撃を受けて、その度毎に、幕府は、迷惑をして居たのだ。そこで、安藤が考へたのは、公使館を新築して、各國の公使を、一つ場所に集めて置けば、充分に警戒も届いて、今迄のやうな危険は、自然と避ける事も出来やう。それには、高輪の御殿山が、最も適當の場所である、と見立て、幕府の支配に、なつて居た土地とて、すべての運びも速く、工事に着手する事になつたのである。

伊藤は、彦根事件の後、京都に居て、それから、江戸へ出る事になつた。同志の間に、あまり重く見られて居なかつたが、それでも、重寶には爲れて居た。伊藤も、自分の出身が、輕輩であるといふ所から、よく身を以て、何事にも奔走した。その結果が、毛利侯から「國事に奔走の勞不淺るを以て、特に士分に加へる」といふ意味の、御沙汰を受けて、漸く一人前の武士になり得たのであつた。聞く所によれば、一ケ年のうちに、江戸と下關の間を、十二回往復した、といふ事であるが、交通機關の不備であつた時代に、只歩く丈けでも、普通のものには、眞似られぬ事であつた。

江戸へ出てからは、多く外櫻田の藩邸内に在る、例の有備館に、寢起をして居たが、高杉等が、麻布の下屋敷に居る關係から、後には此方へ、移つて居た。

さて、勅使に對しては、幕府が、一切の御沙汰を、受ける事になつて、勅使は、無事に京都へ引上げた。それが爲めに、攘夷の勢ひは、益々さかになつて、到る所に、不穩の企てを爲るものが、殖えて來た。高杉等も、金澤襲撃の一條が、中途で露見して、その儘になつて居るので、之が氣になつてならぬ。何とかして其括りをつけねば、自分の面目にも關する、といふので、いつも此事が、議論の基になつて、騒いで居たから、伊藤も、其行掛りの事情は一通り知つて居たのであつた。

ら、藩士は、多く此樓へ、飲食に來るのであつた。今日は、朝からの雨で、まことに鬱陶しく、且寒氣も酷いので、高杉等は、此一日を、海月樓で送らう、といふ相談から、一同で押出して來た。飲むと食ふにかけては、人一倍の連中とて、その騒ぎといつたら非常なものだ。もう大分酔が廻つて來て、頻りに時事を慷慨して、酔が廻るほど、元氣は昂るばかりだ。

高杉晋作、久阪玄瑞、寺島忠三郎、志道聞多、山尾庸三、福原乙之進、伊藤俊輔、品川彌二郎、大和彌八郎、白井小助  
等の人々が、元氣にまかせて、飲んで威張つて、氣焰を吐くのだから、却々さかんものであつた。談論は、御殿山の公使館に移つて、幕府の處置に、痛罵を加へるものさへあつた。

一一

『オイ、寺島ッ』

不意に聲をかけられて、寺島が振り返ると、それは山尾であつた。

『何ぢや』

『御殿山の一條は、何うする覺悟か』

『さ、その事については、皆な心配して居るのぢやが、まさか黙つて見て居る事はなるまいぞ。先達の金澤一件から行掛りは勿論、島津でさへ、夷人を斬つて居るのに、我々が、手を束ねて、傍觀して居ては、世間の批評が、いよ／＼五月蠅い。殊に、將軍の膝下に、彼のやうなものを造られて、此儘にして置けば、攘夷の御趣意にも、反く次第ぢや。我々の手を以て、處分をしてはうてはないか』

『うむ。そりやア道理ぢや、幸ひ今日は、之れ丈け集まつて居るのぢやから、何とか決めて了はう』



「それが可い」  
「然らば、相談を始めようか」

これから山尾は、此事について、相談を始めた。志道は、忽ち合鍵を打つて、

「山尾のいふ通りぢや、それに異存のあるものはなからうが、つまりは、手段を講ずるのが第一ぢや。高杉の意見を聞いて見ようか、彼奴、何か考へて居るに違ひない」

「それでは、高杉に聞かう」

高杉は、年の若い方であつたが、斯うした事についての考へは、ナカ／＼に深い所があるから、いつも、高杉を中心として、相談は始められるのであつた。

「オイ／＼、高杉」

今久阪と、頻りに何か話込んで居た、高杉は、

「うむ、何か」

志道は、ズツと膝を進めて、山尾や寺島のいふ所を取次いで、

「どうぢや。何か名案があるか」

「御殿山の公使館を、どうしようと思ふのぢや」

「どうするといふて、まだ其手段は、極まつて居らぬから、そこで相談するのぢや」

「公使館を處分しよう、といふのか」

「左様ぢや」

「そんな事は、相談する迄もない。瞬きする間に、處分はつく」

「それを聞かう、といふのぢや」

「然らば、其方法を授けるが、己のいふ事に従ふて、苦情は決して言はぬ、といふ證據を見度い」

「まさか、貴様の前で、金打もなるまいが、誰も故障はいはぬ、といふ事だけは、誓ふてもよい」

「可し。それでは言はう」

「ふむ」

「あんなものを、一つや二つ何でもなく處分はつく、焼いて了ふのが、一番早道ぢや」

「何ッ、焼くのぢやと」

「左様」

「どうして焼く」

「火を放けるのぢや」

「誰れが」

「誰れがつて、貴様等が、行るより外はあるまい」

「我々が、火を放けるのか」

「うむ」

高杉は、平然して居るが、志道を始め一同は、目を圓くして、只顔を見廻して居た。高杉は、

「どうぢや、名案ぢやらう」

「まア、待つて呉れ」

「待つてとは……」

「我々は武士ぢや。まさか火放けは出来まい」

「馬鹿な、貴様、何をいふか。火を放ける、といふに、何の不思議がある。今出来て居るのは、英吉利の公使館を



けぢやが、來春は、和蘭と米利堅の公使館を、引續きつくといい事を聞いて居る。はやく焼いて了はぬと、面倒になる』

高杉のいふやうに、焼打をかけるのが一番に早い、とは思ふが、流石に、一同は躊躇した。此様子を見ると、高杉は、少し言葉が荒くなつて、

『何を躊躇して居る。行るのか行らぬのか、はやく極めたら何うぢや』

志道は、

『まさか、快く承知は出来まい』

『それでは、何うする』

『さ、それは考へて居らぬ』

『それ見ろ、何も考へはなく、只だ何うしたら可からう、といふた所で、それが何うなる。火の放けられぬやうな事で、攘夷の實行が出来るか。夷人を斬る事さへ、平氣でやるものが、火の一つ放けられぬとは、何といふ腰抜けぢや。よし、貴様等が行れぬ、といふのなら、己が一人で、やつて見せる』

舌端火を吐くとは、是れであらう。高杉の語氣は、漸く鋭くなつて、今にも刀を取つて、立上りさうな態度に、志道は驚いた。

『まア、さう怒らずとも可からう。我々とても、強て行らぬ、といふのではない。何しろ火放け杯は、餘り感心出来ぬから、一應は考へて見ようとも思つたのぢやが、その外に方法がない、となれば、何でも行る』

『何も、己が怒つた、といふ次第ではないが、貴様が、餘り腰抜けであるから、それで、己が行つて見せやう、と思つたのぢや』

『それでは、行つて見ろ』

『可し、然らば行る』

『行れ』

相談は、終に決した。高杉の發案通り、公使館の焼打を、行る事になつたが、斯ういふ風に、高杉は、氣を以て、他を制する事に、一種の調子を、有つて居た。いづれも血氣盛りの連中、それでさへ、火放けと聞いて、多少の躊躇はした。無理もない事であるが、これを抑へつけて、トウ／＼實行の覺悟をさせる、といふ所に、高杉の腕の普通ならぬ點は、現はれて居る。

一一一

暗殺や放火は、武士らしき人が、爲すべき事でない。それを行らう、といふのであるから、一時は躊躇したが、いよく實行と決まれば、また其覺悟もつく。併し、何ういふ風にして、之れを實行するかは、高杉の考へを、聞く必要がある。

『焼打をするとして、其方法は、何ういふ事になるか』

『されば、それについて、己に考へはあるが、これも異存をいはず、否應なしの約束が出来るか』

『事、此に至つては、もう致方がない、一切汝のいふ通りになる』

『よし。然らば、先づ第一が、此役割ぢや』

『うむ』

『聞多ツ』

『何ぢや』



「貴様は、道案内の役を、引受けて呉れ」  
「は、ア、己は道案内か、よし、何でもやるぞ」

「もう一つある」

「此外に、未だ役目があるのか」

「左様ぢや。一同が、引上げの時の、道を開いて置くのぢや。此退口の設け方が悪いと、それこそ一大事ぢや。是れは、貴様の大役ぢや」

「可し、承知いたしました」

「貴様は、先づそれで可し、として、オイ、伊藤ッ」

俊輔は、未だチビ／＼獨酌で、飲つて居たが、

「何だ」

「貴様は、火放けの役、寺島と福原が、之れを輔佐るのぢや」

「オヤ、己は、火放けか」

「火放けの道具を、買集めるのも貴様の役ぢや。可いか」

「火放けの道具を買集めるとは、火放けに馴れて居るやうぢやな」

「己と、久阪は、見張りの役を引受ける。其他のものは、宿直の役人が、萬一にも妨げを、爲るやうな事であつた時

之れを逐拂ふ役に當るのぢや」

斯う役割が定まると、火放けと道案内が、一番に悪い役目だが、初めの約束で、異存は、いへぬ事になつて居る。

「いよ／＼焼打が了つて、引上げの時は、己と久阪が、呼子の笛を鳴らすから、左様思つて居て呉れ」

「よろしい。承知いたしました」

大體の相談は、之れで済んだが、實行の期日も、序に極めて置かねばならぬ。

「オイ、高杉、實行は、何日にするか」

「改めていふ迄もない。今夜すぐに行つて了はう」

「エーッ、今夜か」

「善は急げ、といふ諺がある。こんな事は、早いがよい」

「ふーむ」

善は急げとは面白い。其精神や目的は、何うあるにもせよ、人の家に、火を放ける事が、何故に善であるか、高杉

は、斯うした場合に、人の氣を、引立てる事が、上手であつた。如何に目的の爲には、止むを得ずとしても、放火を

爲る、といふやうな事は、決して善とは言はれぬが、實行する以上は、威勢よくやつた方がよい。殊に、斯うした仕

事は、一刻も早く、實行に入るのが、よいのである。人の決心は、時間と關係がある。どれほど堅い決心をしても、

一夜を過すと、如何な事情が、起るか判らない。また、連中の多い丈、其計畫が、何んな事から漏れるか、それも

計り難いから、すぐ其晩のうちに、行つて了はう、といふ高杉は、實に能く人の弱點を知つて居る。

一切の相談は済んだが、時刻は、未だ早いから、もう少しの間飲んで居るうちには、日も暮れるであらう、と、ま

た酒肴を申付けて、さかんに飲み出した。

酒に酔ふと、おきに居眠を始めるのが、伊藤の癖であつた。例に依つて、コクリ／＼始めた。隣に坐つて居た、寺

島が、

「オイ、伊藤ッ、また始めたな」

と、云つて揺起すと、伊藤は、漸く我れに返つて、大きな欠伸をした。

「居眠は、陰氣で不可、起きて居れ」



「何ッ、居眠は不可と、何ういふ理由か」

「陰氣で不可、といふのぢや」

「起きて居たツて、別に陽氣といふ理由もなからう」

「イヤ、左様でない。側て居眠をされると、陰氣臭くなるものぢや」

「左様かな」

伊藤は無 據く、眼を擦りながら、また 盃を執上げる。

「それ見ろ、飲めるぢやらう」

「うむ、飲めるには飲めるが、何となく物足らぬ氣がして、面白くないぞ」

「食ふに佳肴あり、飲むに美酒あり、而して、共に盃を執るものは、皆な同志の士ではないか、それに不足があるか」

「只一つ足りぬものがあるぞ」

「何が足りぬか、いふて見ろ」

「これぢや」

と、いひながら、左手の小指を出した。

「アツハ、、、、貴様の不足はそれか」

「何が可笑しいか、已ばかりではないぞ、誰れでも左様思つて居るぢやらう。何うぢや、これから押出さうか」

「何處へ……」

「聞く迄の事はなからう。土藏相模には、各自馴染もあることぢやから、彼家が可からう」

「ふむ、品川か」

「御互に、今夜の事は、生命がけぢや。うまく行つても、後日に露見したら、首が飛ぶ。もし仕損じたら、その場に

於て、斬死ぢや。いづれにしても、生命は無いだ。今飲む酒は、末期の水、これから行く道は、六道の辻、之れを考へると、氣が減入つて来る」

四

伊藤が、厭な事を發言したので、聞いて居るものは、餘り良い氣持が爲ぬ。

「オイ、馬鹿な事をいふな、末期の水とか、六道の辻とは何事だ。そんな事をいふなよ」

「いふても可からう。それに違ひないのぢやから、別に不思議はない。斯んな時は、寧ろ遊女買でもして、元氣を養つてから、始めるが可いのだ。未だ日暮を待つには、二响もあるぢやないか、その上に夜半までは、ナカ／＼待遠

いぞ」

「それも、左様ぢやな」

「どうぢや。出かけようか」

「うむ」

「貴様等が行かぬなら、己は、一人で行く」

「まア待て、己も行く」

「外にも連があらう」

伊藤と、寺島の相談を、聞いて居たものは、共に行くといひ出した。そこで、四五人が、揃つて押出す事になつた。

「それでは出かけようか」

「善は急げぢや、ハツハ、、、」

「うまい事をいひ居つたのう。ハツハ、、、」



伊藤等は、席を離れて、支度にかゝつた。高杉は、之れを見て、  
「オイ、貴様等は、既う出かけるか」  
「うむ」

「まだ早過ぎるぞ。今行つた所で、爲る事はないぞ」

「イヤ、品川で待合せる」

「何ぢや、品川で待合せる」

「土藏相模で、一ぶくやつて居る」

「まあ待て、それは思付ぢや。行くなら己も行くが、併し勘定は、何う爲る」

「誰れか、拂ふのぢやらう」

「貴様等のうちで、誰れが勘定を爲るのか、先づそれを聞き度い」

寺島は、大に驚いた。その他のものは、變な顔をして居る。

「それ見ろ、行くなら行くで相談をしろ、勘定の考へもなく、何の事ぢや。伊藤は、發意者のことぢやから、幾何か持つて居るのぢやらう」

「イヤ、己は、一文もないぞ」

「何んぢや、一文もない」

「己は持つて居らぬから、寺島に相談をかけたのぢや」

「オイ寺島、どうぢや、金はあるのか」

「こりやア驚いた。伊藤は、金がないのか」

「うむ」

「それでありなだら、人を誘ふのは酷いぞ」

「己に無いから、連れて行つて貰ふつもりぢやツた」

高杉は、思はず失笑した。久阪も、ニヤ／＼笑つて居た。

「行くなら皆、一しよに行かう。それには、先づ金の算段をせねばならぬ。土藏相模には、今迄の借もあるが、今度

行けば、生命がけの事を爲る前で、最後の遊びと、思はねばなるまい。我々も、毛利の家臣ぢや。死際の一夜に、

無一物の遊びは出来ぬ。前の借を残らず、拂つて、今夜の勘定と、一つに見積つて、ざつと百兩、之れを何うするか、その工面が、第一ぢや」

さア大變な事になつた。百兩は、さて措いて、五兩の工面も出来ぬ連中が、百兩の大金とあつては、何の工夫もつ

かぬ。高杉が、大い事をいひ出したので、品川行きは、駄目になりさうだ。伊藤は、堪まりかねて、

「そんな至難しい事を、いひ出して、折角の品川行きに、邪魔を入れるのぢや。それとも、高杉に、何とか工夫があるのか」

「貴様等に、工夫がないとなれば、己には、考へがある」

「それや、有難い。それを聞かせて呉れ」

「その代り、誰れか一人、使ひの役を、爲るのぢや」

「可し、誰れでも、其役にはならう」

「然らば、その使を、先づ極めろ」

「可し」

これから一同は、此使を、誰れにしようかと、相談を始めたが、他の事なら格別、借金の使ひは、誰れにしても厭

だ。高杉が、行けといふ先方は、大概は藩中の人であらうから、其人によつては、行つても無駄にならう。各自が、



手の届く限りは、借金をして居るので、迂つかり使ひに行くと、とんだ事になる恐れもある。そこで、各自が押付け合つて居て、ナカ／＼極まらなかつた。志道は、些か焦れ込んで、

『えッ、面倒な。いつそ藤八に極めたら、どうか』

『そりや面白い。藤八に限る』  
話合がついて、藤八拳をはじめた。志道は、其頃になつて、拳の稽古を始めたので、まだ藤八は、覺えたばかりであつた。トウ／＼志道が負けて、使ひの役になつた。

『とう／＼、拙者ぢや』

『うむ、聞多か。それは恰度よかつた』

『何故か』

『この使ひは、貴様のやうな、横着な奴でなければならぬと、思つて居たのぢや。貴様なら恰度よかつた』

『ハツハ、、、、こりや驚いた。拙者は、横着者か』

『貴様が、横着者でなうて、何處に横着者がある』

『まア、それは可いとして、全體、何處へゆくのか』

『その行先は、來島又兵衛ぢや』

『エッ、來島へ行くのか』

『何んで、驚く』

『別に驚くといふほどでもないが、來島は、少し縁つゞきになる。それに、拙者も借りがあるから、此使ひは、無理

かも知れぬ』  
『たとへ、どんな事があつても、大丈夫だ。行きさへすれば、必ず金は出来るのぢや』

『左様か。それなら行つてもよいが、どういふ事情があるのか、まづそれを聞か』  
『それは斯ういふ、次第ぢや』  
と、高杉が、膝を進めた。

五

『來島の奴、この頃では、女が出来たのぢや』

これは、不思議な事と、一同は、多少の疑ひを以て、耳を傾けた。來島又兵衛に、女などの出来さうな筈がない、と思ふから、高杉の言ふ所に、疑も起つて來る。

『或る料理屋の娘に、おるいといふ美人があつて、それを來島が、手に入れて、この頃では、樂んで居るのぢや。そこで、其女の手紙を偽作して、これを材料に、百兩借り出して來やう、といふのぢや』

志道は、之れを聞くと、いさゝか呆れた。

『何ぢや。それは騙りではないか』

『まづ、さうぢやな』

『拙者に、騙りをしろと、いふのか』

『貴様なら、慥かにやり得る、と思ふ』

これは又、迷惑千萬な事と、志道も、流石に即答はしなかつたが、一同から、

『行れ／＼』

と、いはれる。高杉からも、頻りに言はれる。これが出来ねば、品川へは行かれぬ。一同の爲めには、多少の迷惑も、忍ぶ外はなかつた。



「宜しい、行つて来よう」  
「左様か。それでは誰れか、女の手紙を、書くものはないか」

「さ、このうちには、何うかな」

大和彌八郎が、假名文字の巧い事を知つて居るものがあつて、大和に書かせる事になつた。

手紙が出来て、一應は朗讀する、といふ事になつて、大和が、讀み上げる。一同は、手を拍つて、

「巧いものぢや。流石に大和ぢや」

と、いつて感心した。志道は、之れを携へて、來島の許へ出かけた。一同は、志道の歸りを、首を長くして、待受けて居るのであつた。

來島は、當時、藩の本邸に留守居を、勤めて居た。舊幕時代の留守居といふ役は、一種の交際掛りであるから、各藩毎に、多くは粹の利いた人を選んである。武士の通人でなければ、ナカ／＼務まらぬものと、なつて居たのである。けれども、來島は、そんな通人ではなく、どちらかといへば、融通の利かぬ、堅い人であつた。

今、周布政之助が来て、何か頻に話し込んで居る所に、執次の家來が、

「ハツ、志道聞多殿が御見えになりました」

「何んと、志道が參つたとか」

「ハイ」

之れを聞くと、周布は、

「御來客のやうぢやから、拙者は、御免蒙らう」

「その御遠慮には及びませぬ。志道聞多で御座る」

「イヤ、却つて居らぬ方が可からう」

流石に、周布は、氣が利いて居る。來客を、志道と聞いて避けるのは、どうせ此連中の用事といふのは、確な事ではなからうから、自分の居らぬ方がよい、と思つて、來島の引留めるのを聞かずに、強て歸つた。引違ひにはいつて来て、志道は、一通りの挨拶を済すと、

「さて、お伺ひいたしましたるは、餘の儀でも御座らぬが、實は、麻布の御屋敷に居る、若侍のうちに、退引ならぬ事の出来いたし、何とかして救ふてやらねばならぬ儀の御座つて、御相談の爲めに、お伺ひ致したので御座る」

來島は、厭な顔をして、

「何うしろ、といはつしやるのか」

「金子を少々、御都合願ひ度いのぢや」

「怪しからぬ。また金子の事で御座るか」

噛んで吐き出すやうにいはれても、志道は、平然したものだ。

「怪しからぬ、とは……」

「いつも、金銭ばかりでは御座らぬか、又兵衛は、御留守居てこそあれ、金の生る樹は、有つて居らぬ」

「御道理千萬で御座る。併し、若侍の窮苦を見るに見かねて、かく推參いたしたる、拙者の心も、少しは汲み取つて、今日は、是非、御承引を願ひ度い」

「イヤ、御免蒙る」

「どういたしても、御承引下さらぬか」

「平に御免ぢや」

「然らば、強て御願ひ申さぬ」

と、いつて、立ちかゝつた。



「まア、待たつしやい」

「何か、御用か」

「全體、足下等は怪しからぬ。明けても、暮れても、遊女屋へのみ入り浸りて、放蕩のしたい三昧、それでは相済むまいが、何と思はつしやる。高杉などは、殊に甚しい。今日の事も、彼等と、相談の上であらう。高杉の父、小忠太殿は、先日、若殿様の御供で、京都へ参られて、今は彼の地に、居られるが、出立の際に、拙者への御話は、伴晋作も、此頃では人中へ出て、押も押されもせぬ、一人前の武士にはなつたが、何分にも過激の振舞ひのみで、心配は此事、萬一にも、何事か仕損じて、金子に差支へるやうの事が御座つたら、一時の御貢を、願ひ度い、と、親なればこそ、此心配もして下さる。それも知らずに、我儘の仕放題は、何事ぢや。その時、山縣半藏殿にも、同様の頼みがあつたと、聞いて居る。足下とても、名家の末葉の、井上家に、生れて居りながら、放蕩に、日を送るとは、何といふ事ぢや。ちと慎むが可い」

眞面目な來島は、心からの諫言を、いふのであつたが、志道の耳には、鬼の念佛ほどにも利かぬ。

「ア、つまらぬ事を聞かされるものぢや。金は貸すが、小言もいふ、とあれば、少しは身にも泌みるが、金を貸さぬ代りの小言では、一向に聞き榮えもせぬ、ハツハ、、、」  
勝手な熱を吹いて、志道は、立ち上つたが、また座について、何かいひ出しさうな様子だから、來島は、恐い眼をして、志道を、睨んで居た。

六

志道は、懷裡へ、手を入れて、一通の手紙を、取出した。  
「すつかり、忘れて了ふた。この手紙を、頼まれて来たから、お渡し申す」

「何にツ、手紙を……」

「さ、受取らつしやい」

來島は、何の手紙かと、思ひ乍ら、受取つて見ると、おるいからの手紙であるから、流石に、顔を赤くして、すぐ袂へ入れよう、とするのを、

「ちよツと、來島氏、その返事を、貰つて行き度い」

「まア、可い」

「折角、持つて来た手紙を、一見せずに袂へ入れるのは、甚だ怪しからん。返事を貰つて来て呉れ、といふのだから、一應は讀んだら、何うか」

「何、よろしい」

「イヤ、よろしくはない。返事を貰つて、行き度い」

頻りに志道が迫るので、來島も據なく、手紙を出して、熟々見ると、全く偽筆であつたから、思はず疳癩が起つた。

「これは偽筆ぢやないか、貴様等は、悪い奴ぢや。こんな事に迄、計略を用ゐて、人を欺さうとするのは、甚だよろしくない事ぢや」

「ハ、ア、それは、偽筆かな」

「立派な偽筆ぢや。おるいの筆跡とは、全く違つて居る」

「成程、表記丈けを見て、すぐ偽筆と知るやうでは、平生から、手紙の遺取もはげしいな」

「やツ、それは……」

「どうだ。恐れ入つたか」



「うーむ」

來島は、尻尾を抑へられて、ギューともいへぬ。

志道は、笑ひながら、

「斯く露見した以上は、致方がない。その手紙は、返して呉れ」

「こんなものを、持つて歸つて、何うする氣か」

「重役へ、届け出るつもりぢや」

「何と、重役へ、届け出る」

「只今、邸内に於て、斯様な手紙を拾ひました。苟くも御留守居ともあらうものが、かやうな淫猥な事をいたして、

宜しいものか、といふて、聞いて見るのぢや」

「馬鹿なツ、そんな事をされて、堪まるか」

「たとへ、何といはれても、届け出るつもりぢや。最前の諫言に基いてするのぢやから、ぐづ／＼いふ所はない筈

ぢや」

來島は、いよ／＼窮して、今は只黙つて居るばかりだ。志道は、仕済したりと思ふ心を、色にも出さず、強て其手

紙を取返さう、とするので、來島も、頗る困つた。

「さう五月蠅く、いふものではない。僞筆の手紙を以て、いたづらを致した所で、何の詮もあるまい。それよりは

入用の金子は、どれほどの額か」

「貸して呉れぬのに、金の額をいふた所で、致方あるまい」

「融通は、御互の事ぢや。少し位の事なら、何とかならう」

もう大丈夫だ。これ迄にいへば、必ず貸すに違ひない、と、志道は、ます／＼落ついて、

「金の額は……」

「うむ、その額は……」

百兩とはいひたかつたが、何となく不安に思はれて、左様もいへず、

「五十兩あれば、よいのぢや」

「何と、五十兩ぢや。ふふーむ」

來島は、少し弱つた。その頃の五十兩は、全く大金なのであるから、容易に諾とは、いへまい。併し、貸さぬとい

ふたら、跡が面倒でもあらう。足元を見込んで、憎い事をいふ、奴だ、とは思つたが、今更にしやうがない。

「よろしい。かき集めたら、五十兩にはならう。少時、待つてくれ」

來島は、奥へはいつた。

先づ之れで、半ば都合はついたが、彼の様子では、百兩といふても出来たらうに、惜しい事をした、とは思つても、

もうしやうがない。來島は、手文庫を携へて、元の席についた。

「さア、受取らつしやい。五十兩ある」

「これは、迷惑をかけて、相済まぬ」

紙の上に、列べた金を、すつかり數へて、胴巻の中へ、ザラ／＼と入れた。

「それでは、おいとま申す」

「當分は、此上の都合もつかぬ。その邊は、宜しく察してくれ」

「これで、一時の急は凌げる。再度の迷惑はかけぬ」

來島の邸を出てから、志道は、考へた。

「これ丈では、間に合はぬ。思ふた半ばの五十兩。もう五十兩の都合をせねば、歸つた所でしやうがない。はて、



何としたものか』  
と、しばらく思案して居たが、ハタと手を拍つて、山縣半蔵の邸へ、やつて来た。  
今、來島から聞いたばかりの、高杉の事から思ひついて、山縣を、巧く欺まし、五十兩の都合を、させようといふのであつた。

山縣は、極めて眞面目の人、來島のやうな弱點もなかつたが、志道は、心に成算があつて、尋ねて來たのだ。

『ヤア、志道か、珍らしいではないか』

『ツイ忙しいものぢやから無沙汰に過ぎた』

『今日は、どういふ用向か』

『少し困つた事が、出來たのぢや』

『何事か』

『高杉の身上について、是非相談したい』

來島の話のうちにも、あつた通り、高杉の父から、かねて晋作の身の上については、いろ／＼と、頼まれて居たのであるから、山縣も、聞流しにはならぬ。

『實は、斯ういふ次第ぢや』

と、これから志道が、話し出す、山縣は、ぢつと考へながら、聞いて居た。

七

『高杉の奴、今ま品川の土藏相模に、捕囚になつて居るので、之れを救ふには、少しばかり金子が、入用の處、餘りに火急の爲め、何うにも方法がつかぬので、いろ／＼考へた末、貴下に、内談をして見よう、と思つて來たのぢや』

が、何とかなるまいか』

『土藏相模に、捕囚になつて居る、とは、何ういふ次第か』

『今迄に、遊興の支拂ひが、決らずに居つた所、前夜、また／＼出かけて、トウ／＼桶伏の仕置に、逢ふて居るのぢや』

『そ、そ、その桶伏の仕置とは、全體、どういふ事か』

『彼の癖の習慣として、遊興費の支拂が決かぬものは、桶の中に伏せられて、その上に、石を乗せられる。之れが無錢遊興の仕置と、申すのぢや』

『そりや怪しからぬ。高杉は、恥を忘れたのか、情ない心になり居つたのう』

眞面目で、馬鹿遊びをせぬ、山縣には、志道の出鱈目が、解らなかつた。殊に、宿場の女郎買などは、した事がないから、猶更に解らないのだ。それを付目にして、志道は、口から出まかせに、山縣を、説きつけよう、とするのである。

『今、彼是れいふても致方がない。その金子は、何程あれば良いのか』

『僅かに五十兩ぢや』

『あツ、五十兩……それは、大金ぢやが、一夜の遊興に、どうして、五十兩を要するのか』

『一夜の遊興では御座らぬ。前からの勘定が、積み積つて、五十兩になつたのぢや』

『それ丈けなければならぬのか』

『左様……』

『只今、それ丈け纏まるか、どうか、しばらくお待ち下さい』

山縣は、すつかり志道に欺まされて、奥から有る丈けの金を、持つて來た。



「まことに恥かしい次第ではあるが、かき集めて四十兩……跡の十兩は、ちよつと時借をして参るから、おまち下さらぬか」

「さう御心配をかけてはすまぬが、甚だ立入つた事を、御尋ね申すやうでは御座るが、いづれへ、御越なざるか」

「來島又兵衛殿方へ、参るつもりぢや」

「まッ來島……」  
これには、流石の志道も驚いた。もし來島へ行かれたら、一切の事は露見するのだから、どうしても、これは引留めねばならぬ。

「イヤ、それでは、却つて恐入る。四十兩あれば、跡は、何うにか都合もつかう、と存ずる。兎に角、これは頂戴いたして参る」

胴卷へ、金を入れる、と、その儘に、大急ぎで、戸外へ飛出した。

海月樓に、待受けて居る連中は、志道が、うまく遣つて來て呉れ、ば、よいがと思つて、いろく噂話をしながら、時刻を移すうちに、久阪が、高杉に向つて、

「今、決めた事ではあるが、火放けは、些と考へものぢや」

と、いふたので、高杉は、烈火の如くなつた。

「何ぢやと、考へものとは何事ぢや。貴様は、腰が抜けたか」

痛馬を浴びせられて、久阪も、躍起となつた。

「腰抜とは怪しからん、暴言も大概にしる」

「黙まれッ、暴言とは、聞捨てならぬ」

双方ともに、腰を立直して、今にも腕力に、訴へようと爲る。その様子に驚いて、一同は仲裁にはいり、ゴタ／＼して居る所へ、志道が、歸つて來た。

「何うしたのか、何を争ふて居る」

「おう、聞多か、久阪と高杉の喧嘩ぢや」

「何ッ、久阪と高杉の喧嘩ぢやと」

「うむ。双方が、剛情を張るので、困つて居るのぢや」

「それやア、怪しからん、拙者を、金借に出して置いて、その跡で喧嘩するとは、何事ぢや。そんな馬鹿を々しい事なら、拙者は、最早止める」

と、言ふや否、その前に在つた、臆を取つて投げる。これから志道が、暴れ出して、手當り次第に、投げうちを爲るので、久阪と高杉の争ひは、いつか止んで、志道を抑へる方に、一同が、力を合はせるやうになつた。

一同の力で、漸く志道の暴れるのは、抑へて了つたけれど、久阪と高杉の争ひも、此場合に、何とか調停をせねばならず、一同は、二た組に別れて、その調停にかゝつた。

志道の言ふ所を、聞いて見ると、

「これほどの大事件を、一同の相談で、決めて置きながら、それが爲めに、内輪喧嘩を始める、とは、何事であるか、高杉も、久阪も、どちらの申分がよいか、そんな事は、今問ふ可き必要はない。一旦決めた事は、何事を措いても仕遂げなければならぬ。左なきだに、毛利の家臣は、議論倒れの連中である、と、口善悪なきものは、言讒して居るではないか。拙者には、遊女買の金の算段に奔走させながら、此内輪喧嘩を、爲るとは怪しからぬ。寧ろ焼打など、止めてしまへッ」

と、いふのであつた。これには一應の道理もあり、志道の勢ひが、餘りはけしかつたので、高杉も、久阪も、すつか



ら凹垂れて了つて、志道に、いろ／＼辯解をしたので、相談通り、今夜のうちに、焼打は決行する事になった。昔の  
壯士の状態が、現はれて居て、頗る面白い。

八

今の時計で、午後の三時頃、一同は、雨を冒して、品川へ押出した。土蔵相模といふ女郎屋で、時刻を移してから  
御殿山へ出かけよう、といふのであつた。

昔、よく流行つた道中双六、その振出しが、江戸の眞ん中、日本橋であつた事は、よく人の知る所だ。先づ江戸を  
離れて、東海道の入口が品川宿であつた。左に海を控へて、細長い町の左右には、澤山の女郎屋が、軒を列べて居る。  
品川の繁昌は、女郎屋が、中心になつて居たのだ。宿場女郎と、一言に蔑すけれど、品川には、却々良いのが居て、  
吉原の遊びに、厭きた人達を、相應に引付けて居た位で、芝から高輪へかけての、大名屋敷の武士が、足しげく通つ  
たものである。

土蔵相模は、評判の家で、抱へられてゐる女郎のうちには、吉原の花魁も及ばぬ、掘出しものがあつて、相當に身  
分のある人迄が、品川通ひをやつたので、宿場でこそあれ、品川は、通人の間にも、存外の人気があつたものだ。  
従つて、土蔵相模の名は、中流階級の間に、評判されるほどの樓であつた。

高杉等は、此樓に、押かけて来て、今宵を限り、といふ氣込みで、底抜きを、やつて居る。前から度々来て居  
るので、各自に馴染もあり、遊び馴れて居る樓として、幾分か調子づいて、その騒ぎは一通りでない。そのうちに、酔  
も廻つたから、一と眠入りしよう、とあつて、それ／＼に、座敷へ引取る事になつた。高杉と、久阪は、流石に、指  
揮官の格で、眠ることもならず、差向ひで、いろ／＼の打合せに、夜をふかすのであつた。  
此際に、一寸挿んで置きたい話がある。それは、他の事でもないが、火放けの役を托せられた、三人の事である。

伊藤は、何事にも敏くして、他の氣の付かぬ所に、よく行届くといふので、火放けの道具を、買集める役を振當られ  
たのであるが、寺島と福原がその副役になつたのは、此二人が、焼弾をつくる事に、妙を得て居る、といふ所からで  
あつた。紙を張抜にした、小さい毬の如きもので、その中には煙硝が、一ぱい詰まつて居て、口火をつけると、恐ろ  
しい音がして、爆裂する。之れを焼弾と稱して、毛利家の軍學者が、得意としてつくるのを、此二人が、巧く眞似て  
平生から、つくつて居るので、焼打の場合に、その焼弾を、使用する事になつて、火放けの掛りにしたのである。

丁度、此事件の起る、二三日前の事であつた。寺島が、麻布の屋敷で、獨りボンヤリして居る所へ、志道が、態々  
便をよせて、

『すぐに遊びに來い。品川の土蔵相模で、待つて居るから』

との事であるから、寺島は、すぐに支度して出掛けた。

もう日の暮れる時分、品川の大木戸へ来た頃は、全く夜になつて居たが、屋敷を出る時から、小便がしたくてな  
らなかつたのを、此處まで堪忍して來たが、もう堪忍が出来なくなつて、大木戸を、堅めて居る、警固の役人の詰所  
の扉脇で、四邊の暗いを幸ひ、扉に向つて、小便をはじめた。所へ、町廻りの役人が、歸つて來て、之れを見たか  
ら、ズカ／＼と、寺島の傍へ立寄つて、

『これッ、何をして居るか』

と、聲をかけた。寺島は、不意に聲をかけられて、

『ヤア、これは……』

『足下は、今其處に、何をして居られたか』

『イヤ、どうも恐れ入つた』

『恐れ入つたでは分らぬ。全體、何をして居られたか』



「實は、小便が出たかつたので、ツイ此處で、失禮した」  
「これは怪しからぬ。我々の詰所の堀へ、小便をかけるとは、亂暴極まる」  
「まことに申分けない。どうか見通して、貰ひ度い」  
「相成らぬ。見れば、相當の身分ある御仁のやうぢやが、甚だ不都合極まる事をなさる。詰所まで、はいらつしやい」  
「それは、迷惑千萬ぢや。どうか御見通し下され」  
「相成らぬ。さア來さツしやい」

寺島の袖を、抑へて放さぬから、寺島も無據く、詰所へ、曳かれて來た。  
一應の調べはあつたが、只小便をした、といふ丈の事で、場所が悪かつた爲めに、事は、少し面倒になつたのである。まさか、藩名や姓名を、云ふ氣にもなれぬ。事柄が事柄だけに、恥かしいといふ氣もあつて、何となく逡巡して居る。役人の頭が、今居らぬので、どう處置をつける、といふ事にもならず、役人の方でも、伴れては來たが、此處分には困つた。

「只今は、上役の不在中、しばらく待つて居さツしやい」  
と、いはれて、今ていへば巡查派出所の隅へ、留置きになつたのである。寺島は、此事については、少しも驚かぬが、此に困つた事のあるのは、懷裡に、焼玉が二つ有る。若し之れを見付けられると、事は面倒になる恐れがあるのだ。江戸の朱引内で、煙硝をつめた焼彈を、夜間持ち歩くのは、甚だ疑はしい、といはれたら、此申譯はむづかしい。事件は、小便をした丈の事であるが、焼彈の處分について、寺島は、獨り苦むやうになつた。

九

今日のやうな時代でも、煙硝や焼彈を、持つて歩いたら、何等かの嫌疑を受ける。また嫌疑をかけられたら、その

申譯は、むづかしい事になるだらう。況して、舊幕の時代に、其んな物を、持ち歩いては、まことに宜しくない。寺島は、之れを何としたものか、と、その心配は一通りではなかつた。自分は、致方がない、としても、藩名が出る事が恐ろしいのであつた。

古人の謂ふ通り、窮すれば通ずるもので、寺島は、漸く一策を、案じ出して、之れから袂のうちで、その焼彈を潰して、密と捨てようとしたが、紙の張拔で、つくつてあるので、ナカ／＼堅い。普通の力で潰れるやうでは、爆裂の力も弱い道理、これは潰れぬのが、當然である。ソコで、苦しまぎれに便所へはいつて、一つ／＼嘔潰しては、呑込んで了つた。便所へ、はいつた以上、糞壺へ、捨てたら可からうに、その考へもなく、呑込んだのだから、可笑しいぢやないか。そのうちに、役人の頭も、歸つて來て、また調べを受けたが、つまり小便をした、と、いふ丈の事で、之れといふ罪を犯したのではないから、將來の注意をうけて、すぐに放免された。

無事に放免はされたが、今呑込んだ、焼彈の爲に、氣色の悪さ、といふたら、何に譬へやうもない。大概な事には驚かぬ、寺島も、此一事には、頗る弱つて、其氣色の悪いのを堪へながら、辛うじて土藏相模へ、はいつた。

志道は、長い間の酒浸しに、もう熟柿のやうに、なつて居た。寺島が、はいつて來るのを見て、

「大層遅かつたのう」

「うむ、少し用事の都合で遅れた」

寺島の顔色が、甚だ良くないのを、はやくも見て取つて、

「どうか致したか」

「いや、どうもせぬ」

「しかし、顔色が悪いぞ。それに、貴様の態度も、何となく變ぢやが、途中で、何か間違ひでも、あつたのではないか」



「そんなに、變つて居るか」

「まるで死人のやうぢや。ハツハ、、、」

「馬鹿な事を申すな」

「眞正ぢや」

「實は、少し事情があるのぢや」

「さうだらう。何か事情があるに違ひない」

「己れは生れてから、斯んな厭な氣持はないぞ」

「左様か、全體、どうしたといふのか」

「彼の大木戸の所まで来て、小便をしたのぢや」

「何だ、つまらぬ。そんな事は何うてもよい。貴様の顔色の悪いのは、何の爲めか、先づソレから語れ」

「話は、小便から起るのぢや」

「汚ない事ぢやな」

「役人の詰所がある。彼の堀へ小便をかけたので、役人に抑へられたのぢや」

「ふむ、それは面白いな」

「少しも面白い事はない。そこで、小便の事は、どう面倒になつても、その先きの知れて居る事ぢやが、懷裡に、焼

弾が二つ、有つたのぢや」

「えッ、焼弾が……」

「何の爲めに、ソナナものを持つて居たのか」

「何の爲めか、といはれては、少し答へに困るが、實は、此間から試験に、つくつて居た、そのうちの二つぢや」

「ふむ、成程、それが何うした」

「藩名の出るのも困るし、己れの一身からいへば、焼弾の詮議をされては、猶ほ困る。そこで、種々に考へた末、ト

ウ／＼便所の中で、その二つを、噛み潰して、吞込んで了つたのぢや。どうも氣色の悪い事は此上なして、己れも

弱つて居るのぢやよ」

「ハツハ、、、、貴様も、變な奴ぢやな。焼玉を吞込むとは、實に驚き入つた」

「煙硝が、腹に入つたら、何ういふ事になるかな」

「そんな事は、己れにも解らぬが、しかし、何うせ良くはあるまい。貴様が、大きく口を開けた、所へ、此蠟燭を持

つて行つたら、腹の中で、煙硝が、燃え出したらうよ、ワツハ、、、」

「貴様は、他の憂へを喜ぶのか」

「そんなに怒るな」

「怒るなどいふて、貴様が、馬鹿な事を吐かすから、己れも、腹が立つのぢや。それに、何が可笑しくて、笑ふか」

寺島は、無性に怒るが、志道は、獨り笑ひ轉じて居る。

焼弾の二つ位、吞込んだ所で、それが、どうなるといふほどの事でもないが、寺島は、何だか氣色が悪くて、弱つ

て居るのに、志道が、頻りに交返すので、寺島は、ムキになつて怒るのであつたが、併し、一盃二盃と酒の進むに従つ

て、寺島の氣色も癒り、酔ふに連れて、氣焰も、吐くやうになつた。

却説、一同は夜の九ツ半になつて、土藏相模を、出かけた。伊藤は、火放けの道具を揃へて、之れを油紙に包み、袴の下にかくして、第一番に出かけた。成可く人目にかゝらぬやう、離れ々になつて、御殿山へ押出した。



時に、文久二年の十二月十三日、朝からの雨は、ます／＼はげしくなつて、殊に、風さへ加はり、品川の沖から、横さまに降りかける雨に、誰れも、彼れも、ぬれ鼠のやうになつた。その冷たさ寒さは、實に尋常でない。雨具の用意は、始めからなかつたのであるから、途中で買求めた、傘位では、とても浸きがつかぬ。

一〇

將軍の、膝下の高輪へ、各國の、公使館をつくらう、としたのは、幕府の英勳ではあつたが、一般の人氣は、甚だ良ろしくなかつた。町人や百姓までが、彼是れいふ位であるから、況して、攘夷派の武士が、非常な憤慨を以て、幕府に衝つて行つたのも、決して無理ではない。

雨は益々はげしく、降る。風も、却々やまない。平生でも寂かな、御殿山の夜は、殊に寂しさも一層であつた。追追に集まつて來たのは、高杉等の一列であつた。先づ志道が、公使館の構内へ乗込んで、道を拓く役目であるが、四圍の竹柵は、伊藤が、小さい鋸を以て、二間ほど斬拂つた。志道は、其處からはいつて、難なく扉を乗越へた。寒い夜、而かも、風雨がばげしいので、平生ほどの警戒もなく、志道は、門番小屋の前に、やつて來て、小屋の中を、覗いて見ると、兩人の番人は、墨玉火鉢を抱へて、よく寝て居る。志道は、遂々小屋へ、はいり込んだ。

「これツ、起ろ」

番人は眼をさました。

「ヤツ、貴様は、何者か」

「しつ、静かにしろ、聲を立てると、ぶち斬るぞ」

腰の刀に手をかけた。番人は、深へ上つて、布團の裡へ、潜り込まう、とするのを、志道は、強て引起すと、すぐに繩を以て、兩手を縛り上げ、糞簀を、食ませて了つた。

「じたばたすると、酷い目に逢はせるぞ、神妙に致して居れ、よいか」

何といはれても、口は利けぬ、只だ眼を、パチ／＼させて、點頭いて居た。

志道が、門を開けたから、一同は、容易にはいる事が出來た。高杉と、久阪は、指揮役の格で、それ／＼に手配をすませた。伊藤、寺島、福原の三人は、火放けの役で、漸くに出來上つたばかりの、公使館へ、火を放けた。例の焼

弾が、先づ二つ三つ、すばらしい音をさせて、爆發した。見る／＼うちに、全館へ、火は廻つた。雨は降つて居るが

風が吹きつけるから、火の廻りは、存外に速かつた。

宿直の役人が、はやくも之を見付けて、大騒ぎになつた。それ／＼に、武器を携へて、現場へかけつけると、怪しい風體の奴が、澤山に居るので、

「それツ、取押へろ」

と、一同へ、武器を持つて、打つてかゝつた。豫て覺悟の連中は、之れと渡り合つた。けれども、是等の役人には、

何の怨みもないのであるから、只だ對手になつて、時刻を引延す丈の事であつた。もう火は、充分に廻つて、全館

は、全く火と、煙に、包まれて了つた。高杉と、久阪が、呼子の笛を、ピー／＼吹いたから、一同は、役人をあしら

ひながら、引上げるが、役人の方でも、強て長追はしなかつた。それで、一通りの役目は、すませたので、今度は

火消の方につとめるのであつた。そのうちに、高杉等は、構外へ出て、散々に、逃げて了つた。

高臺ではあるし、火は、雨空に反射つて、忽ちに人の知る所となつた。各所の火の見櫓では、さかんに半鐘を打ち

鳴らす。江戸名物の火消組は、繩をふり立て、梯子をかついて、御殿山へ、走せ集まつて來た。

高杉と、久阪は、一たん現場を遁れたが、また逆戻りして、見物人の中に交つて、見て居た。集まつて來たものも

火元が異人館だ、といふので、誰れ一人として、手を出すものはなかつた。火消人足も、同じやうに、手を束ねて、

見て居るばかりであつた。進んで火は放けぬ迄も、此館の燒けるのは、心のうちでは、喜んで居るのだ。



『どうです、よく燃えますな』

『さうですな、どうして斯んな晩に、火を出したのでせう』

『焚火でもして居たのでせう。今夜は、随分さむかつたから、大概そんな事てせうよ』

『何しろ、此火事は、怪し火でせう』

『さうでせうか』

『さうですとも、今頃に、斯んな所から、火の起る筈がありませんや。何でも放火ですな』

『來年の春は、異人が来るんだ、といふ事でしたが、斯うなつちやア、異人も來ますまいよ』

『良い心持ですな』

『火掛りをするものも、ねえやうですな』

『そりやア無え筈です。異人屋敷の焼けるのは、誰にしたツて面白いと、思つて居るでせう』

『まさか、さうでもあるまい』

『あれを御覽なさい。立派な武士が二人、頭から雨に浴かつて、嬉しさうにして見て居るぢやアありませんか』

『成程、さうですな』

『そのうちの町人が、高杉と久阪の前へ、やつて來た。』

『エー、旦那』

『何ぢや』

『よく燃えますな』

『うむ、よく燃えるのう』

『どうして、斯んな事になつたのでせう』

『これが、天火といふものぢや』

『へ、一、天火と申しますと、どういふ事で御座います』

『將軍の膝下へ、こんなものを建てたのは、甚だ怪しからん、といふので、天が怒つて、火になつたのぢや』

『そんな事が、あるもんでせうか』

『現に此通りぢや』

『さうですか、天火といふもんですな』

『さうぢや。天の憎しみて、斯うなつたのぢや』

『成程』

火元見の役人が、高張提灯を立て、多くの火消方をつれて、乗付けて來た。高杉と、久阪は、疾くも姿を、隠して

しまつた。

一一

海月樓へ、引上げて來て、高杉と、久阪は、着心地のよい、襦袢に着換へ、二階の一室に、窓を開けさせて、海を隔て、遙に御殿山の火を見ながら、如何にも愉快らしく、酒を飲みはじめた。

時刻の移るにつれて、同志が追々に歸つて來た。

『やアどうぢや』

『昨夜は、寒かつたのう』

『しかし、うまく行つて、何よりぢや』

『あアいふ調子には行くまいと、思つて居たが、存外に好都合ぢやつた』



一番に遅れて、伊藤が、歸つて来た。

『おう、伊藤か、大層ゆつくりぢやつたのう』

『怪しい奴に尾行されたものぢやから、それをはぐらかすので、大分骨を折つた。ハツハ、、、』

高杉は、伊藤の辭の切れるを待つて、

『オイ、聞多は、何うした』

と、訊かれて、

『まだ歸つて来ぬか』

『うむ、彼奴丈けが見えぬ』

『そりや、可怪しいぞ、昨夜は、一番先に引上げたやうぢやつたが、未だに歸らぬとは、ちと變ぢやが、どうかした

のぢやあるまいか』

他の者も、

『そりや、何ともいへぬぞ』

と、いつて、頻りに心配を始めた。

伊藤は、殊に仲善丈けに、その心配は尋常でない。聞多の身の上に、萬一の事でもあつては、それこそ大變と、頗

る心懸りに、なつて来た。

『どうぢやらう、捜しに行つて見ようか』

『イヤ、それには及ぶまい、彼奴の事ぢやから、廻り道でも、致して居るのぢやらう』

高杉は、伊藤の思ふほどに、心配はして居らぬ様子だが、伊藤の心配は、ナカ／＼深い。

『萬一の事があつては、同志の爲めにもならぬ。兎に角、捜しに行かう』

『聞多が、どうなつたと、思ふのか』

『別に、何うといふ考へもないが、もし押へられてもしては、面倒ぢや』

『馬鹿な事をいふな。彼奴が、却々押へられるやうな、間拔けな事をするか、我々ですら、無事に引上げて来たのに

何で押へられるものか』

『併し、大勢に取詰められて、切腹でもしては居らぬかと、思ふて……』

『他に斬られたら格別、彼奴が自分から死ぬか、まア捨て置け、今に歸る』

『左様かな』

流石に、高杉は、年が若くて、一列の首領格になる丈けあつて、人を見るのに眼があつた。聞多が、遅れて居るの

に對して、少しも疑ひを有たず、伊藤の捜しに行くといふのを、拒んで、捕へられるやうな間拔けでもなければ、自

分て死ぬやうな、智慧のない奴でもない、といふた、此短い辭のうち、志道の性格が、殆ど言ひ盡されて居る。

酒盃は、盛んに飛び、元氣は、益々振ふ。斯うなつては何時までも、切上げはつくまい。八つ過ぎになつて、志道

は漸く姿を現はした。

『やア、聞多が、歸り居つた』

『おう、成程、聞多ぢや／＼』

一同が、席を立て、大騒ぎをする。多少の心配はあつたのだから、無事な姿を見れば、思はず喜ぶのも無理はな

い。

『やア、遅くなつた。心配をかけて、相済まぬ』

高杉は、ニコ／＼笑ひながら、

『伊藤ツ、どうぢや。己の眼は違ふまい』



「うむ」  
伊藤は一言もない、まさに高杉が、いふ通りであつた。本人の志道は、一同が、心配したほどでもなく、存外に平氣で居た。

「今日の寒さは尋常でない。肉も、骨も、痛くほどぢや。二三盃飲らんうちは、話も出来ぬ」  
熱燗の酒を、グーツと飲乾して、宛も心地よさうにして居る。

「オイ、昨夜は、何としたか」

高杉は問ひかけた。

「別に何うもせぬが、只だ面白かつた」

「貴様は、全體、引上げの笛を聞いてから、何うしたか」

「かねての約束通り、引上げたのぢや」

「それにしても今迄、何處に居つたのか」

「まア、可いぢやないか」

「可否をいふのではない、一同の心配して居たのに、對しても、一應は、斯ういふ事情があつて遅れた位ゐる事は、いふても、可からう」

「そんな事を、聞いても致方があるまい。遅れても歸つて來たら、それで可いではないか」  
志道は、ナカ／＼遅れた事情をいはぬ。左様なると、猶ほ聞きたいのが、人情の常である。

一一一

「貴様は、何ういふ理由で、遅れた事情をいはぬか。我々に話しの出来ぬ筈はない、と思ふが、どうしてもいはぬか」

高杉が、頭ごなしに極めつけた。殆ど訊問の口調で始めたから、志道も、流石に弱つたらしい。

「宜しい、然らば、物語らう」

「うむ、どうした事情か」

「斯ういふ次第ぢや」

一同は、膝を進めた。

「昨夜、いよく引上げとなつて、拙者も、引上げようとはしたが、最後まで見届けて行かねば、折角の企ても、物笑ひのたねと思ふて、また引返し、物影に身をひそめて、公使館の燒落ちるのを見て居つたのぢや。高杉と久阪が、見物人の中に、立つて居たのは、慥かに見届けた」

「左様か、流石ぢや、貴様なればこそ、大膽な事も出来る。併し、引上げの時に、貴様の姿を認めなかつたが、一番先に出了たのか」

「否、一番に遅く出た」

「ふーむ、何うして見えなかつたか」

「拙者は、拙者の退口が出来てあつたから、一同とは別ぢやつた」

「何ツ、別に退口を……」

「誰も、彼も、一つ所からでは混雜する故、拙者の退口は、初めから別に、つくつて置いたのぢや」

「は、ア、矢張り貴様は偉い。我々一同が抑へられても、貴様丈は、助かるやうになつて、居たのぢや」

「先づ、そんなものかな」

一同も、顔を見合せて、クス／＼笑つて居る。

「それから、何うした」



「公使館に、火の廻るのを見届けて、一たんは高輪の海岸まで引上げたが、寒さは寒し、衣物は濡れて、何となう氣持が悪い。藩邸へ歸つた所で、火もなければ世話をして呉れるものもない。そこで考へ出したのは、土藏相模を出かける時、拙者の買ふて居る遊女が、ぜひ引返してくれ、といひ居つたのぢや」

「これは、容易ならぬ事になつたぞ、オイ、皆んな能く聞け、聞多の惚けぢや」

「惚けといふ次第ではないが、まア左様いふ次第で、すぐ品川へ、引返したのぢや。今朝になつても、雨は降つて居る、遊女も引留めるから、今迄遊んで居たのぢや」

之れを聞くと、一同は呆れ反つた。あれから復た、引返した膽玉は、流石に豪いとは、思ふが、流連は、少し振ひ過ぎた。高杉は、

「併し、貴様は、何うして金を持つて居たのか。山縣と來島から、都合して來た八十兩、彼れは残らず、土藏相模の支拂になつた筈ぢやが、貴様はまだ金を持つて居たのか」

「實は、二人から都合して來た金子は九十兩であつたが、それを八十兩と、いふたのは、深い仔細がある」

「九十兩を、八十兩といふた仔細、そりや、何ういふ理由か」

「初めの考へでは、百兩つくるつもりで行つたが、どうも調子よく、スラ／＼と行かなかつた。そこで、九十兩といふ端金に、なつたのぢや。汝等は、兎角に跡先を考へず、進む事は知つて居ても、退いて守る事は考へて居らぬ。今日の事は考へても、明日の事は思はぬやうぢや。御殿山へ押出して、萬一にも仕損じた時は、一同の大事になる、相當の金の用意もなければならぬ。けれども相談すれば、グヅ／＼いふぢやらうから、八十兩の報告をして置いて十兩だけは、萬一の場合の用意金として、取除けて置いたのぢや」

「偉い、矢張り貴様は、一番よく考へて居る。其十兩は何うした」

「その十兩で、今まで遊んで來たのぢや」

「えツ、馬鹿にするな。その金で遊ぶとは怪しからん」

「事件はうまく運んで、もう十兩の必要はない。却つて有ると面倒が起るから、皆な費消つて了つたのぢや。ハ、ハ、ハ、」

今更に、怒つた所で仕方がない。果は、一同も感心した。

「また聞多に、してやられた」

と、いつて、此危急の場合にも、寸分の油斷のない、聞多の立働きの大膽にして、慧敏なものには感服したといふ事である。

木敷の御首



# 木像の晒首

一

攘夷勤王の氣運が、やうやく熟して、倒幕の叫びが、いよ／＼盛んになつた折柄、將軍の家茂は、攘夷の勅命に、答ふべく上洛した。

家茂の上洛は、浪士の心を、酷く刺戟して、倒幕派は、此機會を逸さず、將軍に、攘夷の御請を爲せ、若し、御請を爲ぬ時は、それを理由として、直に幕府を倒してしまへ、と、それ／＼に奔走を始めた。すべてが、長州藩の計畫に、着々はまつて行くから、獨り喜ぶものは、長州藩を中心として、活動して居た一派である。

桂は、將軍の上洛が決まると、すぐに京都へ、乗込んで来て、朝廷の内部に、手を入れた。元來が、長州派の多い、朝臣のうちには、之に應じて、將軍虐めの運動を始めるものがあつて、幕府は、一日と、其運命を縮められるのであつた。

浪士は、浪士で、自分等の立場から、勝手な運動を始める。先づ第一に、將軍を脅威手段が、講ぜられる事になつた。

洛西の等持院に、足利十五代の木像が、納められてあつた。多少の讀書力があつて、皇國の歴史の一端を、知つて居る浪士は、朝威の衰頹を見て、漸く幕府を倒し、王政の昔に引戻して、武家政治を、廢めさせようとの考へを、持つて居た。今度の將軍上洛は、此上もなき好機會であるから、何か一と仕事して、幕府の奴等を驚かしてやらう、との企てが、各所に起つて來た。國學者の三輪田綱一郎、徳島の浪人、中島錫胤といふ人、是等の一派が集つて、相談を始めた。

『我國體は、上に一人の天子を戴き、下萬民は其赤子として、君民同治の形を以て、二千年來の國體を、維持して來たのであるが、政權が、一たび武門に歸して、朝廷の御威光も衰へ、今は、武家の專權に由りて、天下の事は決せらるゝの有様であるが、思へば嘆かほしき次第で御座る。この度、將軍の上洛は、此上もなき機會故、吾々も何事か、爲して、天下の耳目を、惹き付け、將軍をして、其不臣の罪を、自ら悟らせるのが肝要で御座らう。それについて、拙者に、一の良案が御座るから、兎に角、御聞き取りを願ひ度い』  
と、一座のうちの先輩たる、三輪田が、何かいひ出す、と、いふのであるから、一同は、嗚を鎮めて、その説を聞き過すまい、と爲る。中島は、大きな眼玉を光らせて、列席の浪士を、見詰めて居た。

中島錫胤といへば、大概な人は、知つて居る筈だ。死んだ時には、錦鷄間祇候であつたが、曾ては山梨縣知事を勤めたこともあり、維新の際には、所謂志士のうちでも、屈指の人であつた。

此人については、却々面白い逸話があるから、簡単に述べて置く。  
阿波の徳島は、蜂須賀侯の城下であるが、有名な藩であつたにも不拘、勤王の志士といふては、中島の外に出なかつた。隠れたる志士としては、幾何かあつたかも知れぬが、先づ表面に現れて、よく活動した人としては、中島のみであつた。

殊に、此人は、藩士としての出身でなく、餘り身分は良くなかつたさうで、つまり平民の出身であつた。青年時代には、粗暴にして品行修まらず、郷黨の間でも、甚だ評判が、良くなかつた人だ。今の事に見れば、警察署の注



意を受く可き、グレン隊の青年であつた。所が、文字こそないけれど、腕力の強い、多少の膽玉もあつて、天稟の辯才は、普通の人の及ぶ所でなかつた。  
放縦意情が、恰も其性の如くなり、疎狂の振舞は、殆ど其平生であつたから、誰れ一人として、親しく交はるものはなかつた。然るに、昔からの諺にもある通り、縁は異なるものとかいふて、斯んな亂暴者にも、戀しい女が、出来ただけから面白い。

凡そ、此世に於て、最も不可思議のものは、男女の情事であらう。彼んな男に、どうして惚れたのだらうと、多くの人に怪しまれるほど、却つて本人等は、深い／＼戀に落ちて居る等の例は、決して少くない。多く美しい女は、美しい男に、添ふ可きであらうに、實際は、左様も極まつて居ない。絶世の美人が、評判の醜男と同棲して、少しも悔いざるばかりでなく、貞操正しく、事へて居る、といふやうな例も、よく在る。彼んな女の、何處が善いのか、と思はれるほどに、取柄のない女でも、他の羨むやうな、立派な旦那を、持つて居ることがある。俗に謂ふ合縁奇縁で、何うも仕方がない。

或樓の遊女が、中島に、すつかり惚れ込んで、中島の方でも、夢中になつて登詰めた結果が、遊里の金には、詰まるが常例で、どうにも始末のつかぬ迄になつた。そこで、二人は相談して、いよく情死と決まつた。

遊女は、樓を忍び出る。中島は、時刻を約して、或場所待つて居た。平生は、如何に亂暴でも、さて斯うした境遇になると、人は優しくなるものだ。遂々二人は、附近の海へ飛込んで、共に死なうとはしたが、生憎の事には、中島が、遊泳の名人で、どうしても死ぬ事が、出来なかつた。水を呑んで苦しくなると、自然に泳いで了ふから、死ぬ事は出来ない譯だ。遂に海岸へ泳ぎついて、ほつと、息を吐きながら、考へて見ると、遊女だけ死なしたのでは、世間へ、申譯が立たないから、何とかして、自分も死なねばならぬ。と、それから復飛び込んだけれど、苦しいから矢張り泳いで了つた。

其處で、中島は、復考へた。情死の仕損ひで、考へ直すなどは、頗る面白い事だ。

「どうしても、死ぬ事の出来ぬのは、全く天が、死ぬなと命ずるのである。己れも、男子に生れ乍ら、女などと死ぬ氣になつたのは、悪魔に誘はれたのであらう。どうせ死ぬ位なら、天下萬民の爲めに死ぬのが、男子らしくて潔い。女には、氣の毒であるが、今日を命日として、香花でも手向けてやれば、それで可からう」

自分に、都合のよい理窟をつけて、中島は、死ぬのを止めて了つた。一旦は、家へ歸つたが、何となく氣が咎めて眠れなかつた。窃と、遊女を抱へ居た、樓の前へ来て、外戸から覗いて見ると、意外にも、死んだと思つた。遊女は、いつの間にか、歸つて居て、何か分らないが、ゲラ／＼笑ひながら、話し込んで居る態度は、死なうとした女のやうでない。これを見て、流石の中島も、呆れ返つた。

「ア、己れは、何といふ馬鹿な奴だらう。戀の女といふた所で、實につまらぬものぢや、己れは、死に損ねて、却つて、恥を晒さずに済んだ。此上は、一心發起して、男らしい一生を遂げよう」

と、それから後の中島は、恰で生れ變つたやうになつて、文武の二道に勵み、終に京都へ出て、浪士の群に投じ、押しも押されぬ、一人立ちの武士になつたが、その發心の動機が、一般の人とは、少し變つて居た所に、頗る興味がある。

晩年に、其病が革まつて、今日か明日かの時、子供を、枕元へ呼んで、

「汝等は、己れの子に違ひないから、此家名や、財産の相續を、爲るのは可いが、たとへ己れの子でも、國家に何の功勞もなくして、爵位の相續を、爲る事はならぬ、己れの死と同時に、襲爵は辭退しろ」と、いつて死んだ。其子供は、父の遺言を守つて、爵位を辭して了つた。此親子は、實に偉い所があつた。



却説、三輪田の述べた所は、尊王の大義であつた。充分に、根柢を盡した議論ではないが、先づ其前提と、いふても可い。

『過ぎし建武の役、楠氏の忠誠は亡びて、尊氏の謀逆は成立ち、正統の天子は退いて、世は、足利の物となつた。此一事は、今より思ふも、悲憤の極みて御座る』

三輪田の顔色は、物凄まじりに、變つて来て、其言には、悲痛の調を、帯びて居る。一座は寂として、咳一つ爲るものがなく、いづれも拳を握つて、慷慨に堪へぬ、といふ容子は、誰れにも分る位であつた。

『足利の天下は、續く事、十五代に及びましたぞ。其間に、一人の義を唱へて、彼れを倒すものなく、朝威の不振は、日を逐ふて甚だしく、會ま時勢の循環を得て、足利は亡びたれど、天下の政權は、猶ほ武門に歸して、一天萬乘の君主は、誰だ虚器を擁するに過ぎず、一たび史を讀んで、此に到る毎に、苟くも泣かざるものが御座るか。然るに、徳川の天下は、漸く勢ひ極まつて、外夷の渡來と、諸侯の離反は、日に酷しくなつて參つた。這回は、將軍の上洛と、相成りしこそ幸ひ、我等は、此機會を逸さず、何事か爲し遂げて、天下の人心を動かし、以て皇恩の萬分

一に、酬い度く存するが、足下等の御考へは、如何で御座る』

此處に集つて居るものは、皆其の志を、同うするものばかりであるから、三輪田の説を、聞く迄もなく、その想ひは同じであつた。さて何をしやうか、といふ一段になれば、別に是れといふて、名案を有つて居るのでもないから、互に譲合つて、誰れ一人として、發言するものはなかつた。

最前から黙まつて居た、中島は、此時に初めて、口を開いた。

『足利の逆心は、天人ともに容れざる所、今さらに、彼是れ論ずる必要も御座るまい。此上は、尊氏以下、三代の木像を、晒物に致して、幕府の奴輩の膽を、寒からしめてやらうては、御座らぬか』

事もなく、中島の言出した、此相談には、誰れも黙するものはなかつた。

三輪田は、思はず手を拍つて、  
『名案で御座る。晒物とは面白い思ひ付きぢや。それが可からう』

と、獨り興に入つて喜ぶ。他の一人は、  
『些と御尋ね致し度い』

『何事か』  
『晒物とは、何うなさる御心算か』  
『左様うさ。その事は、中島に、猶ほ考へも御座らう』

三輪田は、中島に向つて、  
『どうぢや。晒物に爲るのはよいとして、どういふ風に致すつもりか』

中島は、待つて居た、といふ容子で、  
『等持院へ押寄せ、三代の木像の首を刎ねて、之れを五條の磔へ晒らし、逆臣の罪を糺す、といふ建札を、いたすのぢや』

木像の首の、晒物は珍らしい。今迄に聞いた事のない。新案であつた。生きた武士の首さへ、平氣で、斬りにゆき、連中、木像の首ぐらゐは、何でも無い。幾分の好奇心にも驅られて、それは可からう。といふものが、多くなつて來た。三輪田は透かさず、

『御一統に於て、御異存は御座らぬか』  
と、念を押した。一同は、聲を揃へて、  
『至極の儀、敢て異存は御座らぬ』

で、相談は一決した。只何時にするか、といふ事と、其方法については、一切を、三輪田と、中島に任す事にして、



それから酒宴に移った。

足利の處爲が、どれほど憎いから、といふて、其木像の首を晒す、といふは、ちと大人氣ない事のやうではあるが、すべて斯うした事は、その時代に割當て、思ふ可き事だ。後の世の人が、それを考へずに批評すると、見當違ひの譽を受ける。何しろ木像の首とは、如何にも面白い考へてあつた。

一一一

足利氏歴代の木像が在るので、等持院は、京都名所の一つになつて居た。正格なる順逆論からいへば、尊氏は、不臣の逆賊であるが、要するに、皇統が南北に、別れての争ひであつて、尊氏は、北朝の御味方を致した、と、いふに過ぎなかつた。一般に謂ふ所の叛謀人とは、頗る事情を、異にして居た。帝を廢して、自分が代らう、としたのではない。けれども、大義名分の上から觀て、尊氏は、全く不臣の逆賊としてあるのだが、之れに就ては、餘り議論がましい事を言はず、唯だ今迄通りに、尊氏は、怪しからぬ奴である、と、さへして置けば、それで可いのだ。桂内閣の時に、大阪の藤澤南岳の伴が、代議士として、議會の演壇に、此事を論じようとして、大騒ぎになつた事がある。それから一時は、南北正潤の争ひで、學者の間にも、議論の花の咲いた事は、今猶ほ世人の耳目に、新なる所ではあるが、斯ういふことは、公然の問題として、可成り立入つた詮議などは、爲ぬ方が可い。尊氏は不臣で、正成は誠忠と、これでは萬事を、決めて置けば、それで可い。

三輪田、中島等が、足利三代の、木像の首を斬つて、之れを晒物にしよう、と、企てた事を、今の時代から見れば實に馬鹿々々しい、ともいへやうが、その頃の、攘夷勤王派の浪士としては、此上もなき名案と、せられたのであつた。將軍家茂を、脅威する手段としては、これに過ぎた工夫は、なかつたであらう。其同志と稱する人々は、諸岡節齋、建部建一郎、宮利田勇太郎、高谷十輔、仙石左太衛、長倉徹三郎、青柳建九、長澤眞平、大庭恭平

等の連中、いづれも慷慨悲歌の士のみであつた。文久三年の二月二十二日、寒い風が吹いて、何となく氣分の減入る、忌な日であつた。三條通りや、四條通りには相應に人出があつても、その外の町は、まことに寂しかつたが、日が暮れてからは、一層の寂しさであつた。平生は賑やかな町でも、此頃のやうに、辻斬や暗殺が打ちつゞいて、血腥さい風の吹く時は、どうしても、夜歩きをする人が、少くなるのが當然であつた。殊に、晝でも餘り賑やかでない、等持院の附近は、夜に入ると、人影一つ、見る事が出来なかつた。

夜も更けて、はや丑滿の頃、等持院の本堂へ、覆面した浪士風のもの六七人、どこからはいつて來たか、初めのうちは手搜りであつたが、やがて蠟燭に、火を點じて、四邊を、キヨロ／＼見廻して居る。

『三輪田か』

『うむ』

『皆な揃ふたかな』

『人數は揃ふた。堂外にも、見張りをして居る』

『それで可し。然らば徐々はじめようか』

『よからう』

三輪田と、聲をひそめて、話し合つたのは、中島であつた。

薄明るい蠟燭の光で、闇黒な本堂を見廻はるのだから、まことに面倒だ。

『これぢや』

と、いひ乍ら中島は、尊氏の木像に、手をかけた。

大庭が懷裡から、細い鋸を出して、尊氏の首を、ゴシ／＼斬りはじめた。次ぎは義詮、その次は義満、とうとう



三つの首を斬り放した。

豫て準備して来た、風呂敷に包んで、一人て一つ宛の首を、腰に下げて、堂外へ出ると、見張りの連中が、

『首尾は、如何で御座った』

『上首尾ぢや』

『うまく参りしかな』

『これ、此通りぢや』

腰に、ぶら下げた首を、風呂敷の上から、コツ／＼叩いた。

『御手柄で御座った』

『イヤ、どうも……』

一同は、夜の闇きに乗じて、いづくともなく、姿をかくして了った。

## 四

翌日の四條碓には、山のやうに人が集つて、大騒ぎをやつて居た。

『どうです、大層なものですな、今迄にあつた、生首とは違つて、これは木像の首ですな、全體、どういふ理由で、

こんなものが晒されたのでせう』

『左様さ、どんな理由か、私などには解りませんが、矢張り浪士さん達が、なさる事なんてせう』

『オヤ／＼、あの立札に、何か書いてありますな』

『成程、何か書いてありますな。あれを見たら、此理由が解りませう』

『行つて見ませうか』

『参りませう』

斯んな押問答から、そろ／＼揃つて、立札の前へ、来て見たが、よく解らない。

『立札を見ても、解りませんな』

『斯う至難しく書いてあつたのでは、誰れにも解りませぬ』

『そりやア、解るものぢやない。どうせ人に讀ませる位なら、もつと解るやうに、書いて置いたら、何うでせう』

『私も、左様思ひますよ。讀めないやうに書いておいても、しやうがないぢやありませんか』

『御尤も／＼』

幾人集つて来ても、同じやうな事を繰返して、只だガヤ／＼騒ぐばかりであつた。時刻の経つに従つて、追々に人の數は、増して来る。その多くの人のうちには、武士も、混つて居るのだ。

『どうです、あの御武家様に、聞いて見ませうか』

『それが宜しい。私達が、いくら騒いで居ても、つまりは解らないのだから、はやく聞いて御覽なさい』

『さうしませう』

やがて一人が、武士の前に来て、

『エー、旦那様に、一寸御願ひが御座ります』

と、いはれて、武士は、振返つた。

『何ぢや』

『あの立札には、何と書いてあるのですか、お恥かしい事では御座いますが、少しも解りませんので、一寸その訓解を願ひ度いのですが、いかゞなもんで御座りませうか』

『は、ア。汝等には、彼れる立札の文字が讀めぬ、と申すのか』



「へい、左様で御座いまして……」  
「可し、然らば讀んで遣はさう」

「何分御願ひ申します」

と、これを聞いて居た連中は、我勝ちに人を押退けて、武士の四圍を、取巻いた。

「第一に、此首のことから、説き明かして遣はさう。これは、足利尊氏の首ぢや」

「へーエ、何だか見たやうだと、思つて居たが、それでは、尊氏様の首ですか」

武士は、稍氣色はんで、其奴の顔を、ちツと見詰めた。

「何ぢやと、其方は今、尊氏様と申したな」

「へい」

「へいとは何ぢや。怪しからん」

「へい」

「尊氏の如き、逆臣に對して、様などは怪しからん。尊氏は、逆賊であるぞ」

「へい」

「その逆賊に對して、様とは何ぢや」

「へい、まことに相濟まん事を申しました」

「以後を、注意しろ」

「へい」

「その次ぎは義詮の首、その次ぎが義満ぢや」

「成程、へい」

「其處で、捨札の文言は、

正名分之今に當り、鎌倉の逆賊、一々吟味を遂げ、可誅戮之處、此三賊、巨魁たるに依つて、先づ其醜像に、

加天誅者也

と、いふのぢや。何と愉快ではないか」

「へー、愉快で御座りますかな、成程」

「全體、其方は解つたか」

「少々解りかねまして……」

「まだ解らぬか」

「へい」

「其方には、之れが解らぬか」

「へい」

「つまり、足利尊氏は、朝廷に對して、大逆の罪を犯して居るのぢや。その子孫十五代、みな同じ奴等ぢやから、先

づ三代の木像を曝らして、今の世の戒めとする、といふのが、本文の趣意ぢや」

「へー、さうですか」

「解つたか」

「へい」

「まだ解らんやうぢやな」

「へい」

「其方等を對手にして居ては、日がくれる。拙者は、もう出かける事にしよう」



「ヘイ」  
群集を、跡に残して、その武士は、四條磔を立去つた。その武士は、長州藩の伊藤俊輔であつたが、最前から其舉動に、眼をつけて居た、一人の密偵が、俊輔の跡から、尾つてゆく。それを、俊輔の方では、少しも知らなかつた。

五

四條磔の晒首は、非常な評判になつて、人が集まる所に、此噂を、せぬものはない位で、それには種々な、揣摩臆測も加はつて、評判は、愈々高くなるばかりであつた。

禁裡守護職を、勤めて居る、會津中將は、市中の取締りにも、任じて居るので、江戸から新に連れて來た、新選組の人々を幾つにも分けて、市中の見廻りは、些しの怠りもなく、行つて居たのだ。されば、四條磔の事は、すぐに部下のものから聞いて、能く其事情を糺して見たが、何分にも手のつけやうがない。殊に、足利三代の木像の首を晒したのでは、拙に手をつけると、却つて災を需める事になるかも知れぬ。兎に角、しばらくの間は、世間の様子を見て、徐ろに手を下すのが可からう、と、いふことになつた。

所が、此一條から、攘夷倒幕派の勢ひは、ますます強くなつて、浪士の鼻息は、非常なものだ。晒したものは、足利三代の木像の首だが、其精神は、徳川に當付たのであるから、つまりは徳川將軍の首を晒したのと、同じ事になるのである。それを、幕府で、知らぬ筈はないのに、どこ迄も、知らぬ風をして居るのは、既に幕府の權威が、地に墜ちた證據である、といふて、浪士が、幕府を侮る事が甚だしくなつて來た。斯うなつて來ると、幕府でも、打捨て置く事は出來ぬ。取り敢ず、犯人を取押へて、嚴罰に處する外はない、とあつて、新選組を始め、奉行手附の密偵が、さかんに活動を開始した。

すぐ對面を許した。此二人は、會津藩の名臣で、いづれも評判の人物であつた。殊に、秋月は、智慧の秋月といはれたほど、非常に才幹がすぐれて居た人である。會津侯は、近く病氣に罹つて、多く引籠り勝ちであつた。

「どうぢや。少しは手懸りがあつたか」

「ハッ、何分にも雲を逐ふに均し探物とて、今に何等の手掛りも得ませぬ」

「それは、遺憾千萬ぢや。一日も早く取押へぬと、幕府の威信にも關する事ぢやから、一段と骨折を頼み入る」

「御辭にて恐れ入ります。草を分け、を穿ちましても、必ず犯人は、見付け出す覺悟に御座ります」

「長州邸の様子は、どうぢや」

「近頃は、浪士の集合所の如く、相成り居りまして、殊に、水府の浪士が、多く出入りいたし居ります」

「左様か」

「桂小五郎の配下に、伊藤俊輔と申しますものが御座りまして、彼是れ周旋致すやう、聞き及びます」

「ふむ。伊藤と申するものは、今迄に聞き覚えがないが、どういふ身分のものか」

「輕輩のやうに、聞き及びました」

「何ッ、輕輩の出身とか」

「父は足輕ぢやさうに、御座ります」

「流石は、毛利ぢや。足輕の子伴にも、左様のものが居るか」

「確と定まりました食祿もなく、従つて藩士として、正しき格式も御座りませぬが、有志の一人としては、相應に信用もあるやう、噂いたします」

「而て、水府の浪士を集めて、何事か、企て居るのではなからうか」

「さ、その邊は、確と相解りかねますが、何事かの企ては、あるものと見て、差支へありませんまい」



「それは、油断のならぬ事ぢや。充分の注意頼み入る」  
 「ハツ、委細心得居りまする」  
 「水府の浪士については、一應の注意を、致すが可からう。藩の留守居役まで、嚴重に掛合ひ置くがよい」  
 相談は、永く續いて、夜に入つてから、二人は退いた。  
 身は、毛利の輕輩で、父は足輕の養子でも、兎に角、斯うした相談の場合に、その氏名を、いはれるやうになれば、俊輔も、一人前の取扱ひを、受けて居るのであるが、しかし、其筋の注意が深くなれば、それ丈け、俊輔の身は、危くなる譯である。本人の俊輔は、それを知るや知らずや。相變らず奔走はつゞけて、時には他を驚かすやうな、詭激な説も、唱へて居た。

六

今日は、水府の浪士が、長州邸に、集合する事になつて居て、萬事は、伊藤が周旋をして、集まる人も、存外に多くなつた。  
 三條通りの豊後屋ばかりでなく、水府浪士が、泊つて居る宿屋は、その他にも在つて、それ／＼に、幕府の密偵は尾け廻して居たのである。従つて、今日の集合も、何の爲といふ事は分らぬにしても、只長州邸へ、多數の水府浪士が、密會をする位の事は、よく判つて居るのであつた。  
 威勢のよい人が、多く集まると、その話は何うしても、威勢のよい事はかりで、斬つたとか、斬られたとかいふ事の話が多い。  
 「四條の晒首、只見たばかりで、脚のすくやうに思つたが、近年にない、痛快の事だ御座つた」  
 先づ芹澤又右衛門が、斯う言出すと、すぐ其跡をついて、吉成風太郎が、

「如何にも、御説の通り、櫻田以來の事で御座らう」と、答へた。それから話に、花が咲いて、さかんに過激な、説が出る。大概は、暗殺を痛快の事として、之れを猶ほつゞけよう、といふのであつた。  
 「時に、各人は、未だ御存知ないか。池内大學の斬られた事を……」  
 之れは、林忠左衛門の言であつた。  
 「は、ア、池内が斬られましたか」  
 「如何にも、美事に斬られたさうぢや」  
 「それは、愉快ぢや。彼奴のやうな曲學者は、ドン／＼斬つて了ふが、可い」  
 「左様とも／＼、ちと我等も、手のうちを見せようか」  
 「可からう」  
 話は、又一としきり、殺伐な事で賑はつた。  
 やがて、桂が出て來ると、その跡から、伊藤も、續いて來た。一同は、席を譲つて、丁寧會釋した。  
 「毎度の御集合、何時も、天下の御爲に、御盡力下され、千萬忝なく存じまする」  
 何か、自分の身の爲めにてもなるかの如く、桂は、厚く禮をいふた。その丁寧な、挨拶を受けて、一同は、極めて満足の様子であつた。林は、代表者といふ格で、  
 「その御挨拶では、却つて痛み入ります。盡力は、御互の事、いづれも、天下萬民の爲めに、盡すので御座れば、誰彼と區別する譯もなく、斯うして毎日のやうに集まるも、所詮は、何か名案もがな、と思ふて、いろ／＼に評議は盡しますが、さて、是れといふ名案も出でず、只だ徒らに日を送るのみで御座る」  
 「イヤ、その御辭では御座れど、何事にもあれ、かく御一同が、日々の集合を催して、御評議下さる事は、やがて何



れかに、形となつて現はれるに、違ひ御座らぬ』  
何處までも、他を反らさぬ柱は、巧に三寸の舌を以て、一同を縋なしてかゝる。そこに人の長となる調子が、現はれて居た。

それから跡は、密談になつて、咳一つするものもない。黙燈の頃になつて、別れくくに歸つた。  
伊藤は、柱に代つて、一同の立去るまで、付き切りて、世話をして居た。朝から寢窟な相談會に、頭腦も、何とな

く朦朧としたから、今夜は島原邊で、面白く遊ばうと、只だ一人で藩邸を出かけた。  
その背後から、見え隠れに、怪しい奴が尾いて來る事は、流石の伊藤も、更に氣が付かなかつた。  
所が、此に可怪しな事は、その尾いて行く奴の跡から、また一人の、怪しい奴が、尾いて來る。伊藤を尾ける奴の

跡から、尾いて來るのだ。それを、伊藤が、少しも知らないのだから、面白い。  
伊藤を尾ける奴は、幕府の廻し者に違ひない。それにしても、その廻し者の跡を、尾けるものは、果して何者であるか。その解らぬうちが、話の花である。

七

伊藤の跡を、尾けて行く奴は、新選組の下廻を、働いて居るものであつた。かねて、隊長から、伊藤の見張りを、申しつけられて居たので、今宵も、其通りに、やつて居たのだが、伊藤の出て行く姿を見たので、すぐに跡を尾ける事にしたのである。新選組の人々は、多く武術にすぐれて、殺伐の氣を、有つて居るから、大概の場合には、血を流す事になる。殊に倒幕派に對する感情は、非常に悪いのであるから、伊藤に、少しの隙でもあれば、すぐに斬りかゝるのを知れた事だ。その位の事は、伊藤も、能く知つて居るが、今尾けられて居る事は、更に知らなかつた。  
もう、島原に近く、少しの間、人家のない所まで來ると、伊藤の背後から、一刀に斬りつけようとした。その判

那に、スーッと、其奴の背後から廻つて、抜く手も見せず、

「エイツ」と、氣合をかけて、斬りつけたものがあつた。美事に肩先から、乳の下かけて、ざっくり斬り下げたので、

「ラーむ」と、呻いて倒れた。  
此物音に、伊藤が、背後を振り返ると、一人の武士が、倒れて居るのみならず、他に一人の武士が、長い刀を、ふり

上げて居るから、伊藤は、腰の一刀に、手をかけて、身構へた。  
「伊藤氏、危なかつたのう」  
以外千萬、伊藤は、夢の心地である。

「どなたで御座る」  
彼の武士は、覆面を脱つて、軽く會釋した。よく見れば、その人は、林忠左衛門であつた。

「やツ、林氏か」  
「此奴が、足下を尾けて來たのぢや」  
倒れて居る屍骸、併し、未だ動いては居るが、はや蟲の息である。その屍骸に指して、ニヤリと笑つて、

「は、ア、此者が、拙者を尾けて參つたとか」  
「左様で御座る」  
「ふむむ」

「足下が、藩邸を出る時から、尾けて居つたのぢや。拙者が、それを知つて、此奴の跡を尾けて來ると、足下に斬りつけよう、といたしたから、もはや猶豫は相成らずと、直ちに一刀の下に、斬り倒したので御座つた」



『それは、千萬忝ない。御蔭をもつて、危き生命を拾ひ申した』  
二人の話のうちに、斬られた奴は、出血の多かつた爲めか、はや息絶れて了つた。林は、その傍へ立寄つて、昵と見詰めて居たが、

『ハツハ、、、、もう死に居つた』

人を斬つて、その死骸を見て、大笑するとは、如何にも惨忍のやうであるが、それは、其時代の武士氣質で、深く咎む可き事ではない。伊藤も進んで、

『成然、すツかり呼吸は、絶えたやうぢや。何れの何者か知らぬが、斯うなつて見ると、些か憐の情も、起り申す』  
懐中を改めて見たら、何かあるやも知れぬ。物取りの所業には似て居るが、一應は改めて見ませうか』

『それが、可からう』

林は、手早く屍骸の、懐中を搜つて、一通の手紙を取出した。

『見込んだ眼に違はず、手紙が一通あり申した』

『ふゝゝ、どれ、拜見いたさう』

伊藤が、その手紙を、披いて見ると、

『前略、豫て目星を附け置きたる、長州藩士の内、伊藤と申すものは、桂の配下にて、輕輩ながらも、一分あるものゝやう、聞及び候、殊に、昨今は、水府浪士を、邸内に引入れ、何か密談に、日を送る趣き、右は打捨て置き難く、早速に何とか、處置を取り度存候、足下は、今日より萬事を抛ち、其方に御取かゝり被下度、都合にて打果し候も宜敷候、尙水府浪士については、同藩の或者より、内通有之様相成居候間、此一事は、幸ひに御休神被下度候云々』  
斯う書いてあつた。伊藤は苦笑ひをして、

『こりや、林氏の御見込み通りで御座つた。拙者は、既に無い生命ぢやつたが、尊公の御蔭を以て、辛うじて難を免れ申した』

八

林も、伊藤から、其手紙を受取つて、一通り讀んだ。

『此書面に、依つて見れば、我藩のうちに、新選組へ、通牒して居るものがあるやうぢやが、どうも近頃になつて、我々の秘密の漏れる所から考へても、獅子心中の蟲があるに極まつた。こりや、油斷のならぬ事て御座る』

『發信者も、宛名も、變名で能く判らぬが、慥かに新選組の間に、相違御座らぬ』

『兎に角、彼所へ參つてから、萬事の御相談を申上げること致さう』

『それが、宜しう御座らう』

是から二人は、島原へ、連れ立つて行く。

角屋は、廓内で、第一の樓、古い丈けに、評判は高いが、何處も彼處も媒けて、何となく寂しい。恰で古寺へ行つたやうな、感じが爲る。江戸の吉原と、長崎の圓山、それに、島原を加へて、之れを日本の三廓と謂ふ。このうちでも、島原の太夫は、一番に評判がある。初めて行つた客の前に出るのを、江戸では引付け、といふが、島原では、カシと稱して居る。此式は、今でも残つて居て、此廓での呼物になつて居る。何事も保守的な、因循の所はあるが、氣の落付いて、ゆつくり遊べるのは、此廓の特長になつて居る。

伊藤は、數次遊びに来て、仲居を始め、いづれも馴染になつて居て、快く遊ばせてくれるので、伊藤は、何時も單身で、遊びに行くのであつた。

林と、伊藤は、その晩、何んな相談をしたか、誰れ一人として、之れを知るものはなかつたが、それから三四日す



ると、水戸家の留守居を勤めて居るうちの一人が、無惨な最期を、遂げて居たので、これが又た、一と騒ぎになつて新選組の警戒は一層厳しくなつた。

島原へ行く道に、新選組のものが、斬られて居て、更に水戸の家臣で、佐幕派のものが斬られたのだから、問題の起るのは當然であつた。而かも、其被害者は、伊藤を附狙ふものと、長州邸へ出入する、水府浪士を、見張つて居るものであつたから、どう考へても、下手人は、長州派のものであらう、との鑑定はつく。

桂が、伊藤を呼んで、

『事が、面倒になりさうであるから、水戸の連中は、一時、京都を立退かせたら、何うか』

といふ、相談をかけると、伊藤も、之れには不同意が、いへなかつた。自分が、少し焦り過ぎた傾きもあつて、佐幕派の注意的になつたのであるから、此際、うまく切抜けないと、跡の仕事、殊に桂の考へて居る仕事に、萬一の差支へを起してはならぬ、と、利口な伊藤は、疾くも覺悟がついて、

『宜しい、早速立退きの計ひを致しませう』

『どうか、左様してくれ、旅費や其他の金の都合はつけるから、それに懸念のないやうにしてくれ』

斯うした事情から、水戸の浪士は、一時の所、京都を立退くことになつて、幾分か、佐幕派の感情も緩和されたのである。

何しろ、伊藤は、輕輩であつたが、その活動は、ナカ／＼目覺しかつたので、此事は、何時か、長門守の知る所となつて、俄に土雇といふ事になつた。其辭令は、

右、先年、吉田寅次郎に従學せしめ、兼而尊王攘夷の正義を辨知し、心得宜敷に付、身柄一代、名字差免、土御

山下新兵衛組下 春輔

雇被爲準 候。委細前廣被仰出 候。御仕法之通に 候事。

と、いふのであつた。

俊輔は通稱であつたが、藩廳の方へは、春輔となつて居たので、辭令には、春輔となつて居るのだ。

畢竟、輕卒から一躍して、士分に引上げられたのである。當時の事に見れば、非常の名譽たるに、相違ない。

然るに、茲に意外の事が起つた。それは英吉利へ密行の企であるが、伊藤の眞に活動したのは、それからの事であつた。



### 英國密航の發端

長州藩の攘夷論は、甚だ異しいものであつた。攘夷を唱へて居り乍ら、開國的の仕事を、ズン／＼運んで行つたのだから、其攘夷論は、全く徳川幕府を、押倒す爲めの手段として、殊更に利用されたものに、違ひない。最初に、夷人がやつて来て、開國を迫つた時は、よく世界の事情が判らなかつたので、或は正直に、攘夷論を唱へたかも知れぬが歳月の推移ると共に、漸く世界の大事も解つて来て、心の裡では、開國の止むを得ざる事を認めながら、幕府に對抗する策としては、矢張り、朝廷の旨に従ふて、飽く迄も、攘夷を唱へ、幕府を、責めて行つたのであらう。

されば、松陰の言ふて居た、攘夷の精神を以て、開國の主義を行ふといふが、丁度、それに當嵌まるのである。その時代の事としては、朝廷の權威を、笠に着て、幕府へ迫る位、都合のよい方法は、なかつたのであるから、剛巧な毛利が、どこ迄も、攘夷論らしく見せかけて、幕府を、苦めて居たのは、敢て不思議な事でも、なかつたらう。併し、心にもない攘夷論を唱へて、世界の大事に逆行するやうな、迂闊な事はして居られないので、秘密のうちに、開國的の仕事は、遠慮なく運んで行つたのである。

殊に、此方から、外國へ押かけて、彼方の事を研究して、大いに參考にしよう、といふ事は、密に藩主の毛利ばかりでなく、藩臣のうちでも多少の見識あるものは、皆左様考へて居たのだ。従つて、外國へ渡航する、といふ事は、幾

度か有志の間に企てられては、其都度、失敗して居たのであつた。

山縣半藏と、久坂玄瑞が、江戸から京都へ、歸る時、道中仙道に取り、木曾の景勝を、觀ながら行かう、といふ事になつて、いよく江戸を離れてから、少し道は廻りになるが、信州松代へ立寄つて、佐久間象山を、訪ねて見よう、と、相談を極めて、態々、松代の城下へ、はいつて来た。

山縣は、有朋と同姓であるが、何の縁故もなく、立派な士格の人であつた。藩公の御前へ出て、書物の講義などもして居たほどで、その頃から、伊藤や井上に比べると、先輩の方であつた。

久坂は、松陰門下の俊才で、高杉と相並んで、同人の間に、重きを爲した人である。非常な才物で、文武の二道にも長じて居た。

松代の城下は、善光寺を距る二里半、千曲川を、前に控へ、俗に謂ふ、川中島の主要の地に、なつて居る。慶長四年に、森右近大夫忠政が、十二萬石で、此地に封ぜられ、初めて松代城と、稱へたのである。慶長八年になつて、忠政は、作州津山へ轉封され、其後ち、幾たびか、代つて、元和八年に、眞田信幸が、上田から移つて来て、十三萬石の城下であつたが、そのうちの三萬石を割いて、一族の伊賀守信澄に與へたので、本領は、十萬石になつた。

象山は、此城下に、醫者をして居たが、その傍、世界の兵書に、眼を曝して、治亂興亡の跡を討ね、一家の見識を以て、時事の問題に、その卓論を吐き、屢々人を驚かして居た。藩主の眞田幸貫に知られてから、重く用ゐられて江戸へ出るやうになつた。其時に、吉田松陰が、訪ねて来て、師弟の誼を結んだ。松陰が、外國へ密航しよう、として、罪を得た時、象山も、亦連座して、藩へ預けられる事になり、それから城下へ送られて、空しく歳月を、過して居たのであつた。



象山の見識については、幾たびか幕吏を驚かしたが、殊に、神奈川開港の事について、象山が建言したのは、全く時流を抜いた高論ではあつたが、その時は、幕府の採用する所と、ならなかつた。けれども、數年の後には、矢張り象山の言ふ通りに、なつた。それだけ、象山は、他の人よりも、進んだ頭腦を、有つて居たのだ。その事情を、一と通り述べて置かう。

幕府が、開港貿易の條約を、結ぶに當つて、神奈川を開港場にしよう、とした。それに對して、象山の意見は、『神奈川を、開港場にする事は、甚だ宜しくない、といふ所以は、東海道五十三次の宿驛であつて、大名の參觀交代には、必ず往來する所であるから、そんな土地を開港場として、居留地を設け、外人を、住まはせる事にすれば、攘夷論の旺んな時代とて、必ず不測の災害を惹出すには、極まつて居る。過激な浪士が、江戸と京都の間を、往來する毎に、夷人を斬つたり、焼打を行つたりする。その度に、幕府は、掛合を受けねばならぬ。そんな事の續くうちには、どうせ大きな騒動にもならぬ。それは、日本帝國の爲に、甚だ不利であるから、避けられる丈けは、避け方が可い。此點から考へて、神奈川は、開港場として、頗る不適當の土地である。それよりは、灣を隔てた向ふに、横濱村といふのがあつて、潮流の工合から見ても、船附も、甚だ宜しく、神奈川の如きものではない。殊に、開港場を、設ける以上、世界萬國の人が、それ／＼に押寄せて來るものとせねばならぬ。従つて、將來に發展の餘地を存する、土地を見立てる、必要もある。神奈川は、横に長く延びて、奥に浅い所であるから、發展の餘地に乏しが、之れに反して、横濱村は、奥に深く拓ける餘地が、澤山にある。そのみならず、東海道筋からは、大きな灣を隔て、居るから、浪士の横行を拒ぐにも、好都合である。陸から這入るには、程ヶ谷の方から、山越えをしなればならず、此方面には、番所を設けて見張れば、浪士の出入は、充分に警戒が出来る。従つて、他日の煩累は無からう、斯る土地のあるにも不拘、神奈川を開港場にするとは、何事であるか』と、いふのであつた。

今日から見れば、平凡の議論でも、その時代として見れば、隨に卓見であつたが、幕府の役人は、之れを肯かずに神奈川を開港場として、條約の調印を終つた。

けれども、いよく開港の準備に着手すると、象山の意見の通りで、その他にも、種々の故障が起つて、擦つた揉んだの末が、矢張り象山の意見の如く、横濱村が、開港場となつた。

此一事實だけでも、象山は、隨に優れた人である、といへるだらう。松陰の罪に連座して、松代城下に、謹慎してからは、餘り多くの人にも接せず、無聊に、其日を送つて居たのだ。

「頼む、頼まう」

支關に訪づれたものがある。門人が、出て見ると、旅装した武士が二人であつた。

「ハツ、何御用で御座りますか」

「佐久間先生に拜謁いたしたく、態々御訪ね申したもので御座る」

「而て、尊名は……」

「山縣半藏、久阪玄瑞の兩名で御座る。先生へ宜しく御執次下され」

「しばらく、御控へ下され」

執次の門人は、すぐ象山の前へ來て、

「山縣半藏、久阪玄瑞の兩名で御座ります」

之を聞くと、象山は、膝を乗出して、

「何と、山縣と久阪が參つたか」

「ハツ」

「うむ、左様か。それは、珍客ぢや。すぐ是れへ通しなさい」



蟄居謹慎中の身には、如何なる人の來訪も、嬉しいものだ。況して、山縣と久阪は、豫て知る間の人、松陰を通じて、久阪には、度々逢つても居る。思はざる珍客の來訪には、流石に、傲岸の象山も、胸の躍るほど嬉しかった。

三二

文久三年の春、彌生月には、未だ間があるけれど、郊外の探梅は、既う季節が、少し過ぎた、といふ頃のことであつた。暖かい都は格別として、寒い信濃國は、四方の山が、眞白であつた。松代の城下に、諸國の浪士が、入込んで來るのは、多く象山に、逢はんが爲めて、象山の邸では、いつも諸國の浪士や有志で、其應接に、忙しい位であつた。

書齋の次の一室に、山縣と久阪は通されて、待つ間ほどなく、悠然として、大きい體を、運んで來たのは、主人の象山であつた。

『おう、久振ぢやつた』

と、先づ象山から、挨拶の一言、久阪は、丁寧と頭を下げて、

『相變らず、御壯健の態を拜しまして、此上の事は御座りませぬ。これに同道いたしましたるは、藩の有力者にて、

山縣半藏と申しまする』

山縣は、其跡について、

『自分は、久阪の同僚、山縣半藏と申すもので御座りまする』

『イヤ、申後れた、拙者は、修理で御座る』

先づ挨拶も済んで、それから雜談に移つて、話頭は端なくも、安政獄の當時に及んだ。象山は、感慨無量と、いつたやうな風で、

『返すくも、松陰は惜しいことを致した。今日迄の交友も、頗る多く、天下に、名ある人にも逢ふたが、松陰ほどの人物は、極めて少ない。今まで生きて居たら、毛利侯の御爲めにも、なつたらうに、まことに惜しいことであつた』

象山は、頻りに松陰の、爲人を稱揚して、其早世を惜むのであつた。亡き恩師の事を話されるのであるから、久阪は、幾たびか鼻をつまらせて、恩師の在りし昔を偲ぶ。山縣は、松陰と、師弟の關係はなかつたが、よく松陰を知つて居る丈に、象山と共に、松陰の心事について、熱心に語り合ふのであつた。

『先生に、折入つて承はり度き儀の御座ります』

久阪は、膝を正して、斯う言ひ出した。象山は、輕く受けて、

『何事ぢや』

と、問ひ返した。

『實は、我が藩に於て、攘夷の密勅を、受け居りまするが、是れは、厭でも遵奉する外は御座りませぬ。が、併し、一たび攘夷を行へば、夷人の方に於ても、決して其儘には濟しませんまい。結局は、開戦の場合にも立至りませうか、いざ戦ひとなりました。譬、果して勝敗の數は、如何で御座りませうか。先生の御見込みを、承はり度く存じまする』

山縣と、久阪が、態々松代へ來て、象山に逢ふたのは、之を聞かうが爲めてあつた。象山は、しばらく考へて居たが、

『貴藩に於ては、攘夷を實行なざる覺悟か』

『今日の場合には、どうも止むを得ませぬ』

『攘夷を實行するには、開戦の覺悟が、なうてはならぬ。その覺悟が御座るか』



『その運びは致す、覺悟で御座ります』  
『其處で、勝つか敗けるかを、聞くのぢやな』  
『左様う』

『そりや、敗けるに極まつて居る』

『それを勝つには、如何いたして宜しう御座りませうか』

『それは、追つて話すと致して、先づ尋ね度きは、夷人の國の状態を、知つて居られるか』

『イエ、それは存じませぬ』

『ハツハ、、、』

象山が、無遠慮に高笑したので、久阪は、不快に感じた。

『先生、何事の可笑しう御座る』

『夷國の状態を知らずして、戦ひに勝ち度いとは、あまりの事と思ふて、ツイ笑つたのぢや。凡そ敵と争ふものは、先づ敵の實力を、知るを要す。夷國の状態を、知らずして、夷國と戦はんとするは、石を抱いて淵に投ずるよりも猶ほ危険至極ぢや。兎に角、夷國の状態を、知る事を第一に致したら、どうぢや』  
理の當然に、久阪も、グーと、行詰まつて了つた。

これから、山縣が代つて、いろ／＼夷國の事を聞くと、象山は、親切に説明してくれた。それに依つて、考へて見ても、夷國の状態を知る事が、最も必要である、と、いふ事が思はれた。

四

象山の致へたのは、極めて平凡な事である。之れだけの事なら、態々私代まで、聞きに行くにも及ばないのだが、

問題の結果ばかり、考へて居て、その経路を、考へずに居たので、象山に言はれた事が、極めて平凡なるにも不拘、二人は、酷く感心したのであつた。

尤も、象山は平生から、此事を、思ひ込んで居たのである。松陰へ、密航を勧めた前に、自分は、幕府へ對して、洋行したいといふ希望を、申出た位で、それが爲めに、却つて、幕府から、咎責を受けて、謹慎する事になつた。その謹慎中に、松陰を説いて、海外密航を、企てさせたのであつた。されば、象山は、何よりも洋行を、第一の急務として、逢ふ人毎に、勧めて居た。

三四日は滞在して、其他にも、種々の話を聞いて、山縣と、久阪は、松代を、去る事になつた。木曾路の旅も、馴れて了へば、感興を引くことの少なく、福島馬市、棧橋の景勝、上松の花漬、寢醒の蕎麥、その他にも、景色やら名物やらで、木曾路は、面白い所であるが、それも、度重なれば、左迄に珍らしい、といふ氣も起らぬ。只だ、古雅にして素樸な、人情風俗を味ふには、此街道に、限つたものである。

江戸を離れてから、十日餘りを費して、やうやく、京都へ着いた。旅路の疲れ、といふほどの事はないが、それでも、幾分の氣疲れはあらう。二三日は休養のつもりで、引籠つた。一日のこと、君公から御召との事で、二人は、出頭する事になつた。

此時分に、京都の藩邸には、長門守定廣が、來て居た。藩主の大膳太夫慶親は、萩の本城に居て、若殿の定廣が、京都詰になつて居たのである。定廣は、慶親の子ではない。支藩の徳山から養子として、本家へはいつたのであつた。氣象は、極めて豁達な、負けじ魂が、勝つた人で、時には、遣り過ぎる事もあつて、老臣が、跡始末に苦む事もあつた。けれども、其位な人でなければ、彼の難局に當る事は至難かつた。

『ハツ、御召に由りまして、出仕いたしました』  
『おう、半藏か』



「ハツ」  
「義助も、参つたか」

「ハツ」

山縣と、久阪は、平伏して居る。長門守の御機嫌は、頗る宜しい。

「どうぢや、江戸表に、變つた事は、ないか」

「別に、是れと申すほどの事は、御座りませぬ」

「道中の物語を、聞かうか」

「ハツ」

昔の大名は、所謂籠の鳥も、同じ事て、世間の事には遠ざかつて、俗事は、少しも解らなかつた。それであるから何を聞いても、皆な珍らしく感ずる。殊に、人情や風俗に關する事は、一段と珍らしくも思ふし、聞きたくもなるので、頻りに家臣の話を聞かう、とする風があつた。

山縣と、久阪は、交々道中の状況を物語り、松代の城下に、象山を、訪ねた事を申上げた。

長門守は、豫て象山を知つて居る。松陰との關係も、大凡は聞いて居るのだから、今ま兩人が、象山を訪ねた、と聞いて、少しく膝を進めた。

「象山、相變らずか」

「極めて壯健に、暮し居りまする」

「それは、何よりぢや、が、而て、何か珍説でもあつたか」

「攘夷の儀につきまして、象山の意見を尋ねました」

「おう。それは、思ひ付きてあつた。象山は、何と申したか」

「ほほう。左様か」

更に詳しく、象山から聞いた、所を、碎いて申上げたから、長門守にも、能く會得が出来たらしい。

これは、普通の殿様なら、其儘に、聞き流して仕舞ふのだが、進取の氣に、充ちて居た人であるから、苟も良いと思ふた事は、それを等閑に、することは出来ぬ。胸のうちには、何か考へて居るらしい。

五

毛利の藩士には、却々進んだ考へを、有つて居たものが多く、洋行の事などは、疾くに唱へて居たものであるが、唯だ幕府の方で、此事については、最も嚴重に取締つて居たのと、もう一つは、藩の重役に、守舊派が、多く在つた爲めに、どうしても、實行の運びに、ならなかつたのである。

乍併、時勢の推移と共に、其必要は、漸次認められて、流石に、頑迷な重役や、老臣の輩も、大分に變つて來た。

攘夷論が、激しくなるに伴つて、却つて外國の事を研究する必要が起り、これが爲めに、攘夷から開國へ、移つてゆ

く。初めは、必要に迫られての研究でも、終には其れが原因になつて、厭であつた外國が好きになり、何となく慕は

しいやうな氣も爲る所から、寧ろ洋行して見ようか、といふ氣も起る。そんな所から、追々に、思想も動いて來て、

慷慨悲憤な、攘夷論のみでは、どうしても、満足が出来なくなつて、漸く開國論に、傾いて來る。斯ういふ風に、毛

利の態度が、變つて行くから、その爲る事についても、さかんに外國の事を學ぶやうになるのは、當然の事であつて、

高杉晋作が、上海へ渡つたのも、杉徳輔(孫七郎)が、米國へ、幕使に従つて行つたのも、みな同じ事情の、動機か

らであつた。



江戸の藩邸に、詰めて居た、山尾庸三が、頻りに焦つて、洋行をしようとして居たのも、丁度、この時分であつた。藩の重役も、追々に、眼が醒めて来て、先づ蒸汽船を買入れて、之れを軍艦に、爲るまでの奮發が出来た。横濱の居留地に、チャアデン、マヂソン會社といふのがあつて、その會社から、蒸汽船のランスフキードを買入れ、王戌丸と名づけて、その運轉を試みたのが、矢張り此時分であつた。それに就て、頗る珍談がある。

初め、船を買入れる時、第一に問題となつたのが、折角に買取つた、船の運轉が出来ないやうでは、困る』

と、いふのであつた。所が、

『機關の取扱ひを覚えて、運轉が、自由に出来る迄は、夷人を、雇つて置かう』

と、いふ説もあつて、それには、種々の議論も起つたが、結局は、

『一時の都合で、雇つて置くに差支へはあるまい。機關の取扱ひを悉皆覚えたら、夷人に、暇を與ふる迄の事だ』

と、いふ事に極まつて、志道聞多、大和彌太郎、長嶺内藏太、山尾庸三等が、その船へ、乗込むやうになつた。

さて、船は手に入つて、自分等は、乗込むやうになつたが、機關の取扱ひは、毫も解らない。さればとて、何時までも、雇入れた夷人の差圖を、うけるのは厭であるから、一日も疾く、日本人の手ばかりで、之を取扱ふやうにした

い。これには、幾分の心得あるものを、同時に、乗込ませる必要がある、といふ所で、いろいろに其人を物色して、漸く勝安房の門人、土屋平四郎といふものを、捜し出した。此人は、勝の門人ではあるが、元來が、長州人であるから、強て仲間へ引入れて、はやく機關の取扱ひを覚えさせ、船が、自由に動くやうになつたら、夷人を解雇して、土屋から、一同が教へをうけやう、と考へて、之れを土屋に相談する。と土屋は、しばらく考へて居て、

『これは折角の御頼みであるが、拙者は、勝先生について、只だ機關學の稽古をした丈で、少しも實物について、練習をした事は、ないのだから、船へ乗つた所で、果して船を、動かす得るか、どうかは、甚だ疑はしい。それよ

りは、拙者の師匠で、高木三郎といふ人がある。庄内の出身で、その人物も、ナカ／＼堅實して居るから、高木に頼んだら、どうか』

との答へであつたから、志道は、

『高木の事は、かねて聞いて居る。是非さういふ都合にして、貰ひ度いが、承知するぢやらうか』

『さ、その保證は出来ぬが、一應は聞いて見よう』

土屋の答へは、どこ迄も曖昧であつた。志道は、少し焦込んで、

『左様な、生緩いことでは不可、邪が非でも押通す、といふ覺悟で、必ず説きつけてくれ。足下に出来ぬ、とあらば拙者が、談じて見よう』

と、志道一流の掛合には、土屋も閉口して、兎に角、引受ける事に、なつて別れた。

六

土屋は、勝の門下でも、屈指の俊才であつた。機關學を、専門に修めて、船の知識も、相應に有つたが、惜い事には、書物の上の知識であつて、更に實地の練習は、なかつたのである。同窓の高木三郎が、よく實地の練習もしてあつて、學問も、自分より上級にあるので、志道等に、紹介しようとしたのだが、その高木を引出す事を、却つて自分が引受けるやうになつたので、頗る苦心して、それとなく、高木の心も、引いて見たが、動きさうにもない。そこで、

土屋は、一日の晝頃、高木を訪ねて、

『今日は、川崎へ遊びに行かう、と思ふが、御同道なさらぬか』

何氣なく誘ひ出す、と、高木は、

『川崎といへば、例の大師で、名ある所ぢやないか』

土屋は、勝の門下でも、屈指の俊才であつた。機關學を、専門に修めて、船の知識も、相應に有つたが、惜い事には、書物の上の知識であつて、更に實地の練習は、なかつたのである。同窓の高木三郎が、よく實地の練習もしてあつて、學問も、自分より上級にあるので、志道等に、紹介しようとしたのだが、その高木を引出す事を、却つて自分が引受けるやうになつたので、頗る苦心して、それとなく、高木の心も、引いて見たが、動きさうにもない。そこで、

土屋は、一日の晝頃、高木を訪ねて、

『今日は、川崎へ遊びに行かう、と思ふが、御同道なさらぬか』

何氣なく誘ひ出す、と、高木は、

『川崎といへば、例の大師で、名ある所ぢやないか』



と、話の調子が良いから、土屋は、張合が出て、

『左様ぢや。その大師へ、參詣をかねての遊びぢやから、どうかと思ふて、誘ひに參つたのぢや』

『それは、面白からう』

『然らば、直様出かけよう』

『よからう』

うまく、高木を連れ出して、土屋は、これから、川崎へ案内した。

大師の參詣は、早くすませて、門前の小料理屋へ上つた。在合せの貝の鍋か何かで、一ぱい飲りながら、

『時に、高木氏、ちと御頼みの次第が御座る』

『何事かな』

『他の事でもないが、實は、我長州藩に於て、此頃、一隻の蒸汽船を買入れて王戌丸と名づけて、近く國元へ、送る

事になつて居るが、之を運轉する人に差支へ、止むを得ず、夷人を雇入れて、其者に、萬事を托する事になつたの

ぢや。然るに、夷人を、永く雇ひ置ても、藩の名折に相成るのみならず、たとへ一日と雖も、夷人を雇ひ置きたく

ない、といふので、誰か然る可き人について、機關の運轉を學び、藩士のみの力を以て、國元へ、引取り度い希望

から、拙者へ相談はあつたが、拙者は、未だ實地の事に暗いので、尊公の事を、打明けたる處、是非お願ひいたし

呉れ、とのこと故、態を御誘ひ申したのぢやが、何と御承知下さることは、出来ませうまいか』

初めて聞いた、土屋の希望、高木は、之れが爲めに、誘ひ出されたので、今更に厭ともいへず、また自分も、新ら

しい、蒸汽船に乗つて書物で覺えた事を、試み度いといふ、念もあり、土屋の決心にも動かされて、

『よろしい、承知いたしました。長い間は困るが、二三日の間なら、參りませう』

『これは、千萬蒸らない。是れより直に、御出張下さる事は、出来まいか』

『而て、その蒸汽船は、那邊に在るので御座る』

『横濱で御座る』

『然らば、參らうか』

『どうぞ願ひ度い』

是れから兩人は、横濱へ急ぐ事になつた。

志道等は、横濱で、汽船の番人をして居るのだが、どうして動かしてよいのか、それが解らないので、只空しく、

番人をして居るのであつた。所へ、土屋が、高木を連れて來たので、一同は大喜び、初對面の挨拶もあり、いろ／＼

な話の末に、高木は、一同と共に、船を動かす事になつた。

先づ石炭を焚いて、蒸氣をつくらう、としたが、どうしても蒸氣が出来ないで、トウ／＼夜が明けて了つた。

其日は、朝から蒸氣をつくりにかゝつて、漸く夜の十時頃になつて、蒸氣が出来た、といふので、これから機關の

運轉を始めると、調子よく船が、動き出した。けれども、船は反對に、後尾の方へ動くのだ。そこで、今度は、すべ

て反對に、機關を動かして見ると、うまく前へ進んだが、錨を上げずに置いたので、それから錨を上げにかゝると、

船が動いて居るので、うまく錨が上らぬ。止むを得ず、船を停めて置いて、辛うじて錨を上げた。こんな事をして、

三日も費やしたのだから、如何にも馬鹿らしい。

志道等は、此苦い經驗から、

『これは何うしても、外國へ渡つて、本式に修業して來る必要がある』

と、いふ事を、自覺したのである。

それが、志道等の洋行に、直接の原因には、なつて居ないが、とに角、洋行したいといふ心は、斯うした事の失敗

に由つて、ますます堅くなつたには、違ひない。



### 英國密航の内命

一

中興の祖先は、毛利と、覇を争ふたほどの豪族であつたが、幾度かの争ひに、力盡きて、毛利の味方となつて、それから殆ど三百年、知行は、百石未滿であつたけれど、家格は立派なものであつた。代々井上五郎三郎と稱して、毛利家からも、特別の取扱を、受けて居た。その家に、生れたのが、志道聞多であつた。舊幕の時代には、那の家でも、長男は相續人として、大切にされたものだが、次男以下は、有か無しの取扱ひを、されて、甚だ心細いものであつた。假し次男に生れても、長男が病氣だと、御控と稱して、特別に扱はれる。つまり長男が死んだら、すぐ其跡へ、入れる爲の御控で、是れは、頗る好運の次男であるが、此特例を除いたら、次男以下のものは、邪魔物扱ひをされて、養子にでも行くより外、浮ぶ瀬のない身の上であつた。何うして、斯ういふ風に、同じ親を有つて、兄弟であり乍ら、權利に相違があるか、といふに、武家の相續は、男子に限る、となつて居て、女子の相續は許さぬ。其處で、長男に生れたものは大切にされるが、次男は、何うでも可いとなる。その代り、長男が、甚い病身であるとか、夭折をしたとかいふ時は、次男が、長男の格で、幅を利かす事になる。之れが爲に、無理な養子をする事もあつて、其間に、悪弊が起つて來た。これが養子株の、賣買なるものであつた。

聞多は、次男であつたから、早く志道家へ、養子に貰はれた。それから、長門守の左右に、侍する事になつたのである。剛情で、負けじ魂の、それが氣に入つて、長門守は、聞多が好きであつた。

一日、長門守は、左右の侍臣を拂つて、聞多一人を、傍近く呼んだ。

「今日は、その方へ、特に命ずる事がある、よく承はれ」

「ハツ、何事に御座りますか」

「それは餘の儀でもないが、先般、朝廷より拜受いたした、例の攘夷に關する勅ぢや。我領内に、下關海峡のある以上、厭でも攘夷は、天下に先んじて、致す事にならう。さて左様相成るについては、夷國の狀態も、一と通りは知つて置き度いのぢや。また、攘夷の事は、暫らく措いて、一應は、夷國の事も調べて、その學ぶ可きは、學ぶが可からう、とも思ふ。其處で、誰れかを、夷國へ遣はす考へぢやが、先づ其方へ、申付けようと思ふて、斯くは内談に及ぶ次第ぢやが、その方、此役目を受くるか、どうぢや」

これは、意外千萬の事。餘りの突然で、殊に、洋行をせよとの仰せは、聞多も、少し驚いたが、實は望む所であるから、

「有難き御沙汰、謹んで御受け致しまする」

「しかし、これについては、猶ほ申聞けることがある。公儀へは願出でず、秘密にて參るのぢや。藩の老臣どもにも秘密、何者にも秘密にして參るのぢやから、萬一にも、途中で露見いたすやうの事があつても、余に申付かりし事は、一切口外いたしては相成らぬ。其際には、只潔よく切腹いたせ、よいか」

「ハツ」

昔の大名の殿様位、得手勝手なものはない。家臣の生命などは、どうでも融通の利くものと、思つて居る。幕府へは秘密だから、露見したら死んで了へなどは、實に面白い事だ。併し、之を申付けられる、聞多の身に取つては



甚だ迷惑であつたに、違ひない。

『大切な役儀、數ならぬ身に取りまして、有難き仕合せに存じまする』

『おう承知いたすか』

『ハツ、謹んで御受け 仕りまする』

『潔き覺悟、余は、満足に思ふぞ』

『それにつきまして、願ひの儀が御座りまする』

『何事か』

『此事は、却々の大役と存じますれば、他に二三の者、同道いたし度く存じまするが、如何御座りませうか』

『其邊の事は、其方の心任せに致せ』

『ハツ、御許し下されまして、有難く御禮申上げまする。同行者を求めまするは、何分にも、人情風俗の異りまする

外國の事故、如何なる間違の起らぬ、とも、限らず、殊に、幕府へ無届とありましては、萬一の場合も、考へ置く

必要が御座りまして、つまりは同行者のうち、一人にても生命あらば、復命の叶ひまする事ゆゑ、斯やうの儀、願

ひ上げましたる次第に御座りまする』

『うむ、その事は、余に於ても、よく相解り居る。此上の事は、其方の一存にて、取極めて可からう』

『ハツ』

それ丈けの事で、其日は、辭して歸つたが、さア是れからが、骨折である。何しろ幕府の禁制を破つて、遠い夷國へ密航するのであるから、他を誘ふにしても、餘ほどの注意を要するは勿論、一つ間違へば、藩主の名も出る事であるから、その人選は、容易な事でない。件れがないとなれば、たとへ自分支けても行かねばならぬ。斯うなると武士の立場も、ナカ／＼面倒なものだ。

生命を捨てる事を、何とも思はず、一通りの事理を解して、妄りに輕率な振舞をせず、それから、口の輕くないもので、首が飛んでも、秘密を、守り得る人を、といつて、多くのうちから捜すのだから、容易に思ふやうなものは、見出し得なかつた。それでも、漸く捜し出し得たのが、

遠藤謹介、山尾庸三、野村彌吉の三人であつた。

此うちの野村は、後の井上勝のことである。英吉利から、歸つて来て、最初の鐵道局長になつた。東京横濱の間

を、通ずる汽車は、此人の力に由つて、出来たのである。されば、今の東京驛の前に、其銅像が建てられた。遠藤は、

大阪に造幣局が出来た時、其局長になつた。我が財政上には、ナカ／＼力の在つた人である。山尾は、後の子爵、

この人は、法制上の功勞者と、いはれて居る。

聞多から、事情を聞いた、三人は、均しく喜んで、頻りに聞多が、誘つて呉れた禮を、いふのであつた。

『宜しいか。左様いふ事情であるから、いよく行くとなれば、無論の事、生命がけぢや。間違つたら、腹を切る覺

悟が要る。可いか』

野村は、之れを聞くと、稍激した口調で、

『そんな事は、殊更に斷る必要はなからう。腹を切る場合位は、誰でも知つて居る。馬鹿念を押すには及ばぬ』

外のものも合點を打つて、

『そりや、野村のいふ通りぢや。どうせ一度は死ぬと、極まつて居る。つまりが遅いか、速いかの違ひぢや。ハツハ

、、、、』  
武士の瘦我慢もあらうが、兎に角、その頃の武士は、斯んな調子のものであつた。



其處で、聞多が案内して、長門守の前へ、出る事になつた。  
長門守は、聞多から一應、聞いて見ると、三人が三人ながら、生命知らずの連中であるから、すツかり氣に容つた様子で、

『其方から話したのみでは、また安心がならぬ。余も、一應は申付くるつもりぢや。その三名の者を呼べ』

『ハツ』

やがて、三人は、長門守の前へ出た。長門守からは、更に聞多へ、申付けた通りの事を、一と通り申渡された。只目通りの出来る丈けても、有難いと思つて居るに、此大事を、殿様から、直接に申付けられるのであるから、三人は、只嬉しくてならぬ。

『これは、旅費として遣はす』

『ハツ』

聞多が、席を進んで受けた。長門守は、手文庫のうちから、取出して渡した。一人に付二百兩、金額の多少は、いふ所でない。殿様から直接に、金を頂戴する、といふ事が、無上の光榮なのである。

それから、酒肴を賜はり、夜に入つてから、歸つて来た。

他のものは、皆喜んで居るのに、遠藤が、獨り惘然して居る。

『オイ遠藤、貴様、何で惘然して居る』

『已れか』

『うむ、貴様は、平生から臍曲りぢやが、何で、鬱いて居る』

『どうも、已れには解らない』

『何が、解らないか』

『此金で、イギリスへ行けるのか』

『何んだと』

『一人前二百兩、これで向ふへ行つて、歸つて來られるのか』

『そりや判らぬ』

『判らないのか』

『判らずに、御受けをして來たのか』

『殿様も知るまい。それが判つて居る位なら、行つて來いとは、いはれぬ譯ぢや』

『さうすると、貴様は、それを知らずに、引受けて來たのぢやな』

『左様さ』

『それは、大變ぢや』

『何が、大變か』

『何がツて、イギリスへ行つて歸るに、一人前二百兩は、あまり少な過ぎるぞ、行き度くても行けぬぞ』

『さうか』

『さうかぢやない。困つた事になつた』

『どうして、そんなことが判る』

『實は、已れが、函館へ行つた時、キリシタンバテレンの夷人と懇意になつた。それが、イギリスの人ぢや。一日のこと、いろ／＼の話から、イギリスへ行くには、幾日ほど費かるか、といふて聞いたら、行く丈けに、五ヶ月は費かる、といふた。而して見ると、行つて歸るだけでも、先づ十ヶ月になる。向ふへ行つて、滞留して居る日を加へて、四人の旅費が八百兩、これでは、何う考へても足りまい。どうぢや』



「成程、さうぢやな」  
 遠藤に聞いて、初めて知つた、渡航の日數、それ迄は、そんな事は、少しも考へて居なかつたのだ。さア斯うなる  
 と、どうしてよいか、判らなくなつた。  
 苟くも武士たる可きものが、殿様から申付けられて、快く引受けて來てから、今更に旅費の事などで、ぐづぐづい  
 ふなんて事は、出來ぬ。流石の聞多も、之れには頗る弱つたが、今は如何とも致しがたい。たとへ何うならうとも、  
 此上は、生命がけて行く外はない。けれども、何うして行くか、旅費は、其れで堪らへる、としても、行く可き方法  
 について、また一と苦勞する事になつた。

二二

「旅費の事は、先づ之れで可い、として、彼の地へ行くに、那邊から船へ乗るつもりか」  
 遠藤が、重ねて尋ねるから、聞多は、少し焦れ込んで、  
 「そんな事が判るか」  
 「えッ、さうすると、まだ船の事などは、考へてないのか」  
 「うむ、これから都合しよう、といふのだ」  
 「それは、怪しからぬ」  
 「何が怪しからぬ」  
 「旅費は、是れだけで、船の都合も考へてない、といふのでは、丸で話しに、ならんぢやないか」  
 何といはれても、聞多には、之れ以上の答へは出來ない。つまり夢中で引受けて來たのだ。野村は堪へかねて、  
 「オイ、どうする覚悟か」

山尾も、笑ひ乍ら、  
 「貴様は、己れを殺すつもりで、こんな事を、引受けて來たのか」  
 聞多は、癡癡聲になつた。  
 「宜しい。己れは、腹を切る」  
 「貴様が、腹を切つても、己れ達の處分は、つくまい」  
 「どうも仕方がないから、一途に死ね」  
 「馬鹿をいふな、斯んな事で、死んで堪まるか」  
 「それでは、己れが、死ぬ迄の事だ」  
 「何だ、馬鹿々々しい」  
 これから、又た相談をはじめたが、別に名案もない。相談を、詰めた末が、  
 「兎に角、江戸へ出て、イギリスへ行く工夫をしよう。生死を極めるのは、まづそれからしよう」  
 と、なつて、四人は、江戸へ行く、支度をはじめた。  
 麻布の龍吐に在る、毛利家の下屋敷へ、一先づ落付いて、それから四人は、手を別けて、イギリスを、知つて居さ  
 うなものを、捜す事になつた。  
 その頃は、物を多く知つて居て、俐巧だといふ評判をされるのが、一番に恐ろしかつたのだ。殊に、外國の事など  
 を、知つて居る、といふ事が知れると、直きに災難を招くのであるから、大概なものは知つて居る事でも、知らぬと  
 答へるが、その平生であつた。高野長英や渡邊華山は、餘りに外國の事情を、能く知つて居て、多くの青年や有志者  
 に、外國の事を、教へたのが原因となつて、二人とも、切腹して了つた。仙臺の林子平は、矢張り世界の事を、書い  
 た物を出版して、



「江戸の日本橋の下を流れる水は、倫敦のテムズ河に、通じて居る」と、いふて、終に罪を得たのである。普通の伶俐でも不可ないが、外國の事を、知つて居るのが、最も幕府の嫌ふ所と、なつたものだ。

四人が手別けして、いくら聞いて廻つても、イギリスの事など、自分から知つて居ると、いふものはない。況して、向ふへ行く手續や便宜を、得る筈はなく、只だ歩いて廻つた丈の事で、四人ながら、草臥れて了つた。

「どうしても、不可ん。うまい話にならぬ」と、いつて、聞多は、落膽して居る。外のものも、同じやうにボンヤリして居るが、そのうちで、野村は、少し元氣があつて、

「どうぢや。もう一人だけ、聞いて見たい、と思ふが、差支へあるまいか」

「そんな事は、相談する迄もない。さう思つたら、聞いてくれればよいに……」

「しかし、同志の一人ぢやから、もし事情を聞かれた時に、云はぬといふ事は出来ぬ。それで一應は、相談するのぢや」

「それは、念の入つた事ぢや。全體、誰か」

「俊輔ぢや」

「えッ、俊輔の事か、彼奴が、イギリスを知つて居るか」

「彼奴は、氣輕な調子で、誰の處へも、平氣で能く出入するから、大概な事は、知つて居るぞ」

「さうか、兎に角、聞いて見る事に、するか」

相談は決まつて、野村が、俊輔を迎へに、ゆく事になつた。此時、俊輔は、外櫻田の本邸に居て、近く兼用で、歸國する事になつて居たから、その支度で忙しかつた。

「ヤア、野村か」

「オイ、少し話したい事があるから、一寸麻布まで、来てくれ」

「うむ。何の用事か」

「まア、何でもよいから、一寸来てくれ」

「左様か、直き跡から行く」

「そんな事をいはずと、すぐ来てくれ」

「急ぐ事か」

「大いに急ぐのぢや」

「汝への用事か」

「イヤ、左様いふ次第でもない」

「まだ外に、誰れか居るのか」

「聞多も居れば、山尾や遠藤も居るのぢや」

「可し、行かう」

俊輔の身分は輕いが、御殿山の焼打と、坂下事件から、俄に同志の間でも、信用が厚くなつて、相當に取扱はれて居るのだ。殊に、聞多との交情は、他の人にも優つて、互に相許して居たのである。何事か知らぬが、聞多を始め、山尾や遠藤が、待つて居るといふし、迎へに来たのが、野村では、厭ともいへぬから、すぐに支度して、野村と一途に麻布の下屋敷へ、やつて来た。待ちかねて居た、三人は、俊輔を見て喜んだ。

四



「野村が来て、何でも一途に來い、といふから、遣つて來た。話といふのは、何か」と、先づ伊藤から、問ひかけた。

「少し待つてくれ」

と、いひながら、聞多は、山尾と、遠藤の顔を見た。

「貴公に任せる。宜しく頼む」

これは、遠藤がいつた。山尾と、野村も、同じやうな事をいつた。其處で、聞多は、膝を進めた。

「秘密で、聞き度い事がある。他言をせぬ、といふ證據が、見度い」

「可し」

俊輔は、小刀の小柄を抜いて、刀身へ、打々と中てる。之れが金打といつて、武士の誓ひで、一たび金打をしたら、首が飛んでも言はぬ、といふ誓ひになるのだ。

昔の習慣でも、斯ういふ事は、今の世に在つて、可い事だ、と思ふ。今では、嘘をいふ事の巧いものが、働きのあつた人となつて居るのだから、情ない。公證人の所へ、行つた歸途に、辯護士を訪ねて、訴訟になつた時の、相談をして置く。政治家も、學者も、皆な嘘を吐いて、平氣で居る。商人の嘘は、當然の事のやうに、されて居るのだから、恐ろしい世の中だ。

私が、曾て肥後の入代へ行つて、或舊家で、加藤清正公の畫像を、見た時、斯ういふ面白い話を聞いた。

此邊は一帶に、清正を、信仰して居るから、大概な家には、その畫像の一幅位は在る。其家の人が、借金をして證文を書く時に、

「萬一にも期限に至つて、返済致さざる時は、清正公の畫像に、墨を塗られても、決して故障は申しませぬ」と、いふ事を、書き添へる事に、なつて居る。清正公の畫像に、墨を塗られる事が、それほど苦痛に、なつて居たのだ。之れに依つて、其約束は、必ず履行される、といふ事であつた。實に美しい習慣であるが、茲にもう一つ面白い事があるから、序々に述べて置かう。

入代から五六里も、奥へはいる用事があつて、寂しい田舎道を行くと、大きな笹へ、柿が一ぱい入れてあつて、食べた人は代金を、此箱の中へ入れて行け、といふ事が、書き添へてあつた。それから、私は、道行く百姓體の人に、

「こんな事をして置いて、代金を入れてゆく人がありますか」と、いつて尋ねると、

「いくらか儲かるやうに、錢がはいつて居ますから、少しも心配は要りませぬ」と、いふて、笑つて居た。都會の地で、斯んな事をしたら、何うてせうか、恐らく柿を、賣る人は、皆な無代で、食はれて了ふのみならず、笹まで持つて行かれるに、違ひない。

江戸の昔にも、それと似た美談がある。矢張り借金の場合に、證文を入れて「もし返済の出來ぬ時は、門口で御笑ひ下されても、差支へがない」と、いつたやうな事を、書き入れる。金を借りた人は、門口で笑はれるのが辛いから、必ず期限には返す、といふ事だ。笑はれて、帳消しになるのなら、いくらでも笑へ、といふのが、今の人情である。

昔の人は、門口で笑はれるのが、辛い爲めに、返金の期限を、誤らなかつた。斯うした習慣が、普通の町人の間にさへ行はれて居たのだから、武士の金打が、首と釣替の誓約になつたのも、無理はない事だ。

俊輔の金打を見て、聞多は、

「その、誓ひを見た上は、安心して聞くが、貴様は、イギリスといふ國を知つて居るか」

之を聞いて俊輔は、呆れ顔であつた。

「他に金打まで爲せて、貴様の聞く事は、そんな詰らぬ事か」

「うむ、それが聞き度いのぢや」



「イギリスを知らぬものが在るか」  
「えッ、貴様は、知つて居るか」

「あれは、夷人の國ぢや」

その答へは、如何にも簡單明瞭であつた。聞多は、俊輔の顔を見つめて、

「イギリスを、知つて居るといふのか」

「あれは夷人の國ぢや、と、答へて居るではないか」

「それでは、餘り簡單すぎる。もう少し詳しく、聞き度いのぢや」

「詳しくとば、何ういふ事を……」

「つまり、イギリス國は、何の方角に當つて、凡そ幾百里位、離れて居るとか、船で行くとして、幾月位まで行けるとか、さういふ事を、聞き度いのぢや」

「そりや、何でもない事ぢや。これから真南に當つて居る。里數は、ナカ／＼あるが、何しろ大きな海を隔てゝの事ぢやから、判然とは判らぬ。俗に萬里の波濤といふ位だ、行くに幾月費かるか、それも判らぬ。風の吹き工合で、早くも行ければ、また遅くもなる、豫め幾月と定める事は出来まい」

何だか變な答へて、聞多には、少しも要領が聞き取れなかつた。

「貴様は、イギリスを知つて居るのか」

「今答へた位ゝの事は、知つて居るが、その先きの事は、判らないのぢや」

聞多は、嚇ツと怒つた。俊輔に、愚弄されて居るやうに、思はれたからだ。

五

英吉利へ行かう、といふものが、英吉利の事を、少しも知らず、どうして行けるか、その手續きについてさへ、確と定つた考へを、有つて居ないのだから、蛙の冠冠りて、眞に向不見の至りである。殊に、幕府に秘密で、國の禁制を、破つて行かう、とするのであるから、冒險此上なしの事だ。俊輔を、呼んで来て、如何に聞いて見た所で、聞多等の知らぬ事は、矢張り俊輔も知らないのだから、何の役にも立たぬ。

「貴様はイギリスを、知らんぢやないか」

「まだ行つた事がないから、知つて居る筈がない」

「なんだ。つまらんことぢや」

「全體、何ういふ譯で、そんな事を聞くのか」

「まア、宜しい」

「どういふ秘密が、あるか知らぬが、兎に角、拙者にも打明けてくれ」

「イヤ、それには及ばぬ。貴様は、もう可いから、歸れ」

聞多が、俊輔の間に答へず、無理に歸らさう、とする。それには少なからず、俊輔の感情を、害したものが、俊輔の語氣は、稍荒くなつた。

「これは怪しからぬ。拙者には、金打まで爲せて置き乍ら、何事も打明けぬとは何事だ。如何に御互の間とは、いひ乍ら、あまりの我儘ぢや。拙者は、どうしても、其秘密を聞かねば、承知が出来ぬ」

と、語るが如くに、聞多へ迫つた。疍續持の聞多は、眞赤になつて怒つた。

「黙れ、貴様は、己れに喧嘩を賣かけるのか」

「イヤ、さうではない。汝へが、餘り解らぬ事を云ふから、それを怪しからぬ、といふのぢや」



「何が、怪しからぬ」  
「何がといふて、汝へは、拙者に、金打まで爲せて、自分の勝手なこと丈け聞いて、拙者の尋ねることには、答へも爲す、理不盡に逐出さう、とするから、それで、拙者は、不服を唱へる迄の事ぢや」  
「打明けても甲斐のない事ぢやから、話さぬといふに、何の不思議がある。我儘とか、理不盡とか、いはれては、聞き流しにならぬ」

「全く、それに違ひない。汝への勝手我儘は、今始まつた事ではないが、あまりに甚しいからいふのぢや」  
「何を、貴様が、生意氣な事を……」

「何ぢや」

二人とも、膝を立直した。之を見て驚いたのは、他の三人である。山尾は、二人の中へ割つてはいつた。

「まア、待たつしやい。これは聞多が、宜しくない」

「なんて、己れが悪い」

「伊藤にも、一應は話してやるが可い。それを話さぬのは、水臭いといふものぢや」

「しかし、話した所で、何の甲斐もあるまい」

「話甲斐のある無しは、しばらく措いて、伊藤も、同志の一人である以上、問はれたら答へるのが、禮ぢや」

「それでは、話さう」

「まア、伊藤、聞多が折れて出たら、それで可からう」

「うむ、拙者は、無理をいふのでない」

「聞多との間柄で、そんな事を争ふにも及ぶまい」

「頭ごなしにやられたので、少し辨にさはつたのぢや」

「まア、宜しい。これから聞多の話すのを、聞いてくれ」  
「どんな事なのか、聞いて見よう」

聞多は、長門守から英國へ密航を、申付けられた事情を、詳しく述べて、更に今困つて居る事を、少しも包まず、すつかり打明けた。

「斯ういふ理由で、困つて居るのぢや。そこで、貴様は、その邊の事情を、少しは知つて居るぢやらう、といふので呼んで來たのぢやが、貴様も、矢張り知らない、といふので、大に弱つて居るのぢやよ」

「ふふーむ。さういふ事ぢやつたか」

「何とかして、イギリスへ、行く方法は、あるまいか」

「さ、それは却々に、面倒な事ぢや」

「たとへ、何んな無理をしても、彼の地へ行かねば、我々の面目が立たぬ事になる。何か、貴様に、良い分別はないか」

「さうさな」

しばらく考へて居た、俊輔は、

「オイ、拙者を、仲間へ入れて呉れんか」

「何だ、仲間へ入れる、といふのか」

「うむ」

「馬鹿な事をいふな」

「何が、馬鹿な事ぢや」

「よく考へて見る、四人揃つて居て、少しも判らんので困つて居る。そこへ判らん奴が、一人ふえた所で、矢張り判



らんぢやないか」  
 野村や、遠藤も、山尾と共に、頻に傍から口を出して、  
 「それは、駄目ぢや。貴様が、新たに加はつても、判らぬ事は、矢張り判らぬぢやから、そんな相談は止めろ」  
 「拙者を、仲間に入れると、向ふへ行く工夫が、あるのぢや」  
 「えッ、向ふへ行く工夫が、あると申すのか」  
 「さうぢや」

「それは、何ういふ事にすれば可いのか」  
 四人は、均しく膝を進めて、俊輔を取捲くやうにした。俊輔は、落付き拂つて、  
 「それは、容易にいへぬ。拙者を、仲間へ入れたら話すが、その返事のないうちには、何もいはぬ」  
 是には、四人が弱つた。どうしても、俊輔に、頭を下げねばならぬ事になつた。俊輔が、何んな考へて居るかは知らぬが、とに角、困つてゐる事について、うまく解決がつく、といふのでは、たとへて、俊輔でなくとも、頭位は下げる。況して、俊輔は、同志の一人でもあり、旁々、それに頭を下げるのは、四人にしても左程、苦痛ではな  
 いが、今更に改めて、低頭をするのも變なものだから、幾分か躊躇はする。俊輔は、獨り天下を取つたやうな顔をして、微笑を漏らして居た。

六

「貴様の望みを入れて、一途に連れて行くから、その工夫といふのを、話してくれ」  
 流石に剛情で、我慢の強い、聞多が、先づ斯ういひ出した。  
 「確かに仲間入りを、承知するか」

俊輔は、猶ほ念を入れて、確答を求めた。聞多は、焦れ込んで、  
 「承知したといふたら、それで可からう」  
 と、答へた聲は、格別に大きかつた。俊輔は、極めて静かな調子で、  
 「その工夫といふのは、斯ういふ次第ぢや。横濱のチャーチンマヂソン會社の支配人に、ガアルといふ夷人がある。それは拙者が、二三度逢ふて、懇意にして居る。今度の藩で買入れた船は、此會社の持船であつた事は、聞多や、山尾も知つて居る筈ぢや。左様いふ關係のあるを幸ひ、ガアルに頼んで、向ふへ行く船に、乗る丈けの事は、必と出来る、と思ふが、何うぢや」

聞いて見れば、何でもない事であつたが、その何でもない事に、一寸氣が付かず、只氣ばかり揉んで居たのは、今更に馬鹿らしくもあるが、先づ之れより外に、良い工夫はないのだ。

「可し。それは良いとして、そのガアルといふ夷人に、掛合ふ事は、一切引受けてくれるか」  
 「それは、承知いたしました」  
 「然らば、貴様を、仲間へ入れる事にする」  
 「千萬忝ない」  
 「それは可い、として、此に困る事があるのは、旅費の一條ぢや。若殿より頂戴いたしましたのは、四人で八百兩、一人に割付けて、二百兩にしかならぬ。それでは至難しからう、といふ説も、出て居るのに、また貴様が、一人加はつては、一人についての割付けが、更に減じる事になる。これには些か困つた」  
 「それについての相談も、あるのぢや」  
 「ふむ、どんな相談か」

「イギリスへ、行つて歸る旅費が、一人二百兩は少な過ぎる。どうしても五人行くには、もう三千兩位は要る。ま



づ其算段をするのが、肝要ぢや」

『えッ、三千兩ぢや、ふーむ』

『八百兩は別にして、三千兩の都合をつけねばならぬ』

『貴様は、そんな大きな事をいつて、三千兩の大金が、どうして出来るか、まるで夢のやうな話ぢや』

『イヤ、夢ではない。慥かに出来る見込みがある』

『へエー、その大金が』

『うむ』

『そりや。どういふ譯があつてか』

俊輔は、膝を進めた。四人の膝も、共に進んだ。

『櫻田の御本邸に、留守居をして居る、村田藏六、彼れに話して見よう。彼れは、普通の奴でない。和蘭の書物も、よく読んで居て、世間の事には、ナカ／＼明るい。殊に、藩の御用金二萬五千兩を、預つて居るから、此方の事情を打明けて、そのうちから三千兩借り出さう、といふのぢや』

斯う聞いて見ると、一應は出来さうにも思はれるが、實は之れも至難しい。藩の御用金といへば、殿様からの預かり金だ。それを無断で取り出せば、重い刑罰を行はれるのだから、村田が、容易に應ずる理由がない。秘密は打明けて、金は借されぬ事になると、却つて災を求めぬ事になるから、俊輔のいふ通り、すぐそれと、極める事も出来なかつた。

『貴様の考へは、至極よいやうではあるが、村田の應じてくれる、見込みが立たぬ』

『イヤ、さうでない。村田は、必と承知する』

『重那になる覺悟で、村田が、應ずるとは思へぬ』

『拙者は村田に屢々逢ふて、彼の氣性も、能く呑み込んで居るが、何しろ偉いものぢや。此方から、事情を打明けたら、必と應ずるに違ひない。拙者が、保証いたす。藩中のものを洋行させる事は、彼が豫ての宿論ぢやから、否も應もあるまい』

如何にも手軽にいふ、俊輔の見込みは、どこかに急所を、握つて居るのだらう。それを無外に、排斥も出来ないから、

『しばらく、貴様のいふ所を信じて、村田へ相談する、としようか』

『それが可い、と思ふ』

『もし間違つたら、どうするつもりか』

『此見込みが違つたら、其場を去らず、村田を、ぶつ放して、一同は、腹を切る迄の事ぢや』

話は軽いが、覺悟は強い。俊輔に、その決心がある以上は、きつと村田も承知するだらう。四人も、俊輔の意氣の

壯なるには、偏へに感心した。

『然らば、村田を訪ねて見よう』

『さア、行かう』

五人が揃ふて、村田を訪ねる事になつた。狙ひをつけられたものは災難だ。よし村田でなく誰にしても、こんな連中に、見込みをつけられたら、遁れる事は出来ぬ。しかし、此連中が、これ迄の決心を持つて、村田に迫る以上、その要求の容れられぬ、といふ筈はない。生命がけほど恐ろしい事はないのだから、何ても大問題を背負込んだら、決死の覺悟を、爲るに限る。



# 洋行費の調達

此連中が、京都を出て、江戸へ向ふ前に、面白い逸話が、二つある。それが皆な本文に、深い關係を有つて居る事であるから、此に其概畧を、述べて置く。

諸藩の若侍が、京都詰になると、いづれも艶ッばい、話の材料をつくる。京都は、女の都で、京都の名物の一つは、少くも女である、といへる。従つて、花柳界の繁昌は、昔も、今も變りがない。東男に京女郎といふて、男は、關東の、すつきりしたのを住とするが、女は京都の、優しいのを貴し、としてあつた。殊に、祇園の一廓は、活きた名花の淵藪といはれて、花見小路の賑ひは、他の都會に、見る事の出来ぬほどである。されば、一たび京都へ、足を入れた、國侍は、皆軟かくなつて、本國へ歸る時分は、相當の通人になつて、居たもので、那んな堅造ても、隠し女の一人、二人は、有つて居る。大西郷や、大久保のやうな人までが、京都へ來れば、多少の艶話をつくるのだから、實に面白い。

木戸の桂小五郎が、三本樹の幾松に、生命までも打込んで、終には之を落籍して、夫人にまでした事の如き、或は後藤家次郎の夫人が、祇園の名妓であつた事の如き、そんな話は幾らもある。藩に於ての身分は、餘り高くないにしても、一般の浪士や、有志の人から見れば、ずつと上位に居る人達が、さういふ次第であるから、どんなものでも、多少の艶聞は、つくつて居る。

志道聞多が、その頃に、馴染んで居たのは、祇園の名花と唄はれた、中西君尾といふ女であつた。著者が君尾を知つたのは、今から十數年ほど前の事で、その歳は、既う耳順を、越えて居て、昔の艶姿は失く、皺くちやの婆アさんであつたが、祇園の藝妓の取締として、ナカノ威勢を、利かして居た。聞多の後ちに、品川彌二郎、それから兒玉源太郎と、いつた調子で、片端から馴染んで行つた。貞操とか、節義とかいふやうな事は、全然で見る事は出来なかつたが、男子の玩弄としての君尾は、それでも評判の女であつた。

聞多と、情交の有つた時分、君尾は、聞多を、無二の情人として、相應に浮名を、立てられたものであつた。聞多も、亦た頗る熱心で、毎夜の逢瀬に、痴態の限りを、盡して居た。

一日、聞多が、君尾に逢ふて、  
『お前と、拙者とは、深い馴染で、他にも羨まれるほどであつたが、拙者も、今度は、遠い土地へ行くので、お前には、最早あへぬかも知れぬ。それで、今夜は、態々別れを、告げに來たのぢや』

之れを聞いた、君尾は、非常に驚いた。今までに、其んな事は、噂にも聞かず、一二日前の夜に、逢ふた時も、聞多は機嫌よくして、更に其れらしい話もなかつたが、今俄かに、斯ういふ事を、言出したのは、何か仔細のある事と思ふて、容易に他國へ行く、といふ事は、信じ得なかつた。

『遠い國と仰しやるのは、那邊の事で御座いますか』

『イヤ、それは一寸話せぬ事に、なつて居る』

『そりや、可怪しいでは御座いませぬか。あなたの行先を、妾が聞いたとて、不思議は御座いますまい。秘密の事ゆゑ、黙つて居れと、仰しやるなら、何ぼうでも他言は、いたしませぬ。どうぞ打明けて下さりませ』

『實は、殿様の御内命で、參る事ゆゑ、たとへ親兄弟といへども、打明ける事は出来ぬ。只だ遠い國といへば、それ



「で解つたものとして、快く別れてくれ」

「えッ、何と仰しやいます。それでは、妾に別れると、仰しやるので御座いますか」

「さ、全然で別れる、といふ譯ではないが、たとへ一時の事にもしろ、お前の傍を離れるのぢやから、まア別れて置いた方が、御互の利益と思ふで、別れようといふのぢや」

「そりや、厭で御座んす。妾は何としても、あなたに別れる事は出来ませぬ」

「左様解らぬ事を、いふては困る。遠い國へ行くのぢやから、萬一の事でもあると、却つてお前に、苦勞をかける譯ゆゑ、寧ろ別れて置かう、といふに、それが解らぬとは、どうしたものか」

「妾には、どうしても解りませぬ。あなたの御心が解りませぬゆゑ、只だ別れると、仰しやつても、ハイとは申されませぬ。何か外に、仔細のある事とは御察いたしますが、それを打明けて下さらぬのが、妾は、怨めしう存じます」

斯ういふ工合に、デリ／＼と攻めよせられては、聞多も、防ぎがつかぬ。さればとて、密航の事情を、打明ける事は、猶更出来ない。今となつては、態を斷りに來た、自分の愚さを、笑ふの外は、ないのだ。

君尾は、ナカ／＼勝氣の女ではあつたが、洗石に、既う涙にくれて居る。

「お前は、どうしても、其仔細を語らねば、承知せぬと云ふのか」

「ハイ」

事、此に至つては、密航の秘密を、打明ける外はない。けれども、それを打明けて了へば、聞多の武士は、立たぬ事になるのだ。

何事に限らず、女が疑惑を抱いて、繰言をいひ出したら、もう始末のつかぬものだ。叱つても駄目なら、脅しても利目がない。さればとて、毆打る事も出来ず、殺して了へば、ソレ迄だが、化けて出る。いづれにしても、厄介なものだ。

「ねー、あなた、遠い國とは、那邊の事で御座いますか」

「それは、判然うち明ける事が、出来ないのぢや」

「何故、別れなければならぬので、御座いますか」

「人間は生身ぢや。昔の人も、病の器とさへ、言ふて居る。遠く離れて居て、萬一の事でもあつては、却つてお前に、迷惑をかける、と思つて、斯ういふのぢやが、お前には、拙者の心が解らぬか」

「妾には、どうしても解りませぬ」

「それは、困つたものぢや」

「遠い國の事は、仰しやる譯になりませぬ、といたしましても、別れる事は、厭で御座います」

聞多は、しばらく考へて居たが、

「よし、別れる事は、止めにしよう」

「えッ、それでは、今迄の通りに……」

「うむ、左様ぢや。拙者の思ひ過しから、お前に、苦勞をかけたまいとして、却つて悪く思はれたのでは、拙者も、つまらぬから、只だ遠い國へ行くについて、一時の別れとして置かう」

「それなら、妾も、彼是れ申しませぬ」

「さう解つてくれたら、拙者も嬉しい」

「幾久しく可愛がつて下さいませ」



「うむ、二人の交情に、變りはない」

「嬉しう御座います」

「さ、機嫌なほしに飲まうか」

「ハイ」

これから酒になつたが、考へて見れば、可笑なものだ。

井上が侯爵になつて、あんな濼い顔をして居たのに、昔の聞多には、こんな情話があつたのだから、實に人間の一生は、面白いものだ。

その晩は、ゆつくり寢て、翌朝は又た、飲直しの流連、昨夜の睦言に、君尾の機嫌は、すつかり直つた。

「妾、あなたに、お願ひがありますけれど、あなたは、肯いて下さるかしら」

「何か知らぬが、いふて見なさい」

「もし、肯いて下さらなかつたら、何うしよう」

「可笑しな奴ぢや。まア、言ふて見るが、可い」

「それでは申しませう」

「うむ、どういふ事か」

「あなたの、お片見を下さいな」

「何ッ、片身をくれと」

「はア」

「ハツハ、、、まるて死にても、ゆくやうぢやな」

「でも、あなたが、本當の事を、話して下さらないんですもの。妾は、何だか心細くなりますわ」

「よし、片身は遣はさう」

聞多は懷裡から、紙入を取出して、

「さ、これを遣はす。その代り、お前も、何か呉れ」

「ハイ」

君尾は、帯の間から、鏡を出した。その頃には、鏡が女の魂となつて居て、皆な金屬の打物であつた。

「それでは、妾の魂を……」

此鏡が、後年に、聞多の生命を、救ふとは、神ならぬ身の二人は、ソナナ事には、思ひ及ばなかつた。嬉しさうに

紙入と、鏡の交換をすませて、聞多は、江戸へ出發した。

然るに、此事について、著者が、井上との間に、一寸争ふた事がある。それは、井上が、君尾から、鏡を買つた事

は認めるが、紙入をやつた事は覺えがない、といふて、著者に紙入の事文だけは、訂正して置てくれ、といふのであつ

た。そこで、著者は、

「紙入を、君尾に與へた事は、全く事實であつて、決して誤りではない。現に本人が、その紙入を、持つて居るのが、

何よりの確證である」

と答へたが、井上は、何うしても承知しないで、

「たとへ、君尾が何といふても、己は知らぬから、訂正してくれ」

と、いふのであつた。

それから、大に争ふし、其訂正の要求は拒んで、いづれ此一事は、後日に、明白になるだらうから、それ迄留保し

て置かう、といつたら、井上は、

「己れも剛情だが、お前も、ナカ／＼剛情だな」



といつて、大に笑つた。  
 その後、井上は、死んで了つたので、此争の解決がつかぬ事になつた。所が、翌年の春、毛利家の、史料編纂の主任として、其道の人に、知られて居る、中原邦平といふ人に逢つたから、此事を話したら、中原は笑ひながら、「それは、君のいふのが本當で、井上は、全く忘れて居るのだ。我輩にも、同じやうな事をいふて、頻りに異議を唱へたが、我輩は、一切それを拒んで了つた。あれは、井上が、君尾に與へたに、違ひないのだ」と、いふたので、矢張り著者が、いふた通りに違ひない、といふ事になつた。  
 本人の井上が、彼是れいふたので、多少の疑ひを、有つ人もあらうから、一應辯解して置いたのであるが、世間には、能く之れに似た事があつて、本人が、忘れて居ても、他から解つて來る事が、往々にしてあるから、本人の談話でも、容易に信ずる事は、出來ぬものだ。

三二

長門守が、聞多に、英國密航を申付けたのは、その獨斷からではあつたが、只だそれだけの事では、折角の目的を、果し得ないので、密と周布政之助へ、打明けける事にした。  
 周布は、毛利家の世臣ではなく、周防の片田舎に、村夫子を遣つて居たのを、よく知る人があつて、藩主へ推薦したので、人材登庸に、務めて居た、毛利慶親は喜んで、周布を呼出して、之れを採用する事にしたのだ。  
 才幹が、すぐれて居る點からいへば、藩中に、其比なきほどの人物で、すつかり藩主の氣に容つて了つた。それから、追々に昇進して、終に政務座役に迄なつた。  
 村田藏六も、周防の田舎醫者であつたが、學殖と識見を以て、幕府に召抱へられ、蕃書取調所の役人になつた、和蘭の醫問が、よく出來るので、破格の拔擢を爲されたのである。村田が、幕府の召抱へになつてから、毛利家では、村

田の實力を知つたので、非常に弱つた。自分の領地内に、これだけの俊才が在るのを知らずに居て、幕府へ召抱へられた、とあつては、毛利の面目が立たぬ。此上は何とかして、村田を、取戻さねばならぬ、といふので、いろ／＼に苦心はしたが、何分にも對手が、幕府であるから、迂濶に手はつけられないが、さればとて泣寝入りにもされぬ。何としたものか、といふ段になつて、周布が、自ら進んで、幕府へ掛合ふ役目を、引受ける事になつた。  
 所が、幕府では、周布の掛合を受けて、その答辭に苦んだ。といふものは、周布の申出た理窟が、如何にも合理であるから、それを打破る丈の答辭が、出來なかつたのである。周布の言ふ所は、  
 『村田の出生は、周防の大村であつて、現に兩親も、居る位だ。毛利の支配地のものを、一應の交渉もなく、幕府が、召抱へるのは、如何なる次第であるか。もし左様の事を致しても宜しいのなら、毛利も、之れから他領内のものを下シ／＼召抱へるから、宜しく御認め下さい』  
 と、いふのであつた。  
 幕府は、トウ／＼凹垂れて、村田を、毛利へ、返して了つた。その取扱は、一切、周布が行つたので、村田と周布は、互に相許す事になつた。  
 その他にも、周布についての逸話は澤山あるが、もう一つ丈、紹介して置かう。  
 家茂將軍の上洛したについて、高杉晋作が、此好機を逸してはならぬから、將軍を、一刀兩斷にしてはう、といふので、その決心を、周布に打明けた。  
 『陪臣が、將軍を斬るとは、未曾有の快事である。それに異存はないが、足下は、將軍を斬る刀を、持つて居るか』  
 『別に將軍を斬る刀は、持つて居らぬが、此一刀で斬る』  
 『イヤ、それは悪い。苟くも天下を預かる、將軍を斬るに、その刀では宜しくない、拙者が、將軍を斬る刀を、進上しよう』



『それは、有難い、どういふ刀かな』  
周布は、大切さうに藏つてあつた一刀を、高杉の前へ出して、  
『さア、之れで斬つて来るが、よい』  
『ふむ。これは銘刀のやうぢやな』  
『殿様から、拜領した銘刀ぢや』  
『えッ、殿様から……』  
『長防二州の領主、毛利大膳太夫の佩刀を以て斬るなら、敢て禮を缺く事にも、なるまい、ハッハ、ハ、ハ、ハ、』  
『成程』

高杉が、周布から、受取つた刀を、よく檢べて見ると、一引三星の毛利家の紋が、金散らしになつて居るから、  
『周布氏、此紋は、如何なさる』  
『うむ、さうぢや。それが在つては悪い』

毛利の定紋が、附いて居る刀を、もし幕府に、知られるやうな事があつては、跡が面倒である。周布は、矢摺を取つて、その定紋を、ゴシ／＼やつて、摺潰して了つた、高杉は、その刀を、持つて行つたが、此事は手違ひがあつて終に實行の運びには、ならなかつたが、その時代の事として見て、殿様から拜領した、刀の定紋を、矢摺で潰して了ふといふやうな、思ひ切つた事は、周布でなければ出来ぬ藝當で、此一事を以て、周布の爲人の一斑は、想像し得られる。

(周布に關する二項は、再掲したのであるから、爲念斷つて置く)  
さて、周布は、長門守から、聞多等の洋行一條を聞いたので、兎に角、その事は可いとしても、八百兩では何うにもならぬ。少くも五千兩位の金は、別に用意して置く必要があると、考へて、それから金の調達にかゝつたが、五

千兩といふ大金が、手軽く出来る筈がない。  
之れには、流石の周布も、大に胸を痛めて、折角の企てが、金の爲めに破れては、他日の物笑ひにもなる、何んな都合でもして、聞多等の出發を、容易ならしめなければならぬ。と、そのみに苦心して居たが、どうにも工夫がつかず、困つて居る所へ、江戸の藩邸に居る、村田から、聞多等の事を、報告して來た。

四

村田の報告は、唯だ聞多等が着いた、といふ丈の事であつたが、矢張り金の事も、書いてあつた。

『ハッ、申上げます』

『何ぢや』

『大黒屋六兵衛の手代、貞次郎と申します者が、秘密にて御目にかゝり度き由、申居りますが、如何取計らひませうか』

『何ッ、貞次郎が參つたか』

『ハイ』

『よし。之れへ通せ』

『ハッ』

執次郎のものが、立去つた跡で、周布は、ニツユリ笑つたが、何か胸に、成算が立つたらしい。

大黒屋六兵衛といふのは、横濱の貿易商で、澤山の資産がある所から、大名へも、貸金をして居たのだ。が毛利家でも、此者から金の調達を、うけた事は、屢々あつて、周布も、能く知つて居る。従つて、貞次郎にも、面會した事があるから、今此場合に、貞次郎が、偶然訪ねて來たのは、何よりの事と、喜んで面會する事に、なつたのである。



「おう、貞次郎か」

「まことにお久しう御座いました」

「よく参つた」

「四五日前に、此方へ参りましたが、今日は、是非お目にかかりたい、と存じまして、お訪ね申上げました」

「而て、用件は……」

「大失敗をいたしましたして、どうにも始末がつきませんので、此方へ、逃げて参りました」

「ふむ、どういたしたのか」

「加州様へ、御貸金の事から、少々行違ひを生じまして、私が身を隠しませぬと、主人六兵衛の難儀に、なりますので、主人とも相談の上で、此地へ逃げて参りましたので御座います」

「左様か。武士と、町人の區別はあつても、主人を持つものは、時に己を殺して、主家の利益を謀らねばならぬ。そこに主持の苦しい所はあるのぢや」

「イエ、私のは、左様に立派な事では、御座いませぬのです」

「いづれにも致せ、主人の爲めに、日蔭の身となる。その覺悟は、常になければならぬ」

「就ては、暫時の間、御邸へ、置いて戴き度いので御座いますが、御聞き届け下さいませうか」

「よろしい、それは承知いたしました」

「有難う存じます」

胸に一物ある周布は、快く貞次郎を、隠置つてやる事にした。

四五日経つと、周布が、貞次郎を呼んで、

「祇園の一がへ、飲みに行く、一途にまゐれ」

「ハイ、有難う存じます」

「他に連れはないのぢやから、遠慮せずと従いて参れ」

「あなた様、御一人で御座いますか」

「さうぢや」

貞次郎も、少し變だ、とは思つたが、周布の跡から、従いて行く。

祇園では、有名な一力、昔からの賣込んだ名は、まことに強いもので、今も尚ほ第一流の看板を、保つて居る。

藝妓も來れば、舞妓も來る。お世辭のよい仲居が、盃盤の周旋をするのだから、座敷は、實に賑やかであつた。

そのうちに、周布は、大分酔ふたらしい。貞次郎も今日は、遠慮なく遊ぶ。

「些と、お前に、相談がある」

「ハイ」

「眞面目な事ぢやから、女は、しばらく遠慮させよう」

「ハイ、承知いたしました」

貞次郎から、仲居へ耳打をした。潮の退くやうに、女達は、其席を脱して、跡は二人の差向ひになつた。

「旦那様、之れで宜しう御座りますか」

「うむ、もつと近く寄れ」

「ハイ」

「折入つて、頼みの次第がある」

「何ういふ事で、御座いますか」

「近く我藩から、イギリス國へ、行くものがあるのぢや」



「へへー、イギリス國へ……」  
「それについて、金子に差支へて居るゆゑ、お前の働きを以て、主人の六兵衛へ、内談を遂げて、貰ひ度いのぢや」  
「成程」

「一行は五人ほどであるが、金子は五千兩だけ入用なのぢやが、どうか都合はつくまいかな」  
意外の相談に、貞次郎は、一寸答へに行詰まつた。

「お前に、見込みがあるなら、立派に引受けてくれ。もし見込みが立たぬなら、遠慮なく断つてくれ、どうぢや」  
「公儀から、御許しが出たので御座いますか」

「それは、ないのぢや」

「えッ、公儀の御許しなく、密航で御座いますか」

「左様」

「へへー」

「どうぢや、見込みが立たぬか」

秘密を打明けての頼みであるから、一通りの断りは肯くまい。それに自分が、今かくまはれて居る弱身もある。貞次郎は、しばらく思案にくれた。

「無理には言はぬ、見込みのなき事なら、はつきりいふてくれ。若し手違になると、拙者の武士がすたる」

「よろしう御座います。何とかいたさせませう」

「さうか、よく承知してくれた」

「一札は、どなたの御名前に、なりませう」

「江戸屋敷の留守居、村田蔵六の名義にて、一札を入れる。拙者も、連署いたして、よろしい」

五

長門守が、秘密に申付けた洋行に、五千兩といふ大金を、藩の用意金で、融通するといふ事は、如何に村田でも、至難かつたに違ひない。

従つて、周布の手許で、都合をつける事も、村田から見れば、不可能として居たであらう。

併し、周布は、長門守から、秘密を打明けて居られる丈に、此金は、どうしても都合しなければならぬ。既に井

上等は、江戸へ出かけたのであるから、一日も早く、送金の手順をつける必要はあつたのだ。さればといふて、重役

や老臣には、此秘密を、知らせる譯にもならぬから、周布の苦心は、並一と通りの事ではなかつた。

折よく、大黒屋の手代、貞次郎が、飛込んで来たので、トウ／＼之れを、抑へつけてしまつた。

横濱が神奈川に代つて、開港場になつた事情は、その大要を述べてあるから、今此には再説しないが、佐久間象山

の主唱は、幕閣の人々を動かすに、最も力あつた事は、改めていふ迄もないが、いよく開港場として見たら、象山

のいふた通り、横濱の方が、遙に優つて居たので、流石に象山は、偉いものだといふ、評判が高くなつた。

大黒屋六兵衛は、はやくから横濱に眼をつけて、生絲蠶紙の賣込商を始めたが、商機を見る事に敏いのみならず、

多少の膽氣もあつて、商賣は、追々に發展するので、その金力を利用して、種々の仕事に、手をつけはじめた。

日本の陶器を、外人に紹介したのも大黒屋の盡力が、多くあつた事は、可成り有名な事である。

諸藩の先覺者が、横濱へ入込んで来て、夷人の手を経て、新式の武器を需めるやうになつてから、六兵衛は、其方



の仲介もする、事になった。毛利との関係も、それからの事で蒸気船を、英一番館の手から、毛利家へ、賣込む時にも、六兵衛が、仲介をしたのであつた。毛利の方に、金のない時は、六兵衛が、立替へる位の事は、敢て珍らしい事ではなかつた。

『旦那様、貞次郎で御座ります』

障子の外から聲をかけたのは、京阪地方へ、身を隠して居る筈の、手代貞次郎であつたから、これには六兵衛も驚いた。

『オヤ、どうして歸んなすつた』

『少し事情が御座りまして、只今歸りました』

『どういふ事情が、あるか知らないが、加州様の方の事が、まだ何とも極らぬうちに、歸つて来たのでは困るぢやないか』

『その事も御心配のないやうに、すつかり行届かせてありますから、御安心下さいませ』

『さうかい。それならば可いが、今歸つたのでは、少し都合が悪いと、思つて、私も驚いたのだ』

『長州様の方で、御引受け下さる事になりましたから、近いうちに何とか片付ませう』

『へー、それは妙な事になつたね。長州様の方で、御引受け下さるとは、どういふ譯かね』

『實は、斯ういふ次第で御座ります』

貞次郎は、膝を進めて、之れから京都に於て、周布政之助と、相談した事を、一通り述べた。

六

六兵衛は、貞次郎から、話を聞いて、事毎に驚いたのは、幕府の禁制を犯して、イギリスへ密航する、長州藩士に

手傳ひをするのであるから、萬一の場合を考えると、如何にも危険でならなかつた。

『さうすると、お前は、それを引受けて歸つたかね』

『左様で御座ります』

『そりやア危ないぢやないか』

『なアに大丈夫で御座ります。どう間違つた所で、町人の大黒屋六兵衛と、長州様が、心中をする譯はありません。また、御自分丈け免れて、此方ばかりに、罪を被せる事も、出来ませう』

『大きく考へれば、まア其んなものだが、危ない橋を渡るのだから、よく氣を、注げてくれぬと、困る』

『宜しう御座ります』

『而て、その金子は、どれほど入用なかね』

『五千兩あれば、宜しいさうで御座ります』

『證文は、どなたの名前になるのかね』

『櫻田の御本邸に、御留守居を御勤めの村田藏六様、それから周布様も、小幡彦七様も、お名前を出して宜しいとの事で御座ります』

『小幡様といふのは、彼の船の受渡しの時、ちよつと御見えになつた、御方か』

『さやうで御座ります』

此三人が、證文へ、名を列ねる事になれば、貸借の事は、安心が出来る。それから密航の責任も、毛利の方で、遁

れる事は出来まい。さうなれば、何う間違つた所で、大概は大丈夫と、六兵衛は、少し落付く事が出来た。

『それから旦那様、ガールさんの方へも、一應は此方から、橋渡をして置かねばなりませんねが、旦那様から、御話し

下さいませうか、それとも私が、参りませうか』



「それは、お前が、引受けて下さい」  
「宜しう御座います」

「それにして、一度は村田様に、逢つて見度いものだが、その都合は、どういふ事になるかね」

「これから、すぐに江戸へ参りまして、村田様に、御目にかゝりませう」

「さうかい、それでは、左様して貰はう」

二人の相談は、之れで極まつた。貞次郎は、これから江戸へ、乗込んで来た。

聞多等が、非常な苦心をしてゐる裏面には、斯ういふ事があつたのだから、實に面白い。別に苦心をせずとも、麻布の屋敷で、平然して居れば、樂々と、洋行の出来るものを、自分から、苦んで居るのだから、考へて見れば、變なものだ。

村田の事は、前回にも述べた通り、譜代の臣ではないが、その實力がある、爲めに、本邸の留守居を勤めて、ナカナカ勢力もあるやうに、なつて居たのだ。殊に、和蘭の學問が出来る、といふので、人の尊敬も厚かつた。

「ハツ、大黒屋六兵衛の手代、貞次郎と申しますものが、玄關へ見えまして、御目にかゝり度いと、申して居りますが、如何いたして宜しう御座りませうか」

村田の手元へは、すでに周布から、書面が届いて、貞次郎の事は、詳しく判つて居たのだから、

「うむ、よし、これへ、通せ」

「ハツ」

やがて貞次郎は、案内されて来た。

「おう、貞次郎か」  
「へい、まことに御無沙汰をいたしましたして、申譯が御座りません」

「相變らず壯健で、先づ結構ぢや」

「昨日、横濱へ歸りまして、主人と打合せもすみましたので、早速お伺ひいたしました」

「よう参つた。而て、例の一條は、どういふ事に相成つたか」

「主人も、すつかり承知いたしました」

「それは、何よりの事、其方の骨折ぢや」

「就きましては主人が、貴下様に、一應お目にかゝり度いと、申して居りますが、此地へ呼寄せませうか、御都合を伺ひ度う存じます」

「此地へ呼ぶよりは、此方より訪ねる事にいたさう」

「左様で御座いますか。それでは、却つて恐れ入ります」

「イヤ、その方が、都合が良からう」

「それでは、御供をいたませう」

村田は、支度を整へて、横濱へ、貞次郎を案内者として、出かける事になつた。

七

幕府が、開國貿易の條約に調印はして居ても、妄りに外國へ出かける事は、嚴重に取締つて居たのであるから、若し此禁制を犯して、外國へ、密航した事が、たとへ後日になつて發覺しても、重い刑罰の加へられる事は、固より知れた事であつて、之れを援けたものも、同一の罪科たる事は、勿論であるから、一たびは大黒屋六兵衛も、危ないと思ふて躊躇はしたが、何しろ手代の貞次郎が、熱心に説き付けたのと、もう一つは、毛利の重臣が、飽迄も責任を負ふと、いふのだから、六兵衛の心も動いて、終に承知するに至つた。



村田は、貞次郎に案内されて、横濱へ、遣つて来た。其用件は、六兵衛に逢ふて、聞多等の洋行費を、得んが爲めである。都合に由つては、ガールにも逢つて行き度いと、思つて、態々六兵衛を、訪ねる事になつたのである。時候の挨拶も済んで、話は、金の事に及んだ。貞次郎から説かれて、既に承知して居るのだから、その話は、直ぐに運んだ。

「此事は、無理であつたかも知れぬが、外に都合のつけやうもなく、止むを得ず、御頼み致した次第ぢや。就ては、ガールの方へも、然る可く、申込み下さるやう、頼み入る」

村田から、丁寧な挨拶を受けて、六兵衛は、頗る満足した。

「平生から、御引立に預かります、御邸の事御座いますから、私の力の及ぶ限りは、御用を達します、考へては、御座りますが、何分にも、町人の事として、充分の働きも出来ませず、眞に残念に存じます」

「周布も、近く出府の都合に、相成り居れば、いづれ御挨拶に及ぶであらう」

「重ね、御辭にて恐入ります」

二人の話は、之れで済んだ。貞次郎は、六兵衛に向つて、

「それでは、旦那様、金子を御渡し遊ばしては、如何で御座ります」

「おう、さうであつた」

六兵衛は、明日を約して、五千兩を、櫻田の本邸へ、持参する事にした。それで、一切の交渉も済み、酒宴に移つた。

却説、聞多等は、斯うした事情を、少しも知らず、生命がけて村田に、談判する事になつて、本邸へやつて来た。村田は、昨夜、横濱から歸つたばかりで、今朝は、二三の來客に應接して、跡に只だ一人、頻りに考へ込んで居た。

所へ、聞多等が遣つて来て、是非面會したい、といふから、大概は、其事と察して、客間へ通した。聞多を始め、遠藤、野村、山尾、伊藤の五人は、ずらりと列んで、先づ聞多が、

「我等が斯く打揃ふて御訪ねいたしたるは、餘の儀でも御座らぬが、實は、此度、若殿様の御内命にて、イギリス國へ、渡航いたすに就ては、旅費の用意少く、些か苦み居りますが、尊公の御配慮を以て、金三千兩丈、御繰廻し下さるまいか、御迷惑の事とは、萬御察し致すが、是非御承知下され」

と、來意を述べた。俊輔は、自分が、中途から加はつた、事情を打明けて、矢張り金の都合を、頼み込んだ。他の三人も、頻りに迫つて、村田の即答を求めた。村田は、自分と周布が、此事については、大に盡力して居るのであるから、今ま五人に、斯う迫られて見ると、ちと可笑しくもあるが、五人の態度が、何しろ生命がけといふので、眼の色も、變つて居る位だから、村田は、却つて其事情を、打明けぬ方が可いと、思つて、

「よろしい、承知いたしました」

「えッ、御承知下さるとか」

「うむ」

「それは、忝ない」

「是れほどの大事を、潔く引受けられた、足下等の至誠に對しては、藏六も、生命がけぢや、金子の、事は、御引受け申さう」

「御手元の御都合もあらうが、何時頃に、御伺ひいたしましたものか」

「イヤ、此場にて直に、御渡し申さう」

「何ッ、直様御渡し下さるか」

「左様、しばらく御待ち下さい」



村田は、其儘起つて行く。後姿を見送つた、野村が、

「オイ、こりや可怪しいぞ」

といふ。山尾は、

「何が可怪しいか」

と、問返した。

「可怪しいではないか、二百や三百の端金ではなし、三千兩といふ大金、而も、殿様の御用意金を、無断で取出せば、重い處刑になる。これほどの事を、村田が、手軽く承知するのが、可怪しいのぢや」

「成程」

「或は我々に安心させて置いて、重役へ相談に行つたのではあるまいか」

「ふーむ、こりや危ないぞ」

聞多は笑ひながら、

「馬鹿な事をいふな。頼んだから引受けたのぢや。どう間違つた所で、生命一つ差出せば済む、惧々するな」

といふた。俊輔は、之れに合點を打つて、

「井上のいふ通りぢや、萬一の事があつたら、此座敷で、腹を切る迄の事ではないか」

野村と、山尾は、眞赤になつて怒つた。

「何も、拙者は、生命が惜しいといふたのではない。可怪しいから、可怪しい、といふた迄の事ぢや」

遠藤は、此態を見て、

「オイ、詰まらん事を争ふな。此場に及んで、仲間打ちには、不可んよ」

之れて、口争ひは止んだが、五人の顔色は、良くなかつた。

八

其頃の金の價値と、現代の金の價値を比べると、非常な相違がある。現代の一錢銅貨は、湯銭の補足にはなるが、それを一個持つて居たのでは、何の費途にもならぬ。昔の百文は、今の五十錢より、價値があつた。百文持つて居る人が、之れを費ふのに、先づ床屋にゆきて、顔を剃り、髪を結び、それから入浴して、寄席へはいり、歸りがけに一寸した飯屋で一ぱい飲んで、二皿や三皿の肴で飯を食ふて、まだ幾何か残るのであつた。今の一錢では、斯んな事は出来ぬ。されば、十兩から上は、すべて大金と稱して、法律の上でも、軽くは見なかつた。たとへ竊盗でも、十兩以上を盗れば、死刑にされた位である。今では、十萬圓盗つても、辯疏さへ、巧く出来れば、二年か三年の懲役、もう少し上手にやれば、刑の執行猶豫になる。斯ういふ風に、比べて見ると、金の價値の相違は甚だしい。極く早い話が、今から二十年前には、十萬圓から金持、といふ事になつて居たのが、十年前には、五十萬圓持たねば、金持の仲間入りは、出来ぬやうになつて、最近二三年には、百萬圓以上なければ、金持でない事になつて、了つた。

文久の頃の五千兩は、今の三萬圓位に相當するのだから、實に大層な金である。村田の手には、五千兩の用意は、既に出来てあつたのだが、聞多等は、其事情を、少しも知らずに、三千兩の借入れを申込んだのであつた。

しばらくすると、廊下に足音がする。餘程重いものでも、持つて居るやうに、ドシ／＼と、強い響がする。やがて障子を開いて、村田が、はいつて來た。跡から續いて、召使の男が、千兩箱を持つて、ヨタ／＼し乍ら、はいつて來た。

「よし／＼、それへ置けば、よろしい」

と、村田の下知に従ふて、千兩箱をズシン／＼と、重ねた。

「汝へ等は、あちらへ行け。用事があれば手を鳴らす、それ迄は來る事はならぬ」



と、いはれて、

『ハッ』

と引退つた。村田は、膝を向け直して、

『さ、御頼みの金子、御渡し申す』

今重ねてある箱は、五つだ。毛利ほどの大名が、千兩箱へ、端半を入れて置く管がない。而て見れば、五箱あるから五千兩、此方が頼んだのは三千兩だ。どう考へても、五箱では違ふやうに思ふ。

『御依頼申上げたるは三千兩、それは五箱あるやうで御座るが、これは如何なる次第ですか』  
聞多の問ひは道理であるが、村田は、平然した顔で、

『イヤ、これは五千兩で御座る』

『えッ、五千兩で御座るか』

『足下等の御頼みは、三千兩ぢやが、之は五千兩』

『而て、その譯は』

『全體、五人揃ふて、イギリスへ行くに、三千兩あれば可い、といふ勘定は、何を目安に致されたか』

『はッ、それは……』

急所の質問に、一同は、ギューと行詰つた。目安も何も、あつたのではなく、只だ出鱈目に、三千兩位は要るだらう、と思つたから、三千兩貸せ、といふた丈の事で、別に深い理由はなかつたのだ。

『一人に付千兩、五人で五千兩は費かる。三千兩で、御咎めを受くるも、五千兩で、御咎めを受くるも、捨つる生命は、只だ一つぢや。所詮は、足下等の御用に立てる、此生命、さ、改めて御受取りなされ』  
『さては、さういふ御心で、我等の爲めに、御覺悟なされたか』

『就ては、此際に、申上ぐる儀の御座る』

『何事で御座りますか』

『足下等が、此覺悟を以て、イギリスへ行かるゝ事は、やがて、我皇國の御爲め、小さく見ても、毛利三十六萬石の御爲めで御座れば、輕卒の事を爲られてはならぬ。殊に、若殿様の御内命、といふ事は、片時も忘れず、如何なる事のあればとて、輕々しく死を、決するやうの儀は、深く御憤み下され。徒に、潔く死するばかりが、武士では御座らぬ。恥を忍び、垢を呑んで、武士の道を立てる、場合も御座る。藏六は、無事に、足下等の歸朝を、待ち得ぬかも知れぬが、足下等が、無事に歸朝せられるのは、皇國の御爲め、また毛利家の御爲め、と、深く其點に、御注意下さるやう、切に希望いたす次第で、御座る』

飽く迄も落付いて、重々しい口調を以て、五人の輕舉妄動を戒める。此一言には、五人の頭が、自然に下つた。

『段々の御注意は、有難く存じます。此上は、弓矢八幡に誓ふて、輕々しき振舞はいたしませぬ』

『はやく御用意の上、御出立を急ぎませ』

之れから五人は、村田に別れ、馬の脊を借りて、横濱へ向つた。

五人の覺悟も偉いが、之れを戒めて、金を渡した、村田は、猶ほ偉い。此人が、後年の兵部太夫になつた、大村益次郎の事である。惜い哉、明治三年に、京都で、暗殺されて了つたが、今の徴兵令は、此人の草案が基礎になつて居るのだ。



### 横濱出帆の内情

一

村田に別れて、麻布の屋敷へ、引上げた五人は、更に充分の支度を整へて、いよいよ横濱へ、向ふ事になった。其時は、既う午後になつて、少し遅いとは思つたが、斯うなつた上は、一刻も疾く、江戸の地を離れるのが、最も必要なのであるから、兎に角、出發する事にした。

聞多は、此時に、養家の志道へ、離縁を申込んで、井上姓に復へつた。此事について、養家へ、後日の累を及ぼすまい、といふ考へから、離縁の趣意は書かず、只都合に仍つて、といふのであつた。斯うして置かぬと、自分が此件について、嚴罰に處せられる時、又は自殺した後の御咎めが、萬一にも養家に及んで、其始末をつけるにも面倒であるから、何事も、自分の一身丈けて済むやうに、全く養家から、離れて了つたのである。

神奈川から、程ヶ谷へ行く、街道の中央に、山を切り崩して、路を通した所があつて、之を臺と稱す、灣に沿ふ方は、崖に臨んで、掛茶屋が二三軒、その外に、下田屋といふ料理店がある。江戸を出立して、關西へ下るものは、一日の旅程が、大概は神奈川泊りであつた。參勤交代に、上り下りの侍が、神奈川へ着くと、下田屋に押掛けて、楽しく飲んで、騒ぐ事になつて居た。毛利の家來も、それと同じく、下田屋とは、かねて馴染になつて居る。聞多等は、此下田屋へ着いて、横濱へ入込む相談をしよう、といふのであつた。崖に臨んだ、奥の一室、すぐ下に

海を隔て横濱を、一目に見る、極く眺望のよい所である。

その頃には、渡船に乗らねば、横濱へ入込む事は出来なかつた。今では地續きになつて、汽車も、電車も、自由に通つて居るし、人の往來も、出来るやうになつて居るが、未だ文久の昔には、大きな入江を隔て、纔に渡船の便に由つて、連絡をつけて居たのである。その入江を、後に平沼灣と稱へて居たが、これも今では、全部埋立てられて、立派な市街地になつてしまつた。併し、横濱と神奈川の連絡を、附ける爲めに、入江を横斷して、一條の道路をつくつたのは、易占の方で有名な、高島嘉右衛門と謂ふ、富豪であつた。されば其道筋を、高島町と名付けて、十町餘りも在る。高島は、豪放な氣象を、有つた人で、此埋立た道路を、無償で、政府へ献納した。

此道路の聯絡が出来て、神奈川と横濱の間も、至極便利になつたが、それまでは何うしても、程ヶ谷の方から、山越えをしなければ、陸行は不能なかつた。

程ヶ谷から廻つても、渡船で行くとしても、横濱へはいるには、關門の番人に、一應の調べを、受ける事になつて居た。たとへ旗下でも、大名の重役でも、幕府の許可のない時は、大小を帶して、横濱へ、はいる事は、一切禁ぜられてあつた。

それほどに、警戒の面倒になつて、居る所へ、五人が揃つて、はいり込まう、とするのであるから、うまくやらぬと失敗から、之れについては、伊藤にも、充分の覺悟と工夫が、あつたのだ。

『オイ、これから、暗くなるのを待つて、横濱へ、はいるのぢやから、萬事は、拙者の指揮通りに、従ふ事にしてくれ』

『宜しい。何事も馴れて居る、貴様の云ふ通りぢや』

『第一に、此大小は、帶してはいれぬ』

『えッ、大小は不可のか』



「寄留地に、夷人が居るから、それで大小は許されぬのぢや」

「無刀で行くのか」

「關門の検査がやかましいから、大小は駄目ぢやが、武士の魂として、小刀丈けを、懷裡に忍ばせて行かう」

「さうか、大丈夫かな」

「關門の検査といふた所で、眼に見えさへしなければ、それで可いのぢや。人相の悪い武士が、ずらりと五人も、揃つて居たら、大抵は凹垂れるさ。ハツハ、、、」

「萬事は、宜しく頼む」

「それから猶う一つ、言ふて置く事がある。他でもないが、イギリス一番館へ行つてからは、どうせ夷人を對手の事ぢやに依つて、舟楫に觸れる事もあらうが、何處までも堪へて、平生の氣を出しては不可。これ丈けは、御互に慎まぬと、折角の企てが破れるから、充分に耐忍してくれ」

「解つた。心配するな」

「夷人は、他に逢ふた時、手を握るのを、禮として居るから、貴様等も、夷人に逢ふたら、先づ手を握るのぢや。よいか、それは忘れぬやうにしてくれ」

「それア、弱つたな」

「何故、弱るか」

「何故かつて、夷人と手を握るなどは、怪しからん事ぢや」

「しかし、イギリスへ行けば、對手がすべて、夷人ぢやから、どうしても、手を握らねばならぬぞ」

「さうか」

「郷に入つては、郷に従へ、といふ諺もある」

「宜しい、生命がけぢや。何でもやつて見るぞ」

「夷人と、握手する事が、生命がけの一つだから、實に可笑なものだ。斯ういふ思想を、有つて居た人が、之れから洋行して、何んな風に變つて行くか、それを見る丈けでも、興味のある事だ。」

一一

日は、全く暮れて、唯さへ寂しい宿場は、一段と寂しさを増すばかりであつたが、その寂しいのは却つて五人の爲めには、此上もない好都合なので、伊藤は、それが爲めに、故意と酒を飲んで、時刻を過したのであつた。

渡船に乗つて、横濱へ着いたのは、夜の九時頃、今の税關の在る所が、船の發着所に、なつて居たのだ。税關の事は、運上役所といふて、海關税の事を、運上と稱へて居た。

關門の検査も、容易に済んで、五人は、暗い道を、歩き難さうに、遣つて來る。開港して間もない時であるから、未だ道路らしい道路はなく、田や畑を埋めて、僅に一條の道を通じてある位のもので、人家の如きも、彼處に一軒、此處に二軒と、いつたやうに、甚だ不整備なものであつた。それでも、市街の中心になつて居る所は、軒を列ねた人家の賑かさは、新開地の氣分の、全く現はれて居らぬ譯でも、なかつた。しかし、寄留地の區域にはいれば、すべて、夷人館ばかりで、まだ建物はぬ上に、日本町へ出る迄の連続さへ、なかつたのである。

「向ふに見える、彼の赤い門が、イギリスの一番館ぢや」

「は、ア、彼れが、左様か」

「門構へは、恰で大名屋敷のやうぢやが」

「住居は矢張り、夷人屋敷ぢやらう」



『それは、無論の事ぢや』

話しながら来るうちに、一番館の門前へ、着いた。

門番へ、伊藤の名で、ガールに面會を申込んだ。しばらく、待たせられて居るうちに、門番が、出て来て、

『此方へ』

と、いつて案内する。門をはいつて、玄關へかゝり、二階へ通された。薄暗い階段を昇つて、廣い座敷へ通された。薄暗い所から、急に明るい所へ出たので、眼がグラ／＼とした。殊に、光りの強い、燈火に驚いて、額の所へ手をかさしながら、一同が、ぢツと見ると、大きなランプが、座敷の天井から、下つて居たが、ランプの事は、まだ知らなかつたので、

『ヤツ、伊藤、あれは何だ』

『うむ、あれはランプと、いふものだ』

伊藤は、前に二三度来て、知つて居たのだから、大に誇り顔に、説明した。

『馬鹿々々しいほど明るいが、全體、何といふ油かな』

『油の名は知らぬが、明るい事は非常なものだ』

『オイ、すつかりギヤマンで造つてあるぞ、贅澤なものぢやな』

今のやうに、電燈も、瓦斯もなく、普通のランプを、使つて居たのに、それを見てさへ、此驚きをしたものだ。

今から十年ほど前の事であつた。豊前の小倉で、或宿屋に泊つて居た時、七十餘りの老人が、下女を呼んで、天井

に釣してある、電燈を指して、

『此位の明るさを、二つばかり買つて来てくれ』

と、いつて下女を困らせて居た事がある。文久の昔、ランプを見て驚いたのも無理がない。

やがて、ガールが、出て来た。ピヤ樽へ、手足をつけたやうな體で、顔は、綺麗な半分かくれて居るが、ニコニコ笑ひながら、はいつて来た時の愛嬌は、實に不思議なほどであつた。

『おう、伊藤さん』

『これは、久しう御座つた』

『御機嫌よろしい』

ガールは、伊藤の手を握つたが、日本語も、存外うまかつた。伊藤から紹介されて、四人も交々、手を握つた。互に顔を見合せながら、密と其手を、袴で拭いた。

『伊藤さん、用事ありますか』

『おたのみありまして来ました』

『何、ありますか』

『イギリスへ、行きますこと相談あります』

『イギリスへ、行きますか』

『左様』

『皆さん、ゆきますか』

『左様』

『まことに宜しい事あります。イギリスゆきます、世界の事解ります。夷人さん大好きになります、アツハ、、、』

洋行すれば伶俐になつて、夷人が好きになるとは、ガールも、ナカ／＼うまい事をいふ。

『船に乗る、お世話を願ひませんか』

『よろしい。私、引受けませう』



「ありがたう。よろしく願ひます」

「徳川政府の書付ありますか」

「ありません」

「えッ、徳川政府の書付ありません」

「左様」

「その書付ありませんと、船乗る事できません」

「徳川政府へ願ひますと、ゆるされませんから、秘密々々ゆきます」

「ノー、できません」

「入費は、五千八百兩持つて居ります。之れを残らず渡しますから、是非船の世話のみます」

「ノー、できません」

これまでは、伊藤が、一人で掛合つて居たけれど、ガールは、容易に承知しなかつた。

三二

幕府の禁令のうちで、最も厳しかつたのが、海外渡航と、密貿易であつた。開國貿易で條約に調印はしても、海外の渡航は、容易に許さぬ事に、なつて居たのだから、之れに對する取締も、却々に嚴重であつた。その禁制を破つて密航をしようといふのであるから、ガールが一通りの掛合で、諾といふ筈はない。しかし、幕府の許可を得て、公然、出かける場合には、ガール杯へ、哀願する必要はないのだ。厭で、堪まらぬ、夷人の前に、斯うして叩頭百拜するものも、つまりは密航する爲めであつて、ガールが、何うしても背かぬ、とあれば、此上に頭を下げる、氣はなかつたのだ。

「何うしても不可と、いふのですか」

「此事知れますと、私店サランバンあります」

「そんな事は、ありません。私等は、腹を切りますから、それで済みます」

「皆さん、腹を切ります事、皆さんの自由あります。私店サランバン困ります」

之れで、話は打ち切りだ。此上に、頼みやうはないから、其處で、一同は、引退る事になつた。ガールは、一同を送り出しながら、玄關脇の一室にはいつて、猶ほ一同の態度を見てゐた。

一同は、玄關を離れて、車寄の小さい、花園を廻つて、表門までは十間餘りある。芝生の上に坐つた。井上は、稍昂奮して居るが、伊藤は、存外に冷靜であつた。其他の三人は、只だ黙々として居た。

「オイ、伊藤」

「何か」

「どうする覺悟か」

「さ、どうするといふて、此上に何の方法もない」

「此上の方法がない、として、それから何うする覺悟か、といふのぢや」

「どうするか、といふて、別に之といふ名策もない」

「それは、困つたな」

二人の押問答を、聞いて居た、遠藤が、

「己れは、斯う思ふ。村田の心配で、此大金を、持つて来て、今更にガールが承知してくれぬから、歸つて来た、といふやうな事は、どうしても己れにはいへぬ。寧ろ武士らしく、此處で切腹して了はうでは、ないか」

「何ッ、切腹する」



「さうぢや、切腹してはう。其覺悟で、始めた事ぢや。もう致し方がないから、深く切腹しよう」  
野村と、山尾も、遠藤の説に賛成したから、二人も、終に同意した。

「しかし、此處で切腹したら、ガールが、迷惑するだらう」

「なアに、迷惑位させてやつても可からう。彼れほど頼んでも、背かぬ毛唐人に、義理立てが要るものか」

「それも、左様ぢや」

「我々が、此處で切腹した、といふ事が、若殿様に聞えたら、我々の苦衷も、御察し下さらう」

「大きに道理ぢや」

いよいよ五人は、此處で切腹する事に極まつた。昔の武士は、すぐに腹を切るから、面白い。また其時代には、どんな事でも切腹すれば、大抵は解決が、つくやうになつて居た。それだから切腹についての奇談は、いろいろ残つて居る。東北の或大名の家來が、殿様の前で、放屁をしたのに恐縮して、切腹した。

「君公の御前に於て、放屁をするやうな事では、今後の御奉公も覺束ない。依つて切腹して、御詫をする」

と、いふのであつた。屁一つで、腹を切つたのは、昔の事、今では、電車や汽車の中で、切腹しても可い位な、失禮な奴は、澤山にあるが、まだ切腹した事は、聞かない。

芝生の上に、五人が、ズラリと列んで、いよいよ切腹の支度に、取掛つた。ガールは、暗い室のうちから、遙に之れを見て、驚いた。五人が、兩肌を抜いて、刀を取直したから、もう堪まらない、ガールは、思はず叫んだ。

「よろしい。承知いたします。腹切ります事、いけません」

窓から、ヒラリと飛出して、五人の前へ、かけつけた。今腹へ、刀を宛てた刹那に、斯ういはれたので、五人も、

「はッ」

と思つた。

ガールは、碧い眼玉を、グリ／＼させながら、兩手を揮つて居る。

「もう宜しい、腹切る事いけません」

井上は、刀を持つた儘で、

「何故、止めます」

「船へ乗る事、承知いたしました。イギリスへ行く事、よろしい」

「それでは、承知してくれますか」

「さやう。承知いたします」

「さうか、それなら切腹は止める」

ガールは、熟々一同の舉動を見て、

「死にます覺悟、よく解りました。私、大に盡力いたします」

實は、死に度くないのだが、切迫つまつて、據らなく、死ぬ氣になつたのだ。ガールが承知してくれたら、強て死ぬに及ばぬ。伊藤は、肌を入れながら笑つた。

「うまく行つたな」

四人も首肯いて、

「ふゝむ」

と、笑を漏らした。

「あちらで相談いたします。その腹切ります器械、こちらへ、あづかります」

腹を切る器械とは、ガールも、うまい事をいふたものだ。五人は、聲を出して笑つた。

(ガールには、大黒屋から、豫め話込んで置いたが、五人に、どれほどの決心があるか、それを知る爲に、ガール



は、一應断つたのである。

## 四

ガールに連れられて、五人は、元の二階へ、歸つて来て、それから復た相談を始めた。幸ひ夜明に、上海へ向ふ船があるのだ、それへ一同を乗せて、兎に角、上海まで送り届け、それから先きは、矢張り上海にも、英一番館と同じやうに、ジャーヂンマヂソンの支店があるから、その店の支配人で、ケセウイツキといふ人が、詰めて居るので、その人に、萬事を頼む、といふ事になつて、今夜の十二時過ぎに、乗込む事に定めた。

五人からは、例の五千八百兩を、ガールの前へ出したので、ガールは、それを改めて受取り、五千兩を、テーブルの曳出へ、無造作に投げ込み、跡の八百兩を、五人の前へ出して、

『これだけ、持つてゆく事、よろしい』

といふた。途中の費用にしろ、といふ意味だらうが、しかし、此に怪しむ可きは、テーブルの曳出へ、投げ込んだ五千兩である。ガールは、何か解らぬが、横文字で書いた紙片を、伊藤に渡して、

『ロンドン着きましたら、此書付けを出しますよろしい。五千弗すぐ渡します』

伊藤は、書付を受取つて見たが、何が何だか、少しも解らない。預り證でもあらうけれど、預つた事なし、と書いてあつても、讀めないのだから困つた。伊藤から受取つて、他の四人も見したが、矢張り解らないから、互に顔を見合せて居るばかりだ。伊藤は、ガールに向つて、

『此書付を、持つてゆけばよろしいのですか』

『左様、それ持つて行きます。金渡しますこと、大丈夫あります』

『ははア、さうですか、今其箱へ入れた五千兩は、私等と一しよに、船で送るのでですか』

『否、此方で費ひます』

『えッ、此方で費ふのですか』

『左様』

ガールは、平然して居るが、伊藤等には、いよく解らなくなつて来た。金は、此方で費つて了ふが、先方へ行けば、その金を渡してくれる、といふのだから、解らなくなる。併し、今は、そんな事を、彼是れ争ふて居る場合でない。解つたやうな顔をして、一同は、黙つて了つた。

『日本人、イギリスへ、行く事むづかしい。皆さん、ポルチユガルの人、よろしいか』

『ポルチユガルの人に、なりますか』

『左様』

『ポルチユガルの人に、なりますこと、よく解りましたか、それは那邊の國ありますか』

ガールは、少し考へて居て、

『おう。日本の人いひます。ポルトガルあります』

『うむ、さうですか、ポルトガルなら、よく知つて居ります』

『解りましたか』

『解りました』

自分等は、葡萄牙人に、なつて行くのだ、といふ事が解つた。伊藤は、ポテートと云ふ名をつけられて、その他のものも、それ／＼に名をつけられた。ポテートは、面白いぢやないか、恰て芋のやうだ。

ポテートが、大きな風呂敷包みを、背負て来た。そのうちには、洋服の古着が澤山に、はいつて居た。日本人の體に合ふやうな、洋服は何處にもない。日本人の洋服屋がなかつたので、西洋人の古着を、集めて来たのであつた。



その頃には、洋服とはいはないで、戎服といふて居たのだ。ズボンを、ダンプクロといふた位で、その知識は、丸でなかつたのである。之れを着なければ、ならぬ、となつて、皆な尻込みをはじめた。

「オイ、井上」

「なんだ」

「はやく着たら、どうぢや」

「まア、貴様から、先に着ろ」

「お前の方が、年も老つて居るし、身分も上級だ。先きに着るが、可いぢやないか」

「斯んな場合に、年や身分を、いふには及ばぬ。貴様から、先きに着て見ろ」

いくら争つても結果がつかぬので、一同揃つて着よう、となつたが、負けぬ氣の井上は、眞ッ先に、濼い顔をしながら、ズボンをはきかけた。ガールは、之れを見て居て、

「ズボンちがひます。ボタンうしろいけません」

井上は、ズボンを、反對にはきかけたのであつた。チョツキをきて、上衣をきずに、すまして居るものもあり、ネクタイをさかささに、つけるものもあつた。實に可笑しい事ばかりで、靴を、穿いて見ると、大きな足にはいた古いのであるから、まるでズボ／＼だ。

「オイ／＼、之れは變だぞ、斯う緩くては、驅ける事が出来まい」

「驅ける時は、脱いでゆくのだらう」

「脱いだのを、何うする」

「此處へ入れてゆくのだらう」

上衣のポケットを、靴の入れる穴と心得たのは、如何にも、うまく考へたものだ。ガールは、此様子を見て、腹を

抱へて、笑つて居た。五人も、互の洋服振りの可怪しさに、失笑を禁じ得なかつた。

五

洋服に馴れぬ人が、稀に洋服を着た姿は、まことに可笑しいものであるが、殊に洋服が一般に行はれて居らぬ時代に、チョツキと、上衣の區別さへ、知らぬ人の、體格に、寸法の合はぬ洋服を、下手に着た姿は、特別に可笑しなものであつたらう。

五人が、互に苦笑しながら、椅子に依つた、容體の可笑しさには、ガールも、笑ひを忍んで、ぢツと見て居る。

「何となく、夷國へ行つたやうな、氣がするな」

「もう、ロンドンといふ所へ、着いたやうな氣になつたから、妙なものぢや。ハツハ、、、」

始め洋服を、着る時の思ひに比べると、着てから後の心持は、さまざまに變てもなかつた。何時の間にか、ガールは井上の背後へ廻つて、チョン髷を缺て、チョキンと斬つて了つた。髷を斬つたから、残つた髪の毛が、顔へバラリと下つたので、井上は、思はず飛上つて、

「やツ、これは……」

と叫んだ。ガールは、ニヤ／＼笑ひながら、

「これ、いけません。ポルチユガルの人、これ、ありません」

成程、それに違ひない。葡萄牙人に、チョン髷は、ない筈だから、いはれずとも斬るべきが、當然だ。けれども、何となく残念な氣もする。假し斬るとしても、一應は、何とかいふ可き筈であるのに、ガールが、黙つて斬つて了つたのが、井上には、不満であつた。怨めしさうに頭を抑へながら、ガールの手に在る、髷を見て居ると、ガールは、

「これ、捨てます」



と、いつて、窓から外へ投げようとした。井上は、慌て、両手を上げた。

『それを下さい、それを、それを……』

ガールの手から、鬘を受取つて、すぐ紙に包んだ。外のものも各々に、鬘を斬つたが、皆紙に包んで、大切さうに衣袋へ入れた。残つた髪を、互に斬り合つたが、恰て猿の頭のやうになつた。

『これから行きます。運上場の役人に知られますと、一番に困ります。私役人と話いたしますうちに、皆さん船に乗るよろしい。私、皆さんへ、何かひまな時、皆さんイギリス語、こたへますこと、よろしいか』

サア困つた。税関の役人と、ガールが、何か話をしながら、暗い所をゆく一同へ、何かいふから返事をしろといふのだが、イギリスの語は、一つも知らないから、それに答へのしやうがない。

『ガールさん』

『何があります』

『イギリス語、知りません』

『出鱈目よろしい』

『多ツ、出鱈目よろしいですか』

『左様……』

『出鱈目の英語で宜しい、とはいふのだが、本當にも、出鱈目にも、少しも見當がつかぬ。それには一同も弱つた。』

『オイ、どうする』

『さア、どうしたら可いか』

『出鱈目のイギリス語、こりや伊藤の役目ぢや』

『オイ、冗談ぢやないぜ、己れが、ソナナ事知るか』

『何でも可いから、チー／＼パー／＼いへばよいのぢやらう』

『スワルトバートル、ツブスタアンデルか、アツハ、……』

『それぢや、それが可い』

船の方から、人が来て、もう支度が出来た、といふので、一同は、ガールに連れられて、一番館を出かけた。古い帽子を、貰つて冠つたが、大きな帽子で、耳まではいる位だ。大きな靴を、ツル／＼曳摺りながら、漸く海岸まで、遣つて来た。

俗に、イギリス波止場と、唱へて居る。今の税関波止場であるが、海の中に、ズツと築出してある、長い堤の入口に、交番所が在つて、役人が出張して居たのは、脱税を取締る爲めであつた。ガールは、役人と馴染になつて居るから、存外に寛大な取扱ひであつた。ガールは、遠慮なく交番所へはいつて、役人と何か頻りに、話込んで居る。一同は可成く海の方を向いて、顔を見せないやうにして居るが、何となく危ないやうにも思はれて、ビク／＼して居る。ガールが、何か分らぬ事を、パー／＼いふて居るから、

『オイ／＼、伊藤、出鱈目を始めるのぢや』

『己ればかりに、いはせずと、貴様も、一途にやれ』

『よし、心得た』

伊藤は、聲を張上げて、

『スワルトバートル』

を繰返へす。外のものも之れに和して、一齊に怒鳴つた。何だか解らないが、その調子は、ナカ／＼に巧い、靴を脱いで、ポケットへ入れると、一散に駈出した。



六

防波堤の陰に、端舟が、待つて居た。一同は、息も喘々飛乗つた。後れてかけつけた、ガールも、つゞいて飛込んだ。船夫は二人で、力限りに、櫓を押した。彼は五六丁も出た時、一同は、ホツと息をついて、互に顔を見合せた。

『どうぢや。ずるぶん馬鹿々々しいが、苦しかつたのう』

『腹を切る方が、却つて樂かも知れんぞ』

『大きに左様ぢや』

ガールは、伊藤の肩を叩いて、

『伊藤さん、イギリス語、上手あります、ハツハ、、、』

伊藤も、詮方なしの笑を漏らした。

上海通ひの帆前船、僅に三百六十トンの小さい船で、荷物を専門にして居る。その頃には、客船は、絶対に無かつた。船長は、矢張りイギリス人で、少しも日本語の解らない、甚だ無愛想な奴で、乗組員の水夫も、只ツた十名餘りいづれも日本語の解らぬ、變な奴ばかりであつた。ガールが、よく説明してくれたから、割合に取扱は良かったがこれから先き、斯んな奴と一途に、幾日かの海上生活を、共にするのと思へば、心細い氣も爲るのであつた。

『私、歸ります』

と、ガールにはかれて、今更に別れるのを、辛いやうな氣がしてならぬが、どうも仕方がない。ガールは、一同に別れて、前の端舟に乗つた。暗の中に、端舟を見送つた一同は、思はずホツと、溜息を吐いた。

『夷人といふものは、如何にも親切なものぢや』

『よく人の世話をするのう』

『それにしても、此船の夷人は、誰一人として、日本語の解せる奴は、ないぞ』

『うむ、其様らしいな』

『上海まで、五六日は費かるのぢやらうが、その間、此奴等と晩合は、恐れ入る』

『夷人は、無器用と見えて、彼の位の歳になつても、日本語が解らぬのぢやな』

此奇抜な一言には、思はずドツと笑ひ轉げた。

ヂヤン、ヂヤン、鐘の音が爲る。それは出帆のしらせであるが、一同には解らない。

『ヂヤン』

船長が、大きな聲で、怒鳴つて居る。日本人の事を、ヂヤパーニスと謂ふが、それを節約して、ヂヤニーと呼ぶのは幾分か輕蔑の意も含まれて居るのだ。けれども、呼ばれて居るものは、何の事か解らないのだから、實に面白い。そのうちに、船長は、ツカ、と、一同の前に来る。跡から水夫が、二人ついて來た。何か解らぬ事を、パア、いふて居たか、と思ふと、突然、伊藤の耳を引張つた。井上も、山尾も、遠藤も、野村も、皆な耳を引張られた。脊の高い奴が、力まかせに引張るので、痛い、耳が散切れさうだ。痛いから引張られる通りに動く。體の向きが變ると、手から耳を放した。

頬に向ふ指さすのは、一同の行く可き方向を示すのであつた。

『なんだ。あちらへ行けといふのぢや』

『左様か、それなら左様といへば可いに、耳を引張るとは、怪しからぬ』

『左様いふても解らぬから、それで耳を、引張つたのぢやらう』

『これから始終、斯うされるのかな』

『左様ぢやらうが、ロンドンへ着いた時分に、耳が無くなるぞ、ハツハ、、、』



船艙から一同は、船の中へはいる。楷子を下りると、薄暗くて厭な気がする。水夫が跡先に一人づつ附いて、やがて船の底かとも覺しき所へ来た。ガチャンと音がして、ギーと扉が開いた。また耳を引張るから、振拂はうとするうちに、その室へ押込まれて了つてガチャンと締りをしたので、之れには一同が驚いた。

『オイ、どうなるのぢや。入口に居るものは、誰でも押して見ろ』

遠藤と、野村が、力まかせに押すけれど、扉は、堅く鎖されて、ガタリともせぬ。

『どうしても、開かぬぞ』

『何だ、開かぬと』

『うむ』

『しまつた、こりやア、やられたぞ』

『やられたとは、何ぢや』

『どうも、五千兩の一件が解らなかつたが、こりやア此一室で、乾殺されるのかも知れんぞ』

『えッ、乾殺されるのぢや』

『うむ』

『こりやア驚いた。怪しからん事を爲る毛唐人奴、もう勘辨ならん』

『いくら威張つても、此中ではしやうがない。まア斷念ろ』

本氣でいふのか、それとも戯言でいふのか、勝手な事をいふて、憤慨して居たが、いつか疲勞が出て、五人ながら、ウトウトと眠入つて了つた。

横濱より倫敦まで

此船は、名をキロセツトといふて、小さい帆船船であるから、荷物を思ひ通りに積んだら、人を乗せる餘裕はなく假し積荷が少いにしても、客室の設けはないのだから、水夫の如きも、積荷の間に、ゴロリと横たはつて、疲れを休める外はないのだ、船長丈の室は、甲板に設けてあるが、それは、船長が獨占して、他のものは、寄せ付けない。五人の押込まれた一室は、船の下層で、大切な荷物があれば、使用ことになつて居るが、大概の場合は、空けてあるのだ。何ういふ理由で、五人を、此室へ押込んだのか、言語が不通の爲めに、五人は、悪く解釋して了つたが、實は船長の親切からであつた。相州の浦賀には、豫て船番所が設けてあつて、江戸灣へ、出入の船舶に對しては、嚴重の檢閲を、爲る事になつて居るから、萬一の場合を考へて、船長は、五人を匿したのであつた。

横濱を出てから、風の都合で、船足は、存外に速かつた。船番所の檢閲を、受けた時は、既う夜は、全く明けて、輝々した太陽の光線は、波に反射して、眩しい位であつた。

五人は、ぐツすり眠入つて、まだ眼が覺めぬ。ガタ／＼足音が、烈しく聞えたので、漸く眼を覺ました刹那に、ガチャンと音がして、扉が開いたから、五人は起き直つて、身構へをすると、一番に前の方に居た、井上が、また耳を引張られた。續いて他のものも、同じやうに其室から、引出された。二人の水夫に、背後から逐立てられながら、梯子



を登ると、一時に明るい、甲板の上に出た。何の爲に、連れ出されたのか、それは解らないが、水夫は、急ぎ足に、船長の居る方へ、行つて了つた。

『オイ、馬鹿に明るいぢやないか』

『暗い所から、一時に明るい所へ、引ツ張り出されたので、眼が眩暈するぞ』

『全體、此處は、何處だらう』

『まだ上海ぢやあるまい』

『ハッハ、、、馬鹿な事をいふな。一と眠入りしたばかりぢやないか』

『何だか、見覚えのある所だぞ』

四方を、頻りに眺めて居たが、伊藤は、思はず笑を漏して、

『解つた。此處は未だ相州の沖ぢや』

といふた。井上も、同時に合槌をうつて、

『左様々々、彼れは、安房の鋸山ぢや』

遙に三崎の海岸を見て、漸く船番所の事を、思ひ出したのが、伊藤であつた。

『暗い部屋へ入れられたのは、船番所の検閲を、遁れる爲めぢやツた。つまり、我々の利益を思つてくれたのを、言語の解らぬ所から、彼のやうな邪推をしたのぢや』

『左様か。まことに相濟まぬ事であつた』

前の水夫が、急ぎ足で来るから、今度は、此方から進んでゆく。耳を引張られるのが、如何にも辛いから、何の用事か解らないが、水夫の前に、五人が、ズラリと列んで、軽く黙禮をした。

水夫は、ニヤ／＼笑ひながら、手眞似で、五人を連れて、甲板に取付けてある、狭い一室へ入れた。板でつくつた

細長い、机のやうなものがあつて、腰掛が列んである。五人は、腰を下した。水夫は、それを見届けて、急いで出て行つた。

『オイ、何だらう』

『何だか、さつぱり解らん』

『何か調べられるのかな』

『そんな、事はなからう』

『然らば、何だらうかな』

食堂といふほどのものではなく、船長が食事をしたり、水夫が、代る／＼休んだりする所であつた。しばらくすると、水夫が、パンとスープを、運んで来て、各自の前へ、之れを列べて出てゆく。

『は、ア、之れが夷人の食事だな』

『左様だらう』

『この汁のやうなものは、何だらう』

『つまり、我國の味噌汁の如きものぢやらう』

『何しろ、臭い』

伊藤は、指に付けて、一寸嘗めて見たが、

『駄目々々、これは到底不可が、此フワ／＼したものは、何か』

『何ぢやらう』

パンを、少し摘んで、伊藤は、口に入れた。

『うむ、之れは食へるぞ。甘くも辛くもないが、之れは却つて淡泊して居て、宜しい』



『臭くはないか』  
 『少しは夷人の匂ひがする』  
 『それは、困つたな』  
 『まア、食ふて見るが可い』  
 そのうちに、ピフテキが出たけれど、誰一人として、手を出すものがない。井上が、伊藤に欺されて、一口やつて見て、吐出すやら含嗽をするやら、大騒ぎをやつて笑はれる。こんな事をして、日を送るうちに、何時か洋食好きになつたのだから、實に可笑しなものだ。

一一

上海へ着いたのが、横濱から四日目であつた。此處にも、チャーチンマチソンの支店が在つて、ケセウイツキといふ人が、支配人をして居た。ガールからの紹介状を見たので、能く世話をしてくれたが、陸上の宿泊は許さなかつた。密航である、といふのと、もう一つは、日本人であるから、といふ爲めであつた。自分ばかりが、偉く思つて居ても、外人の方では、未開の人民として、扱つて居たのだ。假し密航者にもせよ、此處まで來たら、上陸させても可い筈であるのに、それを許さぬとは、怪しからぬ事だが、そんな理窟をいふ權利のない五人は、何でも其命令の通りにして居る外なかつた。陸上の宿泊は許さないが、町見物は許してくれたから、夜になると、一同は上陸して、何處といふ事なく、足にまかせて見物して歩いた。晝は不可といはれたから、夜の見物にしたのである。

船が着いた時に、先づ驚いたのは、港内に碇泊して居る、船舶の多い事であつた。さかんに大きな船が出入して、貨物の積卸や、船夫の活動振を見て、坐るに貿易の大切なる事を悟つた。今迄に想像して居たのとは、外人の様子も違つて、一艦に碇泊する事の誤れるを、自覺したのであつた。また、市街の見物に依つて、居留地の状況を、知つ

て見ると、鎖國攘夷の怪しからぬ事も解つた。イギリス行の船の都合で、四五日の間、ゆつくり見物が出來たので、五人の頭腦は、大分變つて來た。百聞は一見に如かずで、見學は、人に有益なものである。今日も見物して、船へ歸つて來た。五人は、甲板の一隅に、足を投出して、疲れを休めながら、しばらくは雑談に耽るのであつた。

『オイ、伊藤』  
 と、井上は、思ひ出したやうに、伊藤を呼びかけた。伊藤は、野村と、何か頻に密語して居たが、  
 『何ぢや』  
 『己れは、最早イギリスへ、行く事は止めるぞ』  
 『何故か』  
 『馬鹿らしいから止める』  
 之れを聞いて、伊藤は、笑つて居るが、外のものは驚いた。井上の我儘は、今、はじまつた事ではないが、これは又、餘りの事と思つて、  
 『オイ、元談ぢやないぞ。日本を離れたばかりで、すぐ歸るなんて、何といふ事だ』  
 遠藤や野村も、頻りに井上を責る。伊藤は、一同を制して、  
 『まア待て、井上の我儘は、何時も此通りぢやが、併し、之には相當の理窟もあらうから、一應は、それを聞いて見ようぢやないか』  
 此一言で、外のものは黙まつた。伊藤は、更に井上に向つて、  
 『お前の考へは何ういふのか、それを話したら可からう。斯うして五人揃つて居る以上、獨り定めは可くない』  
 『よし、それでは、己れの考へをいほう』



井上が、膝を進めると、一同も眞面目になつた。

「己れは、此處へ来た丈で、もう世界の事は、大概解つたのぢや。日本の對岸の上海ですら、此盛況ぢやから、イギリスや、フランスの本國は、何の位のものだといふ想像はついた。此以上は、見るに及ばぬ。之れから引返して先づ君公に、此状況を申上げ、從來の方針を更めて、開國を進むやうに、藩論を定めるのが第一ぢや。己れは、斯う考へたから、引返さうといふのぢやが、どうだ、己れの考へが、間違つて居るか」

流石に井上は、上海を見たばかりで、世界の大勢を覺つたのである。伊藤は、之れを聞いて、

「成程、それは道理のやうに思ふ。しかし、斯ういふ事も、考へて見なければならぬ。我々は、君公の内命に依つてイギリスへ行くのであるから、君命も重んじなければならぬ。上海を見て感心しても、イギリスへ行つて見たらまた何ういふ考へに、なるかも知らぬ。まだ日本の門口を出たばかりで、すぐ引返しては、人の思惑も何うあらうか。さういふ事も、考へなければならぬ。まア兎に角、イギリスまでは、行く事にしよう。それからの考へて、すぐ引返しても可からう」

先から先を考へた、伊藤の意見には、外の三人も同意であつた。

「さうか。それでは、行く事にするか」

と、井上も、折れて出た。

所へ、ケセウイツキから迎ひが来て、すぐ来てくれ、といふので、一同は、その使ひに連れられて、會社へやつて来た。立派に食卓を飾つて、御馳走の支度がしてあつた。

三

上海へ着いてから、ケセウイツキとは、未だ落付いて、談話を交たことがない。ガールの紹介狀によつて、五人の

身の上の事は、略ぼ判明つて居るけれど、洋行の目的については、何の爲めといふ事が、よく解らないので、ケセウイツキは、それを聞き度い爲めに、夜食の馳走を兼ねて、一同を呼んだのであつた。

船の中で、スープやピフテキを味ふて、幾分か、洋食の事も、解つたつもりで居たが、今正式の御馳走になつて見ると、食へないものが多い。けれども、食はないでは悪からうと思つて、各自が無理に食ふのであるから、其迷惑さは一通りでない。

「イギリス行きます、何、勉強しますか」

英國行きの目的を尋ねるのであるが、よく解らないので、各自に顔を見合せて、その答へをしないから、ケセウイツキは、頻りに同じ言を繰返したので、やうやく質問の趣意は解つたが、何と答へて可いか、頗る當惑の體であつた。

五人は、密々と、耳語いて居たが、兎に角、一時を胡魔化せば、それで可いのであるから、別に本來の目的や、現在の考へなどを、言ふ必要はない、といふ事になつて、その答辯は、遠藤が爲る、といふのであつた。

遠藤は、曾て函館に居た事があつて、その時に、耶穌教の宣教師に交際して、英語を教へられた事がある。單語を少しばかり知つて居たので、何處かで使つて見たかつたのだが、今迄堪へて居たのだ。其處で此場合には、自分の役目のやうに思つて、引受けたのであつた。

「イギリス行きます、何の爲めありますか」

遠藤はすぐに答へた。

「ネビゲーションあります」

「ネビゲーション、は、ア、ネビゲーション、は、ア……」

ケセウイツキは、深く考へ込んだ。ネビゲーションは、航海の義である。只だネビゲーションでは、解らない。それで、ケセウイツキは、考へて居るのだ。遠藤は、疾くも察して、グツと兩手を突出し、體を動かして、船を漕ぐ



眞似をして見せながら、また重ねて、「ネビゲーシオン」といふた。ケセウイツキは、初めて首肯しながら、

「おう、解りました。ネビゲーシオン、よろしい、解りました」

遠藤は、大得意になつて、肩を、聳やかして居る。それから食事も済んで、一同は、船へ引返して来た。

「どうぢや。拙者の答へて、漸く夷人も安心したらしい。何でも覺えて居て、悪い事はないぞ。イギリスの語を、拙者が、知つて居たのが、此場合に、役に立つとは、意外であつた」

「えらい、貴様のお蔭で、話の都合も、よく運びがついたやうぢや」

また一しきり、遠藤が、英語の事について、さかんに吹き立てる。何も知らない四人は、只だフン／＼いふて、聞

いて、居る丈の事であつた。

上海から、英國行の船は、今の所二隻ある。一はホワイトアツターと謂ふて、他の一隻は、ベケチスと謂ふのであ

る。前にもいふた通り、いづれも荷物を積む船で、客室の設けはないから、一時に五人を、乗せる事は出来ない。二

隻へ別けて、乗せる事にして、ホワイトアツター號へは、野村、遠藤、山尾の三人を乗せて、ベケチス號へは、井上、

伊藤の兩人が、乗込む事になつた。荷積の都合で、ホワイトアツター號は、五六日前に出帆するから、京都以來、い

ろ／＼の苦勞を、一途にして来た五人は、此處で、別れる事になつた。半歳餘りは、何うしても顔を見る事は出来な

い。海上の事だから、萬一の事があれば、これが、此世の別れになるかも知れぬ。流石に五人は、心細い感もしたの

であつたが、そこは男子の事、口には、強い事をいふて、威勢よく別れ／＼に、二隻へ分乗する事になつた。

人には、運不運があつて、同じやうに苦勞して、同じやうに功名をなしても、其人の名が、後世にまで傳へられる

のと、一代限りで、消えて了ふのとある。先發した三人のうちで、野村は、歸朝の後、最初の鐵道局長になつて、

東京横濱間の汽車を完成した、といふ點で、今は東京驛の前に、大きな銅像になつて居て、子爵井上勝といへば、大

概の人に、知られて居るが、遠藤は、大阪の造船局長を勤めたけれど、早く死んだ爲めに、今では世間から、忘れ

られて了つた。山尾は、矢張り子爵になつて、樞密院の椅子に倚つて居たが、その死後は、單に御殿山の大地主とし

四

て、知られて居るのみである。此三人に比べると、伊藤や井上は、トウ／＼國家の元老として、明治年間に、第一流

の政治家の名を得て、殊に多くの人から、尊敬を受け、今は亡き人の數にはいつても、猶ほ屢次、その名を誦はれて

居る。これは、本人の働きにも依るが、運の強い所もあるのだ。

ベケチス號に、荷積も了つて、伊藤と井上は、いよ／＼乗込む事になつた。斯うなると、一日も速く出帆して、

ロンドンの状況も見たいし、先發の三人にも、逢ひ度く思ふが、海上に、四五ヶ月を費やすか、と思へば、多少の心

配も伴つたのであつた。

ケセウイツキは、出帆の間に、やつて来て、種々の注意を與へてくれた。船は、愈よ上海を離れて、外洋へ出た。

波は次第に荒くなつて、船の動揺が、體に當るやうになつた。水夫は忙しさに、甲板を駆け歩き、帆は、風を孕ん

で、船足は、漸く急になつて来た。二人は、欄干に倚れて、ボンヤリと、波の動くのを見て居た。

「ジャニー／＼」

と、船長は、大きな聲で呼んだが、二人は、猶ほボンヤリして居た。横濱から乗つた、船に比べると、此船は大きい

けれど、七百トンばかりである。而かも、帆前船だから、風の方位がよければ、船足は速いが、それでも、蒸汽船に

比べると、霄壤の差がある。使はれて居る水夫は、いづれも遠洋航海で、充分に鍛へ上げてあるから、色の黒い、頑

健な奴ばかりであつた。

「ジャニー／＼」

漸く二人が、此呼聲に氣のついた時は、疳積持ちの船長は、水夫長と共に、二人の前へ、来て居た。二人は向直つ